物を思はしめざる。是を以て半夜寢ねられず、獨り展轉反側するのみ。夫れ人の安危禍福は豫め測るべからず。放達隱居は好む所なるも、徒食驕慢は余の取らざる所なり。古人はいさ知らず、余は余が性の好む所に從ひ、賓至り朋來らば、共に杯を銜み筆を揮ひ、時に高樓に登り淸淺を涉りて行樂せん。少年は再び來らず。たとひ功名を金石に勒し、形像を丹靑に圖するも、皆長久なる能はず。功名を建つるは不用に屬せり。ただ當に歡樂を勉め、衰老の歎を貽すべからず。歌詠に因つて此詩を賦し、以て親狎の人に贈る。

臨終の詩

(一)歐陽堅石

(二)伯陽は西戎に適き孔子は(三)蠻に居らんと欲す。苟も四方の志を懷かば、(四)所在游盤すべし。況んや乃ち(五)屯蹇に遭

【一】歐陽堅石。名は建、字は堅石、晉の渤海の人、石崇の外甥なり、馮翊太守たり、趙王倫の關中を擾亂するや、建毎に匡正して從はず、私に楚王偉を迎へて之を立てんと欲す、是に由りて隙あり、倫の簒立するに及び、淮南王允に勸めて倫を誅せんとす、未だ行はずして事覺る、倫乃ち建及び母妻を收め、少長となく皆斬す、建刑に臨んで是詩を作る。

【二】伯陽。老子なり。姓は李、字は伯陽、周の無道なるを見て遂に胡に入る、卽ち西戎なり。

【三】蠻。論語に子九夷ニ居ラント欲スとあり。夷は卽ち蠻なり。

【四】所在。到る處。游盤は遊樂なり。

【五】屯蹇。艱難なり。

ひ、(六)顚沛して災患に遇ふをや。(七)古人は機兆に達す、馬に策うちて近關に游ぶ。(八)咨余沖にして且つ暗、責を抱いて微官を守り、(九)潛圖密に已に構へ、此(一〇)禍福の端を成す。(一一)恢恢たる六合の間、四海一に何ぞ寬き。(一二)天網紘綱を布き、足を投じて安きを獲ず。松栢(一三)隆冬に悴み、然る後歲寒を知る。(一四)太行の險を涉らずんば、誰か斯路の難きを知らん。直僞事に因りて顯れ、人情豫め觀難し。窮達(一五)定分あり、慷慨して復た何をか歎かん。上は慈母の恩に負き、(一六)痛酷して心肝を摧き、下は憐む所の女を顧ひ、(一七)惻惻として心中に酸む。二子弃てて遺るるが若し、念ふに皆(一八)凶殘に遘ふ。一身の死を惜まず、此を惟ひて循環の如し。紙を執れば五情塞り、筆を揮へば涕(一九)汍瀾たり。

【大意】昔老子は西戎に適き、孔子は九夷に居らんと欲す。苟も四方の志を抱く者は隨處に遊樂すべきなり。況んや世路の難に遇ひ災患に罹るをや。蘧伯玉は機先を達觀し、近關より衞國を去れ

【六】顚沛。傾覆なり。

【七】古人。衞の蘧伯玉をいふ。衞の大夫孫林父將に亂を作さんとす、蘧伯玉遂に去り、近關より出づ。機兆は事の起る前兆。

【八】沖。童なり。

【九】潛圖。趙王倫を廢せんとの陰謀なり。

【一〇】禍福。禍なり。福の字は意極めて輕し。

【一一】恢恢。廣大なる貌。六合は上下四方をいふ。

【一二】天網。趙王倫の忠良の士を捕ふるに喩ふ。紘綱は網を繫ぐ索なり。

【一三】隆冬。嚴冬なり。

【一四】太行。山の名。

【一五】定分。定まれる分限。

【一六】痛酷。苦痛なり。

【一七】惻惻。悲傷の貌。

【一八】凶殘。賊害なり。

【一九】汍瀾。淚の流るる貌。

り。余幼稚にして暗愚、微官を守りて去就を知らず、陰謀を構へて此禍に罹る。今や趙王倫忠良を網捕し、將に之を害せんとす。足を投ずるに處なし。松栢の凋むを見て歳寒を知るべく、世亂れて忠良始めて見はる。世路の難は太行の險よりも甚し。然も人情の曲直は事實に因つて分明なり。窮達もとより定分あり。今に及んで何をか歎かん。ただ慈母の恩に背き妻女の憐むべきを思へば、心悲痛して忍ぶべからず。思ふに二子亦危害に遇ひしなるべし。吾が身は惜むに足らざれども、此を思へば憂愁の情窮りなし。今紙筆を執りて之を賦せんとすれば、涕流れて止むる能はず。

哀傷

(一)幽憤の詩

嗟余(二)薄祜にして、少うして(三)不造に遭ひ、(四)哀煢にして識なく、越に(五)襁褓に在り。母兄(六)鞠育し、慈ありて威なし。愛を恃んで姐を肆にし、訓へず師あらず。爰に(七)冠帶に及ぶも、寵を憑んで自ら放にし、心を抗げて古を希ひ、

嵇叔夜

【一】幽憤。嵇叔夜、呂安の事の爲に詩を作りて自ら責む。呂安の事は思舊賦に見ゆ。
【二】薄祜。祜は福なり。叔夜少うして父を失へるをいふ。
【三】不造。造は成なり。家道の成らざるをいふ。
【四】哀煢。孤獨なり。
【五】襁褓。小兒を背上に約する紐。
【六】鞠育。養育なり。
【七】冠帶。元服すること。

其の尚ふ所に任す。好を老莊に託し、物を賤んで身を貴ぶ。志(八)樸を守るに在り、素を養ひて眞を全うす。曰に余不敏にして、善を好み人に闇し。(九)子玉の敗るる、屢(一〇)惟塵を增す。(一一)大人含弘にして、垢を藏し恥を懷す。民の僻多き、政己に由らず。惟れ此(一二)褊心、(一三)臧否を顯明し、感悟して愆を思ひ、(一四)怛として創痏の若し。其過を寡くせんと欲すれども、謗議沸騰す。性物を傷らざるに、頻に怨憎を致す。昔は(一五)柳惠に慙ぢ、今は(一六)孫登に愧づ。內は(一七)宿心に負き、外は良朋に惡づ。仰いで(一八)嚴鄭を慕ひ、道を樂んで閑居す。世と營むことなければ、神氣(一九)晏如たり。咨予淑からず、(二〇)嬰累を虞ること多し。天より降るにあらず、寔に頑疎に由る。理弊れて患結び、卒に(二一)囹圄を致す。(二二)對答鄙訊、此の(二三)幽阻に繫がる。實に(二四)訟寃に

【八】樸。質朴なり。
【九】子玉。楚の大夫なり。
【一〇】惟塵。詩經に大車ヲ將フルナカレ、コレ塵冥冥タリとあり。鄭玄曰く、大夫小人を進舉し、たまたま自ら憂患をなすに喩ふと。
【一一】大人。天子なり。
【一二】褊心。狹小の心。叔夜自ら謙して言ふ。
【一三】臧否。善惡なり。
【一四】怛。傷み悲むこと。創痏はキリキズ。
【一五】柳惠。柳下惠なり。三たび黜けられども怨色なし。
【一六】孫登。人名。叔夜初め藥を中山の北に採り、隱者孫登を見、之と言はんと欲す、登默然として對へず、年を踰へて將に去らんとす、康曰く先生竟に言ふなきかと、登乃ち曰く、子は才多くして識寡し難いかな人の世に免るること。
【一七】宿心。素志なり。
【一八】嚴鄭。嚴君平、鄭子眞、皆道を樂んで隱居せし人。
【一九】晏如。無事なり。
【二〇】嬰累。罪に罹ること。
【二一】囹圄。獄舍なり。
【二二】對答。訊問に答ふること。鄙訊は訊問を鄙むなり。
【二三】幽阻。牢獄なり。
【二四】訟寃。謗訟の寃濫なること。

恥づ。時我と與ならず。義直なりといふと雖も、神辱められ志沮む。身を(二五)滄浪に澡ぐも、豈云に能く補あらんや。

【大意】余は不幸にして、幼少の時、父を失ひ、孤獨にして襁褓の中に在り。母と兄とに養育せられ、ただ慈愛を蒙りて明嚴の訓戒を受けず。故に愛を恃みて驕恣なり。長じて元服を加ふるも、尚ほ母兄の寵を憑みて放逸なり。心を擧げて古人の道を慕ひ、己の好む所に任せ、老莊の道を脩め、物を賤み身を貴び、質朴を守りて天眞を全うせんことを期す。ああ余不敏にして善道を好むも人事に暗し。(呂安と交りしをいふ)今や楚の令尹子文が子玉を擧げて令尹となし、屢失敗を招けるが如し。(鍾會叔夜を怨む。時に呂安の兄巽、安が妻と姦通す。巽大將軍の長史たり。遂に誣を構へて將に安を害せんとす。鍾會大將軍と善し。屢〻大將軍に叔夜を誅せんことを勸め、呂安と同罪にす。大將軍呂巽を用ひて長史となすは、恰も子文が子玉を用ひて當らざるが如し。呂巽、鍾會皆小人なり。大將軍其言を用ふるは、卽ち惟塵の刺に當る)天子含弘の德あり、垢穢を包藏して吾が過を察せず。ただ左右の邪臣事を用ひ、政天子の己に由らざらしめ、無辜の人をして罪を得しむ。吾が狹小の心朝廷の善惡を明にし、感悟して其過を思へば、痛割傷の如し。自ら其過を寡くせんとすれば、謗議沸騰す。吾が性物を傷害

【二五】滄浪。川の名。

せざるに、何ぞ頻に怨憎の辭を招くや。實に吾が素志に違ひ亦友朋に愧づる所なり。偏に嚴鄭の隱居して道を樂み、世と交らず心常に無事なるに倣はんとす。然も我不善にして此の罪累に罹る。思ふに此罪累たる、天より降れるにあらず、皆我が頑疎の致す所なり。邪臣私情を用ひ、政理の道を擁蔽し、遂に患難を結成して我を獄に投ずるに至る。謗訟の寃濫なるに恥づるも、時我に利あらず。自ら義直なりといふも、獄吏の辱を如何せん。心志已に辱を蒙る。身を滄浪の水に洗ふとも、何の補あらんや。

(二六)噲噲たる鳴鴈、翼を奮ひて北に游び、時に順つて動き、意を得て憂を忘る。嗟我れ憤歎し、曾て能く儔きことなし。事願と違ひ、この(二七)淹留に遘ふ。窮達命あり、亦又何をか求めん。(二八)古人言ふあり。善も名に近づく莫れと。時に奉じて恭默すれば、咎悔生せず。(二九)萬石周愼にして、親を安んじ榮を保てり。世務(三〇)紛紜して、祇に予が情を攪す。安樂必ず誡むれば、乃ち利貞を終る。(三一)煌煌たる靈芝、一年に三たび秀づ。予獨り何をかする、志あれども就らず。難に懲りて復せんことを思へば、心焉に內に疚む。庶はくは將來を勗め、馨もなく臭もなけん。

【二六】噲噲。鴈の聲。鴈は春北に往き秋南に歸る。

【二七】淹留。囚繫せられて久しく留ること。

【二八】古人。莊子なり。莊子に善ナナスモ名ニ近ヅクナカレ惡ナナスモ刑ニ近ヅクナカレとあり。

【二九】萬石。漢の石奮、父子五人各二千石なり。天子號して萬石君となす。

【三〇】紛紜。亂るるなり。

【三一】煌煌。光る貌。靈芝は仙草なり。一年に三たび花咲く、之を服すれば長生す。

薇を。(三)山阿に采り、(三)髮を巖岫に散じ、永嘯長吟して、性を頤ひ壽を養はん。

【大意】春鴈飛んで北に往き、時節に順ひ意を得て憂を忘る。われ獨り自ら嗟歎し、能く之と比するなし。事志と違ひ遂に囚繫せられたるも、窮達は天命の致す所なれば、苟も免れんことを求めず。莊子曰く、善をなすも名に近づく勿れと。時に隨つて恭默すれば、禍悔起るなし。彼の萬石君父子皆周愼謹密にして、親を安んじ榮位を保てり。今世亂れて紛紛たるも、安樂の時自ら誡むれば、必ず利貞を終るを得。靈芝一年に三秀す。吾之を服して長生を計れども志未だ就らず。んと欲すれば、心之を炊む。ただ將來を勉めて譽もなく毀もなからしめ、巖穴の間に隱居し、性を養ひ壽を全うせんのみ。

【三】山阿。山隈なり。
【三】髮。冠冕の爲に拘束せられざるを散髮といふ。

(二)七哀の詩

曹子建

明月高樓を照し、流光正に徘徊す。上に愁思の婦あり、悲歎して餘哀あり。借問す歎ずる者は誰ぞ。言ふ是れ(三)宕子の妻。君行きて十年を踰

【一】七哀。呂尙云く痛ンデ哀ミ、義ニシテ哀ミ、感ジテ哀ミ、怨ンデ哀ミ、耳目聞見シテ哀ミ、口嘆ジテ哀ミ、鼻酸シテ哀ム、之ヲ七哀トイフと。
【二】宕子。宕一に蕩に作る、蕩子は放蕩者なり。

え、孤妾常に獨棲す。君は淸路の塵の若く、妾は濁水の泥の若し。浮沈各〻勢を異にす。會合何れの時にか諧はん。願くは(三)西南風となり、長逝して君が懷に入らん。君が懷良に開かずんば、賤妾當に何にか依るべき。

【大意】子建は文帝の同母弟なれども、今は浮沈勢を異にし、兄弟和親せず。故に孤妾を以て自ら喩へ、文帝を以て夫に喩へ、此詩を作れるなり。明月高樓を照し、流光恰も水の漂ふが如し。樓上に愁婦あり、悲歎して餘哀を含む。其名を問へば蕩子の妻なりといふ。夫既に去つて十年歸らず、妾獨り空閨を守る。之を譬ふれば夫は淸路の塵の如く、妻は濁水の泥の如し。各〻浮沈の勢を異にし相遇ふの期なし。西南風となりて夫の懷に入らんことを願へども、夫の懷若し開かずんば、歸依する所なし。

(二)七哀の詩二首

王仲宣

(三)西京亂れて象なく、(三)豺虎方に患を遘す。復た中國を棄てて去り、身を遠ざけて(四)荆蠻に適く。親戚我に對して悲み、朋友相追攀す。門を出れども見る所なく、白骨平原を蔽ふ。路に飢婦人あ

【一】七哀。前詩に見ゆ。
【二】西京。長安なり。
【三】豺虎。羣盜に喩ふ。
【四】荆蠻。荆州をいふ。

【三】西南風。西南は坤地なり。坤は妻の道なり。此詩雍丘に在る時の作なり、雍丘は魏都の西南に在り、故にいふ。

り、子を抱きて草間に棄つ。顧みて號泣の聲を聞き、涕を揮ひて獨り還らず。未だ身の死處を知らず、何ぞ能く兩ながら相完からん。馬を驅り之を棄てて去る。㊄此言を聽くに忍びず。南のかた㊅霸陵の岸に登り、首を廻らして長安を望む。悟る彼の㊆下泉の人、㊇喟然として心肝を傷ましむるを。

【大意】漢末の亂を避け荆州に赴く時の事を述ぶ。漢末羣盜起りて天下騷亂す。予因つて中原の地を去り、難を荆州に避けんとす。親戚朋友相纏ひて別を悲む。門外に出づれば唯白骨の累累たるを見るのみ。途に一婦人あり幼兒を草間に棄つ。其悲鳴を聞くも、唯回顧して、涙を拭ふのみ。復た還り救ふことをなさず。因つて婦人に問へば、婦人答へて曰く、吾が身すら救ふ能はず、何ぞ母子相共に完きを得んやと。予此言を聽くに忍びず、馬を驅りて疾く去り、霸陵に登りて長安を顧望し、亂に死せし者の地下に悲めるを悟りぬ。

荆蠻は我が鄉にあらず、何爲れぞ久しく㊈滯淫せん。舟を方べて大江を溯れば、日暮れて我が心を愁へしむ。山岡㊉餘暎あり、㊉㊀巖阿重陰を增す。狐狸馳せて穴に赴き、飛鳥故林に翔る。流波淸響を激し、㊉㊁猨猴岸に臨んで吟ず。迅風裳袂を拂ひ、白露衣襟を霑す。獨夜寐ぬる能はず、衣を攝めて起つて琴を撫す。㊉㊂絲桐人情を感ぜしめ、我が爲に悲音を發す。㊉㊃羈旅終極なく、憂思壯にして任へ難し。

【大意】荆州は我が故鄉にあらざれば、永く留るべきにあらず。舟を竝べて大江を泝れば、日暮の景益我を愁へしむ。日將に沒せんとして餘光を映じ、巖曲に重陰を垂れ、狐狸は穴に歸り飛鳥は塒に急ぎ、水波石に激し、猿岸上に鳴き、疾風袂を吹き、白露衣を沾す。夜寐ぬる能はず、起つて琴を彈ずれば、琴亦哀韻を發す。ああ我れ他鄉に放浪して歸期なし。憂思心に滿ちて自ら任へ難し。

【五】此言。婦人の言なり。
【六】霸陵。地名。
【七】下泉。黃泉なり。戰死せる人をいふ。
【八】喟然。なげく貌。
【九】滯淫。滯留なり。
【一〇】餘暎。暎は映なり。
【一一】巖阿。巖曲なり。
【一二】猨猴。猿なり。

【三】絲桐。琴をいふ。
【四】羈旅。行旅なり。

七哀の詩二首

㊀張孟陽

㊁北芒何んぞ纍纍たる、㊂高陵四五あり。借問す誰が家の墳ぞと。皆云ふ漢の世主と。㊃恭文遙に相望み、㊄原陵鬱として㊅膴膴たり。㊆季世喪亂起り、賊盜豺虎の如し。㊇毀壞一

【一】張孟陽。張載、字は孟陽、晉の武邑の人。
【二】北芒。山の名。洛陽の北に在り、王公貴人多く此山に葬る。纍纍は重なる貌。
【三】高陵。高き墓。
【四】恭文。後漢の孝安帝の陵を恭陵といひ、靈帝の陵を文陵といふ。
【五】原陵。光武帝の陵の名。
【六】膴膴。草木多き貌。
【七】季世。末世なり。
【八】毀壞。陵墓の土を削り取ること。一抔は一掬なり。

抔に過ぎ、(九)便房幽戸を啓く。(一〇)珠柙玉體を離れ、珍寶(一一)剽虜せらる。(一二)園寢化して墟となり、(一三)周墉遺堵なし。(一四)蒙龍として荆棘生じ、(一五)蹊逕童豎登り、狐兎其中に窟し、蕪穢して復た掃はず、(一六)頽隴竝に墾發せられ、(一七)萌隸農圃を營む。昔は萬乘の君たり、今は丘山の土となる。彼の(一八)雍門の言に感じ、(一九)悽愴して往古を哀む。

【大意】北芒山上陵墓壘壘として重る。之を問へば皆漢帝の陵にして、樹木鬱鬱として茂れり。漢の末羣盜竝び起り、勢猛虎の如く、帝陵を發きて寶器を掠め、陵廟化して丘墟となり、垣牆崩れて完からず。荆棘生じ雜草茂り、狐兎棲み牧童登り、既に崩されて田圃となれるあり。昔は萬乘の君たりしも、今や山上の土となりぬ。因つて雍門周の言に感じ、坐に往時を悲みぬ。

秋風　(一〇)商氣を吐き、(二一)蕭瑟として前林を掃ふ。(二二)陽鳥和響を收め、寒蟬餘音なし。白露(二三)中夜に結ぶ。

【九】便房。冢中の室なり。幽戸は地下の戸。
【一〇】珠柙。玉のはこ。
【一一】剽虜。掠め取らるること。
【一二】園寢。陵傍の廟。
【一三】周墉。周圍の墻。遺堵は殘れる墻。
【一四】蒙龍。草木の蔽へる貌。
【一五】荆棘はイバラ。
【一五】蹊逕。こみち。童豎は兒童。
【一六】頽隴。くづれたる塚。
【一七】萌隸。賤民なり。
【一八】雍門。雍門周なり。周孟嘗君に謂つて曰く、君が百歳の後、高臺既に傾き、曲池も又平ならん、豈悲しからずやと。
【一九】悽愴。悲傷すること。
【二〇】商氣。秋氣なり。
【二一】蕭瑟。秋風の聲。
【二二】陽鳥。陽に隨ふの鳥。鴻鴈の類なり。
【二三】中夜。一本に朝夜に作る。

び、木落ちて(二四)柯條森たり。(二五)朱光北陸に馳せ、(二六)浮景忽ち西に沈む。顧望して見る所なく、唯(二七)松柏の陰を覩る。(二八)肅肅たる高桐の枝、翩翩として孤禽棲む。仰いで(二九)離鴻の鳴くを聽き、俯して(三〇)蜻蛚の吟ずるを聞く。哀人は感傷し易く、物に觸れて悲心を增す。(三一)丘隴日已に遠く、(三二)纏緜として彌〻思深し。憂來りて髮を白からしむ。誰か云ふ愁任ふべしと。徘徊して長風に向へば、淚下りて衣襟を霑す。

【大意】秋風起りて林木を掃ひ、鴻鴈も聲をひそめ、寒蟬も影を止めず、白露結んで落木蕭蕭たり。日は北陸を馳せ將に西に沈まんとす。四顧するも見る所なく、ただ墓上の松柏と、高桐枝葉凋み、孤禽之に棲むを見る。仰いでは離雁の聲を聞き、俯しては蟋蟀の聲を聞く。余此景を見聞して益〻悲を增し、古人を思ふこと轉た切なり。憂愁して自ら任へず。長風に向つて淚を濺ぎぬ。

(二)悼亡の詩三首

潘安仁

【一】悼亡、妻の死を傷むなり。

【二四】柯條。枝なり。森は寒風の振ふ聲。
【二五】朱光。日なり。續漢書に日北陸ヲ行ク、之ヲ冬トイフとあり。
【二六】浮景。運行する日輪。
【二七】松柏。丘墓に植うる木。
【二八】肅肅。枝葉の縮栗する貌。
【二九】離鴻。羣を離れたる孤鴈。
【三〇】蜻蛚。蟋蟀なり。こほろぎ。
【三一】丘隴。墓なり。ここには先人をいふ。
【三二】纏緜。憂思多きをいふ。

(二)荏苒として冬春謝り、寒暑忽ち流易す。(三)之子窮泉に歸し、(四)重壤永く幽隔す。(五)私懐誰か克く從はん。(六)淹留するも亦何の益あらん。(七)僶俛して朝命を恭み、心を廻らして(八)初役に反る。廬を望んで其人を思ひ、室に入りて歴し所を想ふ。(九)幃屏髣髴たるなく、(一〇)翰墨餘跡あり。(一一)流芳未だ歇るに及ばず、(一二)遺挂猶ほ壁に在り。(一三)悵怳として存する或るが如く、(一四)周遑として忡へて驚惕す。彼の(一五)翰林の鳥、雙栖して一朝に隻なるが如く、彼の游川の魚、(一六)比目中路に析るるが如し。春風隙に緣りて來り、(一七)晨霤簷を承けて滴る。(一八)寢息何の時か忘れん。沈憂日に盈積す。庶幾くは時に衰ふるあらば、(一九)莊缶猶ほ擊つべし。

【大意】既に葬りて後、官に之かんと欲する時の情景を述ぶ。歳月移り易く、妻死して既に寒暑を歴、既に黄泉の客となりて、幽明永く相隔る。喪既に闋り一年の休暇も盡きたれば、私情を抑へて

【一】荏苒。歳月の去る貌。
【二】之子。妻を指す。窮泉は黄泉なり。
【四】重壤。深き土の中。
【五】私懐。仕官せざらんとする私情。
【六】淹留。躊躇といふが如し。
【七】僶俛。俯仰なり。
【八】初役。前官の任務。
【九】幃屏。帳帷及び屏風。髣髴は相似たる貌。
【一〇】翰墨。妻の作りし文書。
【一一】流芳。妻の衣に薫ぜし香氣。
【一二】遺挂。平生の瓶用品の尚ほ壁に懸れるもの。
【一三】悵怳。失意の貌。
【一四】周遑。周章惶懼すること。
【一五】翰林。羽を振ひて林中に飛ぶこと。
【一六】比目。魚の名。此魚比せざれば行かず。中路は中途。
【一七】晨霤。晨は朝、霤はアマダレ。
【一八】寢息。漸くやむこと。
【一九】莊缶。缶は瓦器なり。莊子の妻死す、莊子缶を擊ちて歌ふ。

官に赴かんと欲し、廬を望み室に入りて亡妻を思へば、帷帳の間其人を見ざれども、其の文書は儼として遺り、衣薫尚ほ存し、遺愛壁に懸れり。之を見ては尚ほ生存せるかと疑はれ、周章して驚嘆す。然も音容復た接すべからず。吾が身は番を離れし鳥の如く、匹を失ひし魚の如し。折しも春風戸隙を漏れて來り、晨霤簷を傳りて落ち、坐に悲を增す。この憂いつか忘れん。幸に情の衰ふるに至らば、莊子の如く缶を擊ちて歌ふこともあらんと、強ひて排悶の語を以て結ぶ。

(一〇)皎皎たる窓中の月、我が室の南端を照す。(一一)清商秋に應じて至り、(一二)溽暑節に隨つて闌なり。(一三)凜凜として涼風升り、始めて夏衾の單なるを覺ゆ。豈(一四)重纊なしと曰はんや、誰と與にか歲寒を同うせん。歲寒與に同うするなく、(一五)朗月何ぞ朧朧たる。(一六)展轉して枕席を眄みれば、(一七)長簟牀の空しきに竟る。牀空うして清塵委り、室虛しうして悲風來る。獨り(一八)李氏の靈、髣髴として爾の容を覩るなし。衿を撫して長く歎息すれば、覺えず涕胸を霑す。胸を霑して安んぞ能く已まん。悲懷中より起る。(一九)寢興目形を存し、遺音猶ほ耳に

【一〇】皎皎。明なる貌。
【一一】清商。秋風なり。
【一二】溽暑。むし暑きこと。闌は微なり。
【一三】凜凜。涼しき貌。
【一四】重纊。厚き綿入。
【一五】朗月。明月なり。朧朧は月光の貌。
【一六】展轉。ねがへりすること。
【一七】長簟。長き敷物。
【一八】李氏。桓子新論に漢ノ武帝幸セシ所ノ李夫人死ス、方士李少君言フ能ク其神ヲ致サント乃チ夜燭ヲ設ケ幄ヲ張リ帝ヲシテ他帳ニ居リテ遙ニ見シム、好女ノ夫人ノ狀ニ似タル者、帳ヲ還リテ坐スとあり。
【一九】寢興。ねても起きても。

在り。上は(三〇)東門吳に慙ぢ、下は(三一)蒙莊子に愧づ。詩を賦して志を言はんと欲するも、此志具に紀し難し。命や奈何すべき、長く戚へて自ら鄙からしむ。

【大意】明月我が室を照し、暑氣漸く微にして涼風起り、始めて衣衾の單なるを感ず。重纊なきにあらざれども、共に之を同うする者なし。展轉反側して枕席を見れば、空牀塵積り、ただ悲風の來り訪ふのみ。吾が妻、李夫人の靈なく、復た其形を見るべからず。長嘆して涙を濺ぐの外なし。起臥ともに其形を見るが如く、其聲を聞くが如し。哀傷の感古人に慚づるあり。詩を賦して此情を述べんとすれども能はず。常に憂へて自ら鄙からしむるのみ。

(三二)曜靈天機を運らし、(三三)四節代〻遷逝す。(三四)凄凄として朝露凝り、(三五)烈烈として夕風厲し。奈何ぞ(三六)淑儷を悼む。儀容永く(三七)潛翳す。此を念ふこと昨日の如きも、誰か知らん已に歳に卒ふとは。服を改めて朝政に從ふも、哀心(三八)私制を寄す。(三九)茵幬故房に張り、(四〇)朔望爾に臨んで祭る。爾の祭祀幾時ぞ、朔望忽ち復た盡き、(四一)衾裳一たび毀撤し、(四二)千載復た引ねず。

【三〇】東門吳。列子に魏ニ東門吳トイフ者アリ、子死スレドモ憂ヘズとあり。
【三一】蒙莊子。莊子は蒙縣の人。妻死すれども哭せず。
【三二】曜靈。日なり。
【三三】四節。春夏秋冬なり。
【三四】凄凄。寒涼の貌。
【三五】烈烈。風の急なる貌。
【三六】淑儷。善良なる妻。
【三七】潛翳。隱れて見えざること。
【三八】私制。私の禮法。
【三九】茵幬。床帳なり。故房はもとの閨房。
【四〇】朔望。一日と十五日。
【四一】衾裳。祭の時の衣裳。毀撤は除き棄つること。
【四二】千載。千年なり。

(四三)亹亹として朞月周り、(四四)戚戚として彌〻相愍む。悲懷物に感じて來り、泣涕情に應じて隕つ。駕して言に(四五)東皐に陟り、墳を望んで思(四六)紆軫す。墟墓の間を徘徊し、去らんと欲するも復た忍びず。徘徊して去るに忍びず、(四七)徙倚して步して(四八)踟躕す。落葉(四九)埏側に委り、(五〇)枯茇墳隅を帶る。孤魂獨り(五一)煢煢たり。安んぞ知らん靈と無と。心を投じて朝命に遵ひ、涕を揮つて强ひて車に就く。誰か(五二)帝宮を遠しと謂はん、路極りて悲餘あり。

【大意】時遷り節換りて、今や西風白露の秋となる。われ亡妻を悼んで形の見るべからざるを悲む。其死昨日の如きも既に一年の昔となりぬ。喪服を改めて朝政に從へども、尙ほ朔望には私禮を以て其靈を祭る。然も靈筵の被裳一たび除きて、復た重ねて陳設するの時なし。ただ遺物を見て涙を落すのみ。乃ち東岡に登りて其墓を望み、徘徊して去るに忍びず。落葉墓道を埋め枯草墳隅を繞るを見て、絕えて其形象を見ず。自ら靈の有無を疑はざるを得ず。やがて情を抑へて朝命に遵はんとし、涙を拭ひて車に乘り、既に帝城に至るも餘哀尙ほ已まず。

【四三】亹亹。漸く進む貌。朞月は一年の喪期なり。
【四四】戚戚。憂ふる貌。
【四五】東皐。東方の岡。
【四六】紆軫。痛思して心の舒びざるをいふ。
【四七】徙倚。佇立すること。
【四八】踟躕。進まざる貌。
【四九】埏側。墓道なり。
【五〇】枯茇。茇は草の名。
【五一】煢煢。孤獨の貌。
【五二】帝宮。帝城なり。

謝靈運

(一)廬陵王墓下の作

曉月に(二)雲陽を發し、落日に(三)朱方に次る。悽を含んで廣川に泛び、淚を灑ぎて(四)連岡を眺る。眷みて言に(五)君子を懷ひ、沈痛して中腸結ぼる。道消えて憤懣を結び、運開いて悲涼を申ぶ。神期恆に存するが若く、德音初めて忘れず。(六)徂謝永久なり易く、(七)松栢森として已に行る。(八)延州心許に協ひ、(九)楚老蘭芳を惜む。劍を解くも竟に何ぞ及ばん、墳を撫して徒に自ら傷む。(一〇)平生若人を疑ふ。(一一)通蔽互に相妨ぐ。理感は情の慟を深うす。定めて識の將ふ所にあらず。(一二)脆促良に哀むべし。(一三)天枉特に常を兼ぬ。一たび(一四)往化に隨つて滅ぶ。安んぞ用ひん空名に封ぜらる。季子上國に使し道に徐君に過る、徐君其寶劒を愛し、言はざれども心に之を許す、季子心に之を欲す、季子歸途徐を過れば徐君既に死せり、因つて其劒を墓に懸けて去る。

【一】廬陵王。宋の武帝の子義眞、廬陵王に封ぜらる、未だ藩に就かざるに武帝崩ず、時に少帝位を嗣ぎて遊戲度なし朝廷廢立の事を謀る、次廬陵王にあり、徐羨之等奏して王を廢して庶人となし新安郡に徙し、又人を遣して王を殺さしむ。

【二】雲陽。地名、曲阿なり。

【三】朱方。地名、丹徒なり。

【四】連岡。青烏子相冢書に天子ハ高山ニ葬リ諸侯ハ連崗ニ葬ルとあり。

【五】君子。廬陵王をいふ。

【六】徂謝。死亡なり。

【七】松栢。墓上の木。

【八】延州。地名、延陵季子此

【九】楚老。漢書に龔勝ハ楚人ナリ、勝卒ス、一老父アリ來リ弔ス、既ニシテ曰ク、アア蕙ハ香ヲ以テ自ラ燒キ、膏ハ明ヲ以テ自ラ銷ス、龔先生天年ヲ夭ス、吾ガ徒ニアラザルナリト、遂ニ趨リテ出ヅとあり。

【一〇】若人。廬陵王をいふ。

【一一】通蔽。通は聰明にして古を好むをいふ。蔽は羣邪と協

の揚るを。聲を擧げて泣已に灑ぐ。長歎して章を成さず。

【大意】曉に雲陽を發し夕に朱方に宿る。途に舟を泛べて大川を渡り、廬陵王の墓を望んで淚を灑ぎぬ。王の事を追想すれば悲傷の情胸に滿つ。王は道行はれずして憤懣を結び、(羣佞の妨ぐる所となりて廢せられし事をいふ)後大運開けて積日の悲愁を申ぶるを得たり。(文帝位に卽き王を追崇して侍中王となしし事をいふ)吾が心に於て尙ほ生存するが如く、德音を蒙りし事を念ひ、今に至るまで忘れず。王死して日を歷ること久しく、墓上の松栢今既に森森たり。王の生時には忠を以て事へんことを期せしも、今既に及ぶ能はず徒に哀傷するのみ。王は聰明通達の德あれども、羣邪と協はずして遂に滅亡を取る。之を思へば心痛みて任ふる能はず。死亡は悲むべきも、橫死は特に哀むべきなり。今既に死して形體なし、爵位を追贈せられ、虛名を揚ぐるも何の益あらん。余今聲を擧げて悲嘆し、心錯亂して文章を成さず。

【一】廬陵王墓下。延年宋の文帝に從ひて高祖(武帝)の陵を拜し此はず自ら滅亡するをいふ。

【二】脆促。人生の果敢なきこと。

【三】夭枉。枉げて殺戮せらること。

【四】往化。死亡の運命。

(二)陵廟を拜する作

顏延年

周德(一)明祀を恭み　漢道(二)光靈を尊ぶ。哀敬祖

【一】陵廟。延年宋の文帝に從ひて高祖(武帝)の陵を拜し此

廟を隆にし、㉔崇樹園塋に加ふ。㉕休命の始に事ふるに逮び、迹を投じて王庭に階む。㉖陪廟して天顧を廻らし、㉗讌に朝して聖情を流く。早く㉘服して身義重く、晩く㉙達して生戒輕し。

(一〇)否來りて王澤竭き、(一一)泰往いて人悔形る。躬を勑めて(一二)積素に慙ぢ、復た昌運と幷す。

(一三)恩合漸漬にあらず、(一四)榮會逢迎に在り。夙に御して清制を嚴にし、朝に駕して禁城を守る。

(一五)紳を束ねて(一六)西寢に入り、(一七)軫に伏して東坰に出づ。(一八)衣冠終に冥漠、(一九)陵邑轉た蔥青、松風路に遵つて急に、山烟壠を冒うて生ず。(二〇)皇心容物に憑り、民思歌聲に被る。(二一)萬紀絃吹を載せ、千歲(二二)旒旌に託す。未だ帝世の遠きを殊にせず、已に(二三)淪化の萌に同うす。(二四)幼壯

詩を作る。陵に廟あり、故に陵廟といふ。

【一】明祀。祭祀なり。

【二】光靈。祖宗の神靈。

【四】崇樹。高き樹木。園塋は陵墓。

【五】休命。休は美なり。天の美命を受けて天子となりしこと。

【六】陪廟。天子の側に侍すること。天顧は天子の恩顧。

【七】讌。宴なり。

【八】服。服事すること。

【九】達。榮達なり。生戒は養生の戒。

【一〇】否。惡運なり。

【一一】泰。好運なり。

【一二】積素。素は故なり。積日の恩。

【一三】恩合。恩惠の加はること。漸漬は徐徐に及ぶこと。

【一四】榮會。榮華會遇なり。

【一五】紳。大帶なり。

【一六】西寢。文帝の寢殿なり。

【一七】軫。文帝の車。東坰は東郊なり。

【一八】衣冠。武帝の衣冠。冥漠は虛無なり。

【一九】陵邑。陵墓を守る爲に置く邑。蔥青は草木の色。

【二〇】皇心。文帝の心。容物は陵廟に在る物。

【二一】萬紀。十二年を紀といふ。絃吹は管絃なり。

【二二】旒旌。旗なり。

【二三】淪化。崩御なり。

【二四】幼壯。少年の時。孤介は孤獨なり。

にして孤介に困み、(二五)末暮に幽貞を謝す。(二六)發軌夷易を喪ふ。(二七)歸軫崎傾を愼む。

【大意】　周漢皆祖宗を尊び祭祀を重んず。今わが文帝の高祖の陵廟に謁するは、周漢と其德を等うするものなり。吾れ高祖の初年に仕へ、側に侍して恩顧を蒙り、宴に侍して聖情に浴す。早く君に服事し身を存するの義を重しとなし、晩年榮達して養生の戒を輕しとなす。否來り泰往き王澤竭きて民悔起るや（武帝崩じて少帝位に卽き、遊戲度なく小人位に在りし事をいふ）高祖積日の恩を顧みて志節を易へず。又文帝の盛運に會して君臣となる。恩惠忽ち加はり、榮會して君の送迎を辱くするに至りぬ。今日夙に駕して宮城に入り、寢殿に謁し車前に拜し、東郊に出でて俱に陵廟を拜す。先帝の衣冠復た見るべからず。ただ陵邑の樹木の森森たるを見るのみ。文帝之を見て哀敬し、臣民思慕して歌頌の聲を揚ぐ。高祖の德音永く管絃の上に行はれ、功銘常に旌旗の中に傳はらん。威靈尙ほ存するが如く、遠く去れるを覺えざれども、今や已に淪化の運に遇ひて崩御し給ひぬ。われ少時孤危に苦み平安の路を失へり。衰老して當に傾覆の難を愼まんと欲す。

【二五】末暮。老年なり。

【二六】發軌。車の行くを以て己の任ふるに喩ふ。夷易は安全なり。

【二七】歸軫。車の歸途。晩年に喩ふ。崎傾は險難なり。

(一)謝諮議が(二)銅爵臺の詩に同うす

謝　玄暉

(三)練帷井幹に飄り、(四)罇酒平生の若し。鬱鬱たる(五)西陵の樹、詎ぞ歌吹の聲を聞かん。(六)芳襟淚迹を染め、(七)嬋媛として空しく情を傷ましむ。(八)玉座猶は寂寞たり。況んや廼ち妾が身の輕きをや。

【大意】臺上に繐帳を張り、樽酒を具ふること生時に異らざるも、今や西陵の主となりては、伎人の歌聲復た聞くべからず。伎人悲泣して淚衣襟を沾し、之を牽いて空しく哀情を含むも、君王終に見るべからず。ああ玉座すら寂寞たること此の如し。況んや羣妾至微、何を以て長久なるを得んや。魏武の遺令は眞に徒事のみ。

(一)郡の傳舍を出でて　(二)范僕射を哭す三首　(三)任彦昇

平生(四)禮數絶え、(五)式瞻國楨に在り。一朝にして赴任せし時、客舍を出で位を設けて哭せしなり。

【一】郡。義興郡なり。傳舍は〜客舍。彦昇義興郡太守となりヲ望メトあり。同は和なり。

【二】銅爵臺。又銅雀臺ともいふ。魏志に建安十五年冬、銅雀臺ヲ作ル、魏武(曹操)遺令シテ曰ク、吾ガ伎人チバ皆銅雀臺ニ著ケ、臺上ニ六尺ノ床繐帳ヲ施シ、朝晡ニ脯糒ノ屬チ上リ、月朝十五日、輙チ帳ニ向ヒテ伎ヲナセ、汝等時時銅雀臺ニ登リ吾ガ西陵ノ墓田

【三】繐帷。ほそぬののとばり。井幹は臺上の欄干。

【四】罇酒。樽酒なり。平生は魏武生存の時をいふ。

【五】西陵。魏武帝の陵墓。

【六】芳襟。伎人の衣襟。

【七】嬋媛。牽引なり。

【八】玉座。武帝の座席。

て(六)萬化盡くるも、猶ほ我れ(七)故人の情あり。時を待ちて(八)興運に屬し、(九)王佐民英を俟つ。歡を結ぶこと(一〇)三十載、生死交情を一にす。手を攜へて(一一)衰孽を遁れ、景を接へて(一二)休明に事ふ。運阻りて(一三)衡言革り、時泰くして(一四)玉階平なり。(一五)濬沖茂彦を得、(一六)夫子狂生に値ふ。(一七)伊人涇渭あり。余が濁清を揚るにあらず。將に乖かんとして別るるに忍びず、以て離情を遣らんと欲す。(一八)一辰の意に忍びず、(一九)千齡萬恨生ず。

【大意】余と范公とは名位同じからずと雖も余は常に國家の支柱として公を仰望したり。公今既に死亡したるも、故人の情何れの時か能く忘れん。公は時を待ちて梁室の興隆を期し、王者の輔佐として民間の英才を求めたり。余之に

【九】王佐。王者の輔佐。民英は民間の英才。

【一〇】三十載。三十年なり。

【一一】衰孽。齊朝の衰災をいふ。

【一二】休明。美明なり。梁の武帝を指す。

【一三】衡言。平常の言。

【一四】玉階平。天下泰平なり。

【一五】濬沖。王戎の字、王戎吏部尚書となり、李茂彦を得て吏部郎となし、禮を以て之を待つ。

【一六】夫子。范雲を指す。狂生は彦昇自ら謂ふ。

【一七】伊人。范雲を指す。涇渭は二水の名、涇は濁り渭は清し。

【一八】一辰。一時なり。

【一九】千齡。千歲といふが如し。

因りて公と交を結ぶこと三十年、生死一の如くにして復た變せず。嘗て相携へて齊を去り、梁の武帝に事ふ。是に於て齊室亂れて梁朝治化を布く。公は吏部尚書となり、余は吏部郎となりしこと、恰も王濬沖の李茂彥を得たるが如し。夫れ吏部の職は濁を激し清を揚ぐるを以て務となす。公自ら清濁を分別して其源流を殊にす。我の能く揚ぐる所にあらざるなり。交情既に此の如し。故に平生暫時の別と雖も、手を分つに忍びず、暫く留りて言笑し、以て離情を遣らんと欲せり。ああ既に暫時の別に忍びざるに、公今や死亡し去り、終に永久の別となりぬ。已ぬるかな平生の事、詠歌(二〇)篋笥に盈つ。兼ねて復た(二一)相嘲謔し、常に(二二)虛舟と値ふ。何れの時か(二三)范侯を見、還た平生の意を敍べん。

【大意】平生贈答せし詩文、今尚ほ我が篋中に在り。互に嘲謔して相凌辱することありしも、虛舟の觸るるが如く、敢て怒を發することなかりき。今や復た范侯を見て平生の歡を盡さんと欲するも能はず。悲しいかな。

子と別れて(二四)幾辰ぞ、塗を經ること旬に盈たず。(二五)朱顏の改まるを覩ず。徒に平生の人を想ふ。寧んぞ知らん(二六)安歌の日、君が(二七)瑟を撤するの晨にあらずや。已ぬるかな余何をか歎ぜん。(二八)春を輟めて(二九)國均を哀む。

【大意】公と別れて未だ幾何ならず。余は赴任の途に在りて未だ旬日を經過せず。又顏色の衰へたるをも見ざれば、心中平生の公を追想するのみ。意はざりき余が著任の日は卽ち公が終焉の日ならんとは。今や悲むとも詮なし。ただ業を休みて大臣の死を弔せんのみ。

【一〇】篋笥。文書を盛る箱。
【一一】相嘲謔。互に冗談を言ふこと。
【一二】虛舟。莊子に舟ナナラベテ河ヲ濟ルトキ、虛舟アリ來リテ舟ニ觸ル、編心ノ人アリト雖怒ラザルナリとあり。
【一三】范侯。范雲なり。
【一四】幾辰。幾時なり。
【一五】朱顏。紅顏なり、健康なる顏色。
【一六】安歌。安息して歌ふこと。義興郡に著任せしことをいふ。
【一七】瑟を撤す。儀禮に疾病アル者ハ琴瑟ヲ撤スとあり。疾病の時を撤瑟の晨といふ。然しここは死亡の日の意に用ひたり。

贈答

(一)蔡子篤に贈る詩

王仲宣

(二)翼翼たる飛鸞、載ち飛び載ち東す。我が友云に徂き、言に(三)舊邦に戻る。(四)舫舟翩翩として、以て大江を泝る。(五)蔚たる荒塗、時れ行通ずるなし。慨として我

【一】蔡子篤。蔡睦、字は子篤、尚書たり。仲宣之と友たり、同じく難を荆州に避く、子篤の郷に還る時此詩を贈る。
【二】翼翼。飛ぶ貌。飛鸞は子篤に喩ふ。鸞は鳥の名。
【三】舊邦。故郷なり。子篤は濟陽の人。
【四】舫舟。舟なり。翩翩は舟の行く貌。
【五】蔚。草の荒るる貌。荒塗は荒れたる路。

【二八】春。うすつくこと。史記に五羖大夫死ス、秦國ノ男女涕ヲ流シ、春ク者杵ヲ相セズとあり。大臣の死を悲む意也。
【二九】國均。國權を執行する大臣。

れ懷慕す、(六)君子の同うする所。(七)悠悠たる世路、亂離して多く阻る。(八)濟岱江行、(九)邈焉として處を異にす。(一〇)風流雲散して、一別雨の如し。人生實に難く、願其れ與ならず。(一一)遐路を瞻望して、允に企てて伊に佇る。(一二)烈烈たる冬日、(一三)肅肅たる凄風、潛鱗淵に在り、歸鴈載ち軒ぶ。苟に(一四)鴻鵰にあらず、孰か能く飛翻せん。則ち追慕すと雖も、予が思宣ぶるなし。東路を瞻望し、慘愴して歎を增す。彼の江流に率ひ、爰に逝いて期なし。君子誓を信じ、時に遷らじ。子と(一五)寮を同うし、生死之を固うせん。何を以てか行に贈らん。言に斯詩を授く。中心孔だ悼み、涕淚(一六)漣洏たり。嗟爾君子、如何ぞ思ふなけん。

【大意】君は此を去りて故郷に歸らんとし、舟を泛べて大江を泝り、世亂れ道通せざるの難を冒して行く。我れ慨嘆して思慕す。思ふに君も亦別を悲むべし。今や世亂れて人別離に苦む。君は濟岱に去らんとし、余は江衡の間に留まり、一別の後は雨の一たび降りて復た雲中に歸るなきが如くならん。人生多難にして志遂げず。君の去るに當り、佇立瞻望するのみ。今や寒風肅肅

【一】君子。子篤を指す。
【七】悠悠。遠き貌。
【八】濟岱。濟は川の名。岱は山の名、子篤の往く處に近し。江行は一本に江衡に作る、江は長江、衡は衡山、仲宣の居る處、荆州をいふ。
【九】邈焉。遠き貌。
【一〇】風流雲散。風雲の如く別れ去ること。
【一一】遐路。遠路なり。
【一二】烈烈。寒き貌。
【一三】肅肅。風急なる貌。凄風は寒風。
【一四】鴻鵰。鴈及びクマダカ。
【一五】寮。官職なり。
【一六】漣洏。涙の流るる貌。

(一)士孫文始に贈る

王仲宣

として魚は淵に潛み、鴻鴈獨り天上に飛ぶ。われ鴻鴈にあらず、何ぞ能く飛翻として此亂世の險を離るるを得ん。われ君と共に去らんと欲するも能はず。ただ君を望んで歎を增すの外なし。今たとひ相別ると雖も、君は從來の誓を信じ、時の險なるを以て志を遷すことなからん。必ず生死相共に同寮の誼を結ばん。茲に君の行を餞するに詩を以てすれば、中心悲んで涙雨の如し。

天(二)喪亂を降し、國として夷びざるはなし。我(三)士孫文始、魏の時、濟津亭侯に封ぜらる、國に就くに當り、王仲宣等各詩を作りて之に贈る。
【二】喪亂。漢末の亂をいふ。
【三】宗守。國家の主權。盪失は亡失なり
と我が友と、彼の京師よりす。(三)宗守盪失し、越に用て遁れ違り、(四)荆楚に遷り、(五)漳の湄に在り。漳の湄に在り、亦克く(六)宴處す。(七)篪塤を和通し、德を(八)車輔に比ぶ。既に禮儀を度り、卒に笑語を獲。茲の(九)永日を庶ひ、厥緒を譽ふなけん。譽ふなしといふと雖も、時我と已まらず。心を同うして(一〇)事を離れ、乃ち(一一)逝止あ

【四】荆楚。荆州なり。
【五】漳。川の名。荆川に在り。
【六】宴處。安居なり。
【七】篪塤。ともに樂器の名、よく應和す。
【八】車輔。車と輔とは互に助け合ふものなり。左傳に輔車相依り、唇亡ブレバ齒寒シとあり。
【九】永日。詩經に且ツ以テ喜樂シ、且ツ以テ日ヲ永ウセンとあり。
【一〇】事を離る。別離すること。
【一一】逝止。一は往き一は止まるなり。

り。此の大江を横り、彼の(一二)南汜に淹る。我が思及ばず、載ち坐し載ち起つ。彼の南汜を惟ふ、(一三)君子之に居る。(一四)悠悠たる我が心、薄か言に之を慕ふ。人亦言ふあり、(一五)詰として思はざるはなしと。矧や伊の(一六)嬿婉、胡ぞ悽まざらん。(一七)晨風夕に逝く。託して之と期す。王室を瞻仰し、慨として其れ永歎す。(一八)良人外に在り、誰か(一九)天官を佐けん。四國方に阻り、爾をして(二〇)藩に歸らしむ。爾の藩に歸る、下國に式となる。(二一)蠻裔として汝の德を虔まずといふなかれ。爾の主とする所を愼み、(二二)嘉則に率ひ由れ。龍用ふるなしと雖も、志亦弐ふなし。悠悠たる(二三)澹澹、鬱たる彼の(二四)唐林、則ち域を同うすと雖も、(二五)邈として其れ(二六)迴深なり。(二七)白駒の遠志は、古人の箴むる所。允なる君子、厥心を遐くせず。既に往き既に來り、爾の音を(二八)密にするなかれ。

【大意】今や天下騷亂し天子主權を失ふに至りしかば、我と君とは彼の京師より遁れて荆州に來り與に漳水の湄に安居し、相和すること篪塤の如く、相助くること輔車の如く、始めは禮儀を以て交

【一二】南汜。南浦なり。澹津は荆州の南に在り。
【一三】君子。文始を指す。
【一四】悠悠。遠き貌。
【一五】詰。哲なり、智なり。
【一六】嬿婉。情好なり。
【一七】晨風。鳥の名、鸇なり。
【一八】良人。賢人なり。
【一九】天官。天子の官。
【二〇】藩。澹津なり。
【二一】蠻裔。南方の夷地。
【二二】嘉則。善法なり。
【二三】澹澹。川の名。文始の封國に在り。
【二四】唐林。地名なり。
【二五】邈。遠き貌。
【二六】迴深。迴は遠なり。
【二七】白駒。詩經の篇の名。中に爾ノ音ヲ金玉ニシ、遐心アルナカレの句あり。別れて後も音信を絶つなかれとの意。
【二八】密。絶なり。

りしも、終に笑語して相歡するに至り、相喜樂して日を永うせり。然るに歲月流れて已まず。同心の友も相別れざるを得ざるに至り、一は澹津に去り一は荆州に留まる事となりぬ。君今大江を横りて南のかた澹津に往かんとす。我れ起坐して之を思慕すれども及ばず。ただ澹津は君子の居る所なり。吾が心遙に之を慕はんのみ。古人曰く賢智の人をば之を思はざるはなしと。況んや君と我との親交あるをや。何ぞ此別を悲まざるを得ん。願くは南飛の鵲に託して、音信を通ぜん。今や王室を望んで其衰微を歎く。君の如き賢人去つて外に在り。誰か當に天子の官を佐くべき者ぞ。君去つて藩に就かば、當に諸國の範たるべし。蠻地なりとて汝の德を愼まざるなかれ。潛龍用ふるなしと雖も、志差ふべきにあらず。かの澹澹唐林は吾が荆州と域を同うすと雖も、遙遠にして往き易からず。古人白駒の詩を作り、別後音信を通ずべき事を戒めたり。君亦音信を通ずるを怠るなかれ。

(一)文叔良に贈る

王仲宣

(二)翩翩たる鴻、彼の江濱に率ふ。(三)君子于に征き、爰に(四)西

【一】文叔良。文穎、字は叔良、南陽の人。劉表の從事となり、益州の牧劉璋に使す、仲宣贈るに此詩を以てす。
【二】翩翩。飛ぶ貌。
【三】君子。文叔良を指す。
【四】西鄰。益州をいふ。聘は使者となりて往くこと。

鄰に聘す。(五)此洪渚に臨み、伊に(六)梁岷を思ふ。爾の行孔だ邈なり、如何ぞ勤むるなからん。君子は始を敬み、爾の主とする所を愼む。言を謀ること必ず賢に、說を錯いて輔を申べよ。(七)延陵作るあり、(八)喬肸に是れ與す。(九)先民の遺跡は、(一〇)來世の矩なり。既に爾の主を愼み、亦(一一)知幾を迪み、情を探るに(一二)華を以てし、著を覩て微を知れ。視ること明に聽くこと聰に、事として惟はざるなかれ。(一三)董褐名を荷へり。胡寧ぞ師とせざらん。衆は蓋ふべからず、我が言を尙しとするなかれ。(一四)梧宮辯を致し、齊楚患を構ふ。成功は要あり、衆に在り歡を思ふ。人の忌むこと多き、之を掩ふ實に難し。彼の(一五)黑水を瞻るに、滔滔として其れ流る。(一六)江漢卷くあり、允に來らば厥れ(一七)休なり。二邦の(一八)若否は、

【五】此洪渚。大江なり。
【六】梁岷。益州に在る山の名。
【七】延陵。延陵季子、卽ち吳の季札、春秋時代の賢者なり。
【八】喬肸。喬は公孫喬卽ち鄭の子產なり。肸は羊舌肸、卽ち晉の叔向なり。左傳に吳ノ公子札、鄭ニ聘シ子產ヲ見テ舊相識ノ如シ、晉ニユキ叔向ニ謂ツテ曰ク、吾子之ヲ勉メヨ、君侈リテ良大夫多ク、皆富メリ、政將ニ家ニ在ラントス、吾子直なり、必ズ自ラ難ヲ免レンコトヲ思ヘトとあり。
【九】先民。古人なり。季札を指す。
【一〇】來世。後世なり。
【一一】知幾。事の機微を見ぬくこと。
【一二】華。容貌なり。
【一三】董褐。晉の大夫司馬寅なり。吳に使して國難を解き、重名を荷へり。
【一四】梧宮。齊の宮の名。楚の使者齊に使せし時、齊王之を梧宮に饗す。時に使者と事を辯じ、遂に齊楚怨を構へ兵を擧げて相伐つに至る。
【一五】黑水。川の名。益州に在り。
【一六】江漢。益州にある川。ここには劉璋に喩ふ。
【一七】休。美なり。汝の功績なりとの意。
【一八】若否。若は順なり。順逆なり。

職として汝に由る。(一九)緬たる彼の行人、克く留められざること鮮し。尙いかな君子、他の(二〇)仇に異なれ。人誰か勤めざらん。我が憂を厚うするなかれ。惟れ詩作贈す。敢て(二一)在舟を詠ず。

【大意】君往きて益州に使す。遠路必ず勤勞多からん。君子は始を愼み其の行ふ所を謹む。宜しく善謀を出し、匡輔の志を成すべし。昔季札あり子產と叔向とを戒む。季札の事は實に後世の規矩なり。我故に今君を戒めんとす。君宜しく事を愼み幾微を穿ち、貌を見て情を察し、視聽を聰明にし熟思して事を處し、董褐が國難を解きて重名を荷へるに倣ふべし。天下の衆事は一人を以て蔽ふべからず。我が此言を以て徒に高遠なりとなすなかれ。ゆめ梧宮に辯を戰はし國難を釀ししに倣ふなかれ。成功の要は衆を懽ばすに在り。人には忌諱多し。其意に逆はざるは實に難し。彼の江漢の國席卷して來らば、是れ君の大功績なり。若し之に反せば其罪亦君に在り。從來益州に使せし者、多くは劉璋の淹留する所となれり。君務めて之と類を同うすることなかれ。必ず國家の爲に勤勞し、我をして憂へしむるなかれ。今此詩を作りて君に贈るは、君と我と憂患を同うすればなり。

【一九】緬。遠きなり。行人は使者なり。
【二〇】仇。類なり。
【二一】在舟。鄧析子に舟ヲ同ウシテ海ヲ渡リ、中流ニ風ニ遇ヘバ、患ヲ救フコト一ノ若シとあり。憂患同じきをいふ。

(一)五官中郎將に贈る四首

劉公幹

昔我(二)元后に從ひ、駕を整へて(三)南鄉に至る。彼の(四)豐沛の都を過ぎ、(五)君と共に翺翔す。(六)四節相推斥し、(七)季冬に風且つ涼し。衆賓廣座に會し、(八)明鐙炎光を熺にす。(九)萬舞中堂に在り。(一〇)金罍甘醴を含み、(一一)羽觴行りて清歌妙聲を製し、方なし。長夜歸來を忘れ、咿か且つ(一二)大康をなす。(一三)四牡路に向つて馳せ、歡悅誠に未だ央きず。

【一】五官中郎將。魏の文帝、初め五官中郎將、副丞相たり來りて公幹此詩を賦して贈る。
【二】元后。元は大、后は君、魏の武帝(文帝の父)を指す。
【三】南鄉。荆州をいふ。
【四】豐沛。漢の高祖の鄉里、ここには武帝の鄉里なる譙に喩ふ。
【五】君。五官中郎將を指す。
翺翔は遊ぶこと。
【六】四節。春夏秋冬なり。推斥は推移なり。
【七】季冬。晩冬なり。
【八】明鐙。明かなる燈火。
【九】萬舞。舞の名。
【一〇】金罍。金樽なり。甘醴は美酒。
【一一】羽觴。酒杯なり。
【一二】大康。大に樂むこと。
【一三】四牡。四馬なり。

余(一四)沈痼の疾に嬰り、身を(一五)清漳の濱に竄し、夏より玄冬に涉り、(一六)彌曠十餘旬。常に恐る(一七)岱宗に游び、復た(一八)故人を見ざらんことを。親む所一に何ぞ篤き、趾を歩して我が身を慰む。清談して日夕を同うし、情眄憂勤を敍ぶ。便ち復た別辭をなし、游車(一九)西鄰に歸る。(二〇)素葉風に隨ひて起り、廣路埃塵を揚ぐ。逝く者は流水の如し。此に遂に離分せんことを哀む。追問す何れの時か會せんと。我を要するに陽春を以てす。望慕結んで解けず。爾に新詩文を貽る。勉めよや(二一)令德を脩め、(二二)北面して自ら寵珍せよ。

【大意】余痼疾に罹り漳水の濱に退居し、夏より冬に至るまで、十餘旬の間疎遠に過ぎ、遂に死亡して復た君と相見るの期なからんことを恐れぬ。君我を思ふこと篤く、來りて吾が病を看る。因りて共に談說して夜に至り、大に我が憂勞を慰むるを得たり。君別を告げて鄴都に歸る。我れ君の歸るを望めば寒風落葉を卷き、廣路塵埃を揚ぐ。思へらく人命は流水の如し。遂に永久の別とならんと。乃ち君を追ひて再會の期を問へば、君答ふるに來春相會すべきを以てす。爾來君を思ふの情に堪へず。因つて此詩を贈る。願くは美德を修め、よく天子に

【一四】沈痼。久病なり。
【一五】清漳。漳は川の名。
【一六】彌曠。疎遠なり。
【一七】岱宗。泰山なり。援神契に泰山ハ天帝ノ孫ナリ、人魂ヲ召スヲ主ルとあり。岱宗に遊ぶとは死することなり。
【一八】故人。舊友、五官中郎將を指す。
【一九】西鄰。鄴都をいふ。
【二〇】素葉。落葉なり。
【二一】令德。美德なり。
【二二】北面。君に事ふること。

事へ以て寵貴を保つべし。

秋日悲懷多く、感慨して以て長歎す。終夜寐ぬるに遑あらず。意を㉛濡翰に敍ぶ。明鐙閨中を曜し、清風㉜凄として已に寒し。白露前庭を塗し、㉝應門重ねて其れ關せり。四節相推斥し、歲月忽ち殫きんと欲す。㉞壯士遠く出征し、㉟戎事將た獨り難し。涕泣衣裳に灑ぐ。能く㊱所歡を懷はざらんや。

【大意】秋は人をして悲傷せしむ。予終夜眠る能はず、詩文を作りて自ら慰むれば、孤燈閨中に明に、寒風隙を漏れ、白露庭に結び、門閉ぢて來り訪ふ者なし。歲月推移して歲將に改まらんとす。君今遠く出征すと聞く。軍事は殊に艱難なり。乃ち君を思ひて淚を流しつつあり。涼風㊲沙礫を吹き、霜氣何ぞ㊳皚皚たる。明月㊴緹幕を照し、華燈炎輝を散ず。詩を賦して篇章を連ね、夜を極めて歸るを知らず。㊵君侯壯思多く、文雅縱橫に飛ぶ。㊶小臣信に頑魯、㊷僶俛するも安んぞ能く追ばん。

【大意】君が軍中に在るを思ふに、寒風礫を飛ばし、霜白く月明なる處、詩を賦して疲るるを知らず、文雅の志縱橫に飛ばん。予は素より頑愚なり。徒に勉强するも到底及ぶ能はざるなり。

【㉛】濡翰。筆を沾して詩を作ること。
【㉜】凄。寒き貌。
【㉝】應門。正門なり。
【㉞】壯士。五官中郎將を指す。
【㉟】戎事。軍事なり。
【㊱】所歡。友人なり。五官中郎將を指す。
【㊲】沙礫。小石なり。
【㊳】皚皚。白き貌。
【㊴】緹幕。丹黃色のテント。
【㊵】君侯。五官中郎將を指す。
【㊶】小臣。公幹自ら謂ふ。
【㊷】僶俛。黽勉、勉强なり。

(一)徐幹に贈る

劉公幹

誰か謂ふ相去ること遠しと。此の(二)西掖の垣を隔つるのみ。(三)清切の禁に拘限せられ、中情宣ぶるに由なし。子を思ひて心曲を沈め、長歎して言ふ能はず。起坐して次第を失ひ、一日に三四たび遷る。歩して(四)北寺の門を出で、遙に(五)西苑の園を望めば、細柳道を夾んで生じ、(六)方塘清源を含む。輕葉風に隨ひて轉じ、飛鳥何ぞ(七)翻翻たる。(八)乖人感動し易く、涕下りて衿と連る。仰いで白日の光を視れば、(九)皦皦として高く且つ懸り、兼ねて(一〇)八紘の内を燭し、物類(一一)頗偏なし。我れ獨り深感を抱き、與に比するを得ず。

【大意】君と我と相距ること遠きにあらず。僅に西掖門の垣を隔つるのみ。然れども嚴重なる禁裏に在りては、往來して所思を宣通する能はず。君を思へば氣結んで言ふ能はず。安居に堪へずして、起坐すること一日三四回に及ぶ。北寺の門を出でて君の居る處を望めば、柳は道を夾みて生じ、池には清流を湛へ、落葉散じ飛鳥翔るを見て、君を見る能はず。離居の人は感動し易く、涙

【一】徐幹。この時西掖に在り、公幹は禁省に在り。
【二】西掖。洛陽宮に東掖門、西掖門あり。
【三】清切の禁。嚴重なる禁裏。
【四】北寺。官署の名。
【五】西苑。御苑なり。
【六】方塘。池なり。清源は清流なり。
【七】翻翻。飛ぶ貌。音ヘン。
【八】乖人。離人なり。公幹自ら謂ふ。
【九】皦皦。白き貌。
【一〇】八紘。八方なり。
【一一】頗偏。偏頗なり。

襟を沾すに至る。仰いで白日を見れば、洽く天下の萬物を照し偏頗あることなし。我れ獨り深憂を抱きて志を失ひ、萬物と同じく其光に浴するを得ず。

從弟に贈る三首

劉公幹

(一)汎汎たる東流の水、(二)磷磷たる水中の石。(三)蘋藻其涯に生じ、華葉紛として(四)擾溺たり。之を采りて宗廟に薦め、以て(五)嘉客に羞むべし。豈園中の(六)葵なからんや。此の深澤より出づるを懿す。

【大意】人清廉なれば必ず用ひらるるを言ふ。蘋藻清流の岸に生ず。之を採りて宗廟に供すべく賓客に饗すべし。園中別に葵なきにあらざれども、蘋藻の深澤より生じて潔白なるに如かざるなり。

(七)亭亭たる山上の松、(八)瑟瑟たる谷中の風。風聲一に何ぞ盛なる、松枝一に何ぞ勁き。冰霜正に(九)慘悽なるも、終歳常に端正なり。豈(一〇)凝寒に羅はざらんや。松栢本性あり。

【大意】節義の守るべきを言ふ。山上の松は疾風冰霜にも傷つかず、常に儼然として立てり。是れ

【一】汎汎。流るる貌。
【二】磷磷。水中に石の見ゆる貌。
【三】蘋藻。水草の名。祭の時之を神前に供す。從弟に喩ふ。
【四】擾溺。多き貌。
【五】嘉客。賓客なり。
【六】葵。蔬菜の名。
【七】亭亭。高き貌。松を以て從弟に喩ふ。
【八】瑟瑟。風の聲。
【九】慘悽。寒き貌。
【一〇】凝寒。嚴寒なり。

本性の然らしむる所なり。

(一一)鳳凰南嶽に集り、孤竹の根に徘徊す。心に於て厭かざるあり、翅を奮つて(一二)紫氣を凌ぐ。豈常に勤苦せざらんや。(一三)黄雀と羣するを羞づ。何れの時か當に(一四)來儀すべき、將に聖明の君を須たんとす。

【大意】盛德の養ふべきを言ふ。鳳凰南嶽の竹根に徘徊すれども、心に滿たざる所あり、高く天上に升らんと欲す。天上に升るは勤勞ならざるにあらねど、俗士と伍するを恥づればなり。後日聖君の出づるを待ち、來りて其庭に舞ふべし。

徐幹に贈る

曹子建

驚風(一)白日を飄へし、忽然として西山に歸る。(二)圓景光未だ滿たず、(三)衆星粲として以て繁し。(四)志士世業を營み、(五)小人亦閑ならず。聊か且つ夜行きて游び、彼の(六)雙闕の間に游ぶ。(七)文

【一】白日。天子なり。曹操(魏の武帝)の死せるに喩ふ。
【二】圓景。月なり、魏の文帝に喩ふ。文帝位を嗣ぎたるも功德未だ徧からざるを言ふ。
【三】衆星。羣小人に喩ふ。粲は明なり。
【四】志士。上に居る者。卽ち君子なり。世業は當世の功業。
【五】小人。下に居る者。

【一一】鳳凰。鳥の名。丹穴に生る、南に在り、故に南嶽といふ。竹實に非ざれば食はず。以て從弟に喩ふ。
【一二】紫氣。天上の氣なり。
【一三】黄雀。俗士に喩ふ。
【一四】來儀。來り舞ひて容儀の美なること。書經に鳳凰來儀スとあり。

昌鬱として雲のごとく興り、(八)迎風中天に高し。(九)春鳩飛棟に鳴き、(一〇)流奏檻軒に激す。(一一)蓬室の士を顧念するに、貧賤誠に憐むに足る。(一二)薇藿虚きに充たず、(一三)皮褐猶ほ全からず。忼慨して悲心あり、文を興して自ら篇を成す。(一四)寶棄てられて何人をか怨む。(一五)和氏其徳あり。(一六)冠を彈きて知己を俟つも、知己誰か然らざらん。(一七)良田晩歳なく、(一八)膏澤豐年多し。亮に(一九)璵璠の美を懷けば、久しきを積んで徳逾〻宣ぶ。親交義敦きに在り、章を申ねて復た何をか言はん。

【大意】　此詩は徐幹の不遇を慰むるなり。驚風起りて天日を飜し、日は忽ち西山に沈み、月出でたるも光未だ十分ならず、ただ衆星の閃くのみ。(魏の武帝崩じて文帝位を嗣ぎたれども、其徳未だ徧からず、羣小人權勢を弄するに喩ふ)この時君子小人各功業を建てんと欲して營營たり。余も亦時に乘じて爲す所あらんと欲し、聊か雙闕の間に遊べるに(出遊に託言せるなり)殿閣は高大なれ

【六】雙闕。宮闕なり。
【七】文昌。殿の名、鄴都にあり。鬱は高起の貌。
【八】迎風。樓觀の名、亦鄴都にあり。
【九】春鳩。小人に喩ふ。飛棟は高き棟、高貴の位に喩ふ。
【一〇】流奏。暴風なり。君命の定まりなきに喩ふ。檻軒は廊下の格子窓。
【一一】蓬室。あばらや。蓬室の士とは徐幹を指す。
【一二】薇藿。共に蔬菜の名。虚は空腹。
【一三】皮褐。皮の短衣。
【一四】寶。徐幹に喩ふ。
【一五】和氏。楚の和氏璞玉を得て楚王に獻ず、楚王以て石となして和氏を刖る。知己に喩ふ。暗に自己を指す。
【一六】冠を彈き。冠の塵を掃ひて出仕を待つこと。
【一七】良田。美田なり。有徳の士、徐幹に喩ふ。晩歳なしとは晩しと雖必ず收穫あるをいふ。
【一八】膏澤。有徳の士、徐幹に喩ふ。
【一九】璵璠。美玉なり、美徳に喩ふ。

ども春鳩高棟に鳴き、疾風軒窓を拂ひ、久しく留るべきにあらず。(君命定まりなく邪臣權を弄するに喩ふ)飜つて貧賤の士(徐幹に喩ふ)を思ふに、衣食ともに足らず。慷慨して文章を作り、僅に餘憤を漏らしつつあり。昔寶玉(徐幹に喩ふ)の棄てらるるや、何人をか怨める。寶玉の棄てられしは、其の知己たる和氏の獻ずるに其人を得ざるに由るを以て、罪和氏に在りと謂はざるべからず。(己徐幹の知己なるも、徐幹を推擧する能はざるは、己の罪なりとの意)冠を彈きて知己の推擧を待つも、知己も亦同じく棄てらるるを以て、推擧すること能はざるなり。(子建も徐幹と同じく不遇の地位に在るをいふ)。然りと雖も請ふ君安んせよ。良田膏澤は必ず收穫あり。盛徳の士は必ず榮達すべきなり。親交の義は敦厚にして終始渝らざるに在り。君と我と榮枯を以て交を變ずるなけん。此他は復た何をか言はん。

(二)丁儀に贈る

曹子建

初秋涼氣發し、庭樹微く銷落す。(一)凝霜(二)玉除に依り、清風(三)飛閣に飄る。朝雲山に歸らず、(四)霖雨川澤を成す。黍稷(五)疇隴に委す。農夫安んぬ

【一】丁儀。字は正禮、文才あり。魏の武帝辟して掾となす。
【二】玉除。玉階なり。
【三】飛閣。高閣なり。
【四】霖雨。ながあめ。
【五】疇隴。田のあぜ。委は棄なり。

ぞ獲る所あらん。貴に在りては多く賤を忘る。恩を爲す誰か能く博からん。焉んぞ㈦無衣の客を念はん。㈧延陵子を思慕し、寶劍惜む所にあらず。子其れ爾の心を寧んせよ。親交義薄からず。

【大意】丁の不遇を慰むる詩なり。秋氣至りて木葉落ち、凝霜悲風朝閣に滿ち、陰陽和せずして霖雨川澤を成し、黍稷は田疇に委棄せられ、農夫に收穫なし。(小人起りて老臣衰へ、陰謀漸く長じて嚴令下り、朝臣相和せずして、横暴已まざるに喩ふ)然も上位に在る者は下位に在る者を顧みず、恩義を施すこと博からず。己狐白裘を著て他の無衣の人を憐まず。(暗に丁の如き正士を顧る者なきを言ふ)。余は常に延陵子に倣はんと期せり。寶劍は敢て惜む所にあらず。君請ふ安んぜよ、從來の交誼を以て必ず君を推輓せん。

王粲に贈る　曹子建

端坐して愁思に苦み、衣を攬りて起ちて㈠西游す。樹木春華を發き、清池㈥狐白冬を禦ぐに足る。

【一】西游。王粲西に在り、故に西游といふ。

【六】狐白。狐の腋の皮にて作れる裘。

【七】無衣の客。寒を防ぐ衣なき人。

【八】延陵子。吳の季札なり。季札上國に使し、徐君に過る徐君其寶劍を見、言はざれども心に之を欲す、季札之を知り亦心に之を與へんことを許し、使命を果して歸る時、亦徐を過ぐ、時に徐君既に死せり、季札乃ち劍を其墓に懸けて去れり。

長流を激す。中に㈡孤鴛鴦あり、哀鳴して㈢匹儔を求む。我此鳥を執へんことを願ふも、惜いかな輕舟なし。歸らんと欲して㈣故道を忘れ、顧望して但愁を懷く。悲風我が側に鳴り、㈤羲和逝きて留まらず。㈥重陰萬物を潤す。何ぞ懼れん澤周からざるを。誰か㈦君をして念多からしめ、自ら百憂を懷かしむる。

【大意】王粲の不遇を憐むなり。余愁思に堪へずして西に遊べば、樹木は春の花を著け、池には清流激す。中に番を離れし鴛鴦あり。悲鳴して其友を求むるが如し。(王粲が子建の推輓を求むるに喩ふ)我此鳥を執へんことを望めども、輕舟の以て濟るべきなし。(王粲を推輓する能はざるに喩ふ)歸らんと欲して來路を忘れ、ただ顧望して之を憐むのみ。歲月移りて今や秋風の時となり、重陰正に萬物を潤さんとす。何ぞ恩澤の周く及ばざるを憂へんや。(天子必ず王粲を登庸すべきに喩ふ)君をして憂思を懷かしむる者は何人ぞや。一に我が無力の致す所なり。請ふ君之を恕せよ。

【二】孤鴛鴦。番をはなれしチシドリ。王粲に喩ふ。

【三】匹儔。同類なり。

【四】故道。もと來し道。

【五】羲和。日輪の御者。

【六】重陰。魏の太祖に喩ふ。

【七】君。王粲を指す。

又丁儀・王粲に贈る　曹子建

(一)軍に從つて函谷を度り、馬を驅りて(二)西京を過ぐ。(三)山岑高くして極なく、(四)涇渭濁清を揚ぐ。壯なるかな帝王の居、佳麗百城に殊なり。(五)員闕浮雲を出で、(六)承露泰清に槩る。(七)皇佐天惠を揚げ、四海兵を交ふるなし。(八)權家勝を愛すと雖も、國を全うするを(九)令名となす。(一〇)君子末位に在り、(一一)德聲を歌ふ能はず。(一二)丁生は怨んで朝に在り、(一三)王子は歡んで自ら營む。歡怨は(一四)貞則にあらず、中和誠に經るべし。

【大意】われ征西の軍に從ひ、馬を驅りて長安に至る。山峰高く聳え、清渭濁涇其間を流れ、員闕雲を凌ぎ、承露天を衝く。始めて帝居の壯麗なるを見たり。今や吾が父（曹操）天子の惠を闡揚し、四海皆服從して復た兵を交ふるなし。兵家は戰勝を尙べども、戰勝必ずしも貴ぶに足らず。要は國家を安全にするに在り。二君（丁王を指す）は卑位に居りて其德聲を歌ふ能はず。一は朝に在りて卑位を怨み、一は朝を退きて家居を歡べり。夫れ歡と怨とは共に中正の道にあらず。宜しく中和を以て法となすべきなり。

【一】軍。建安二十三年七月、西劉備を征し、九月長安に至る。
【二】函谷。西京。函谷は關の名。長安なり。
【三】山岑。山峰なり。
【四】涇渭。二川の名、涇水は濁り渭水は清し。
【五】員闕。闕の名。
【六】承露。仙人掌上の承露盤なり。泰清。天なり。
【七】皇佐。曹操を指す。天惠の天は君なり。孔子家語に君惠ナレバ臣忠ナリとあり。
【八】權家。兵法家なり。
【九】令名。名譽なり。
【一〇】君子。丁王を指す。
【一一】德聲。曹操令德の聲。
【一二】丁生。丁儀は曹操の掾となり、常に職の卑きを怨む。
【一三】王子。王粲は侍中となり、後官を免じて家に在り、故に自ら營むといふ。
【一四】貞則。忠貞の法則。

(二)白馬王彪に贈る

曹子建

帝に(三)承明の廬に謁し、逝いて將に(三)舊疆に歸らんとす。清晨(四)皇邑を發し、日夕(五)首陽を過ぐ。(六)伊洛廣く且つ深し。濟らんと欲すれども川に梁なし。舟を汎べて洪濤を越え、彼の(七)東路の長きを怨む。顧瞻して城闕を戀ひ、領を引きて情内に傷む。

其一

【大意】黃初四年、吾れ天子（魏の文帝、卽ち子建の同母兄なり）に承明廬に謁し、終りて舊邑に歸らんとし、晨に帝都を發して夕に首陽山を過ぐ。伊洛の二川あり。橋なきが故に舟を泛べて之を渡り、進んで東路の長きを往く。幾度か宮闕を顧戀し、心中悲傷せり。(八)太谷何ぞ寥廓たる。山樹鬱として蒼蒼たり。(九)霖雨我が塗を泥し、(一〇)流潦浩として縱橫す。(一一)中逵

【一】白馬王。名は彪、字は朱虎、魏の武帝の子なり、白馬王に封ぜらる。
【二】承明廬。承明は門の名。廬は禁中寓直の所。
【三】舊疆。鄄城なり。時に子建雍邱に封ぜられたるも、尙ほ鄄城に居たり。
【四】皇邑。帝都なり。
【五】首陽。山の名、洛陽の東北二十里にあり。
【六】伊洛。二川の名。
【七】東路。鄄城に歸る道。
【八】太谷。谷の名、洛陽の西南に在り。寥廓は廣くして中空しき貌。
【九】霖雨。ながあめ。
【一〇】流潦。雨水の路上を流るるもの。
【一一】中逵。中路、道の中央。

絶えて軌なく、轍を改めて高岡に登る。(二)脩坂雲日に造り、我が馬(三)玄以て黄す。　其二

【大意】往いて太谷に至れば、樹木鬱蒼として茂り、雨水路上に流れて車を行るべからず。乃ち道を轉じて高岡の上を往くに、長坂高く天を衝く。我が馬之が爲に疲勞せり。

玄黄して猶ほ能く進めども、我が思鬱として以て紆たり。(四)鬱紆として將た(五)進み難し。(六)親愛離居に在り。本相與に偕にせんと圖りしも、中ごろ更めて俱にする克はず。(七)鴟梟衡枙に鳴き、(八)豺狼路衢に當る。(九)蒼蠅白黒を間へ、讒巧親をして疎ならしむ。還らんと欲すれども絶えて蹊なく、轡を攬り止りて(一〇)踟躕す。　其三

【大意】疲馬猶ほ能く進めども、我が心結ぼれて解けず。何故に解けざるかといふに、兄弟道を同うして藩國に歸らんとせしに、朝命を以て同行を禁ぜられたればなり。是れ皆鴟梟豺狼にも比すべき小人の、朝廷の要路に立ちて讒巧を事とし、白黒を變亂するの致す所なり。ああ讒人路を塞ぎて還るに道なし。徒に顧戀徘徊するのみ。

【二】脩坂。長き坂。
【三】玄黄。馬の疲勞すること。
【四】鬱紆。愁思の繁きをいふ。
【五】進み難し。一本に何チカ念フに作る、從ふべし。
【六】親愛。兄弟なり。黄初四年正月、白馬王、子建と京師に朝し、七月相偕に藩國に歸る。然るに有司其同行を禁ぜり。
【七】鴟梟。ふくろふ、惡鳥なり。小人に喩ふ。衡枙は車轅なり。
【八】豺狼。小人に喩ふ。路衢は郭内の道なり。
【九】蒼蠅。讒佞の人に喩ふ。
【一〇】踟躕。躊躇なり。

踟躕するも亦何にか留まらん、相思うて終極なし。秋風微涼を發し、寒蟬我が側に鳴く。原野何ぞ(一一)蕭條たる。白日忽ちとして西に匿る。歸鳥(一二)喬林に赴き、(一三)翩翩として羽翼を厲ぐ。孤獸走りて羣を索め、草を銜んで食ふに遑あらず。物に感じて我が懷を傷ましむ。心を撫でて長太息す。　其四

【大意】踟躕して留まる所なく、君を思ふの情已む所なし。時に秋風寒蟬の聲を聞き、荒野落日の間、歸鳥孤獸の羣を求むる（我の兄弟と離隔して思慕の情禁ずる能はざるが如し）を見、感傷して長歎太息せり。

太息して將に何をか爲さんとする、天命我と違ふ。奈何せん(一四)同生を念ふも、一たび往きて形歸らず。孤魂(一五)故域に翔り、靈柩京師に寄る。存する者忽ち復た過ぎ、亡沒して身自ら(一六)衰ふ。人生れて一世に處る。去ること朝露の晞くが若し。年(一七)桑榆の間に在り、影響追ふ能はず。自ら顧るに金石にあらず。(一八)咄嗟して心を悲ましむ。　其五

【大意】たとひ太息すとも天命我と違ふを如何ともすべからず。然も尚ほ吾が兄京師に薨じ、一たび去つて復た歸らざるを念はざるを得ず。ああ人命は朝露の如し。吾亦忽ち沒して自ら悲むに至ら

【一一】蕭條。草木衰落の貌。
【一二】喬林。高き林。
【一三】翩翩。飛ぶ貌。
【一四】同生。兄弟なり。子建の同母兄任城王をいふ。黄初四年正月、任城王も亦白馬王子建とともに京師に朝し、任城王京師に薨ず。
【一五】故域。任城郡なり。
【一六】衰。一本哀に作る。從ふべきが如し。
【一七】桑榆。日の沒する處。老年に喩ふ。
【一八】咄嗟。大に驚嘆する聲。

ん。況んや年既に老いて再び少年なる能はず。此身金石にあらざるをや。是亦長嘆に堪へざるなり。心悲んで我が神を動かすも、棄て置いて復た陳ぶるなからん。(二九)丈夫四海に志す。萬里猶ほ比隣のごとし。恩愛苟も虧けずんば、遠きに在るも(三〇)分日に親し。何ぞ必しも(三一)衾幬を同うし、然る後(三二)殷勤を展べん。憂思(三三)疾疢を成すは、乃ち兒女の仁なるなからんや。(三四)倉卒骨肉の情、能く苦辛を懷かざらんや。

【大意】吾が心悲に堪へざれども、棄てて復た言ふことなけん。男子は志四海に在り、たとひ萬里に相別るるも、猶ほ比隣の如し。恩愛だに存せば遠きに居るも日に相親むを得。何ぞ必しも衾帳を共にして、然る後親愛すとなさんや。別離を憂へて病を成すは、兒女子の事なり。然も倉卒にして相別れては、尚ほ兄弟相思ふの悲なき能はず。苦辛して何をか慮思する。天命信に疑ふべし。虛無(三五)列仙を求むるも、(三六)松子久しく吾を欺く。(三七)變故須臾に在り。百年誰か能く持せん。離別して永く會ふなし。手を執るは將た何れの時ぞ。王其れ玉體を愛せよ。俱に(三八)黃髮の期を享けん。淚を收めて長路に卽き、筆を援りて此れより辭す。　其七

【一九】丈夫。男子なり。
【二〇】分。志といふが如し。
【二一】衾幬。被帳なり。
【二二】殷勤。親愛なり。
【二三】疾疢。熱病なり。
【二四】倉卒。急遽なり。倉卒の間に別るるをいふ。
【二五】列仙。多くの仙人。
【二六】松子。赤松子、古の仙人。
【二七】變故。變事なり。死をいふ。
【二八】黃髮。長壽なり。

【大意】天命誠に疑ふべく、心を虛無に託し列仙の道を求めんとするも、其道亦信ずべからず。死亡は將に須臾にして來らんとす。誰か百年の壽を保たん。今や王と相別る。何れの時か復た相逢ふを得ん。王請ふ自愛せよ。願くは相俱に長壽を保たん。ここに淚を拭ひて歸路に就き、筆を援りて此詩を賦す。

(二)丁翼に贈る

曹子建

(一)嘉賓城闕に塡ち、豐膳(二)中厨より出づ。吾と二三子と、此城隅に(四)曲宴す。(五)秦箏西氣を發し、(六)齊瑟東謳を揚ぐ。肴來りて虛く歸らず、觴至りて反つて餘すなし。我れ豈異人に狎れんや、朋友我と俱にす。大國良材多く、海の明珠を出すに譬ふ。君子は義休く偕はり、小人は德儲ふるなし。善を積めば餘慶あり、榮枯立どころに須つべし。(七)滔蕩固に大節、時俗拘る所多し。君子は大道に通ず。(八)世儒たるを願ふなかれ。

【一】丁翼。字は敬禮、儀の弟なり。魏の黃門侍郎たり。
【二】嘉賓。よき客。
【三】中厨。宮中の大膳職。
【四】曲宴。臣下に宴を賜ふこと。
【五】秦箏。秦女箏を善くす。秦は西に在り、故に西氣といふ。
【六】齊瑟。齊女よく瑟を鼓す。齊は東に在り、故に東謳といふ。謳は歌なり。
【七】滔蕩。大なる貌。
【八】世儒。俗儒なり。

【大意】中厨より酒肴を賜はり、諸君と此城角に宴し、箏を彈じ謳を歌ひ、飲食して餘す所なし。我が俱に宴する所の諸君は、皆大國の良材にして、大海の明珠の如し。夫れ君子は德義を具ふれども小人は之に反す。善を積めば榮え、惡を爲せば衰ふ。よろしく滔蕩たる大節を立つべし。小節に拘束せらるるなかれ。君子は大道に通達するを要す。記誦の俗儒となるなかれ。

(一)秀才の軍に入るを贈る五首

嵇叔夜

良馬既に閑ひ、(二)麗服暉あり。左に(三)繁弱を攬り、右に(四)忘歸を接け、風のごとく馳せ電のごとく逝き、景を躡み(五)飛を追ふ。中原を(六)淩厲し、顧盼して姿を生ず。我が(七)好仇を攜へ、我が輕車に載り、南のかた長阜に淩り、北のかた淸渠を厲り、仰いで驚鴻を落し、俯して淵魚を引く。(八)游田に盤んで、其れ樂き(九)只且。

【大意】馬は能く進退に閑ひ、軍服美しくして光輝あり。左に弓を持ち右に矢を持ち、士卒風電の馳するが如く、疾きこと飛鳥を追ふが如し。

【一】秀才。嵇喜、字は公穆、秀才に擧げらる、叔夜の兄なり。
【二】麗服。うるはしき軍服。
【三】繁弱。弓の名。
【四】忘歸。矢の名。
【五】飛。飛鳥なり。
【六】淩厲。馳せ上ること。
【七】好仇。よき儔匹なり。秀才を指す。詩經に赳赳タル武夫ハ公侯ノ好仇とあり。
【八】游田。游獵なり。
【九】只且。助辭にして意義なし。

中原を顧みて雄姿を示し、我が秀才亦車を同うして往く。或は長岡に登り或は淸川を渡り、仰いでは鴻雁を射、俯しては淵魚を捕へ、途中に遊獵して樂を盡す。

輕車迅く邁き、彼の長林に息ふ。春木載ち榮え、葉を布き陰を垂れ、(一〇)習習たる谷風、我が(一一)素琴を吹き、(一二)咬咬たる黃鳥、囀を顧みて音を弄す。感悟して情を馳せ、我が(一三)欽する所を思ふ。心の憂ふる、永嘯長吟す。

【大意】輕車疾く馳せて長林に息へば、春木花を開き葉を展べ、春風習習として琴を鼓するが如く、黃鳥其友を顧みて鳴くあり。我之を見て坐に秀才を思ひ、心憂へて吟嘯す。

(一四)浩浩たる洪流、我が邦畿を帶り、(一五)萋萋たる綠林、榮を奮ひ暉を揚げ、魚龍(一六)瀜瀜として、山鳥羣飛す。駕して言に出遊し、日夕歸るを忘る。我が(一七)良朋を思ひ、渴するが如く飢うるが如し。願うて言に獲ず、愴んで其れ悲む。

【大意】大川浩浩として邦畿を繞り、林木萋萋として茂り、魚鳥各〻其所を得て樂めり。我れ出遊して日暮に至るも歸るを忘れ、秀才を思ふこと飢渴の飲食を思ふが如し。然も相見る能はず。爲に

【一〇】習風。風和なる貌。谷風は春風。
【一一】素琴。飾なき琴。
【一二】咬咬。鳥の聲。黃鳥は鳥の名。
【一三】欽。敬なり。欽する所とは秀才をいふ。
【一四】浩浩。水の流るる貌。洪は大なり。
【一五】萋萋。盛なる貌。
【一六】瀜瀜。魚龍の水に游ぐ貌。
【一七】良朋。秀才を指す。

愴然として悲めり。

(一八)徒を蘭圃に息はしめ、馬を(一九)華山に秣ひ、(二〇)磻を平皐に流し、綸を長川に垂れ、歸鴻を目送し、手に(二一)五絃を揮ひ、俯仰して自得し、心を(二二)太玄に游ばしむ。彼の釣叟を嘉す、魚を得て(二三)筌を忘るるを。(二四)郢人逝きぬ。誰と與にか言を盡さん。

【大意】士卒を蘭園に息はしめ、馬を華山に秣ひ、箭を平澤に飛ばし、釣を長川に垂れ、以て途中に漁獵し、歸雁を目送して五絃の琴を彈じ、俯仰して大道を心得し、かの釣叟（莊子に見ゆ）の魚を得て筌を忘れしが如く、秀才亦よく大道に冥合せん。今や此人去りぬ。我れ誰と與にか大道を語らん。

閑夜肅清にして、朗月軒を照す。微風袿を動かし、(二五)組帳高く褰ぐ。(二六)旨酒樽に盈つるも、與に歡を交ふるなし。鳴琴(二七)御に在るも、誰と與にか鼓彈せん。仰いで(二八)同趣を慕ひ、其馨蘭の若し。(二九)佳人在らず、能く永歎せざらんや。

【一八】徒。兵士なり。蘭圃は蘭の生ずる園。
【一九】華山。山に光華あるなり。
【二〇】磻。箭鏃なり。平皐は平澤なり。
【二一】五絃。琴なり。
【二二】太玄。虚無恬淡の大道。
【二三】筌。魚を捕ふる竹器。魚を得て筌を忘るとは道を得たるをいふ。
【二四】郢人。莊子に郢人聖ニテ其鼻端ヲ墁スとあり。ここは秀才を指すなり。
【二五】組帳。とばり。
【二六】旨酒。美酒なり。
【二七】御。用なり。
【二八】同趣。心を同うする人、秀才を指す。
【二九】佳人。秀才を指す。

【大意】夜靜にして明月軒を照し、微風衣裾を吹く時、獨り帷帳を揭げて明月に對す。美酒あれども與に酌むべき人なく、琴瑟の用ふべきあるも與に彈ずべき人なし。秀才は吾が同心の友にして、其交蘭の馨しきが如し。今此人在らず。何ぞ歎息せざるを得んや。

山濤に贈る

(一)司馬紹統

(二)苕苕たる椅桐樹、南岳に寄生す。上は青雲霓を凌ぎ、下は千仞の谷に臨む。身を處くこと孤且つ危、何に於てか余が足を託せん。昔は(三)朝陽に植ち、枝を傾けて(四)鸞鶱を俟つ。今者は世用を絶ち、(五)倥偬として迫束せらる。(六)班匠我を顧みず、(七)牙曠我を錄せず。焉んぞ琴瑟を成すを得ん。何に由りてか妙曲を揚げん。(八)冉冉として三光馳す。逝く者一に何ぞ速なる。中夜寐ぬる能はず、劍を撫して起つて(九)躑躅す。彼の(一〇)孔聖の

【一】司馬紹統。司馬彪、字は紹統、晉に仕へて散騎侍郎となる。初め山濤・吏部侍郎たり、時に紹統未だ仕へず、故に此詩を贈りて山濤の推薦を求むるなり。
【二】苕苕。高き貌。椅桐は木の名。以て琴瑟を作るべし。紹統自ら喩ふ。
【三】朝陽。山陽なり。詩經に梧桐生ズ、カノ朝陽ニとあり。
【四】鸞鶱。鳳凰の類の神鳥。鳳凰は梧桐にあらざれば栖まず、竹實にあらざれば食はず。
【五】倥偬。困苦なり。
【六】班匠。公輸般及び匠石、共に技術に巧なる人。執政に喩ふ。
【七】牙曠。伯牙及び師曠、共に音樂の妙手。執政に喩ふ。
【八】冉冉。進む貌。三光は日月星なり。
【九】躑躅。徘徊といふがごとし。
【一〇】孔聖。孔子なり。孔子逝水の嘆あり。

歎に感じ、此の年命の促なるを哀む。(二)卞和幽冥に潛まば、誰か能く(三)奇璞を證せん。冀願くは(四)神龍來り、光を揚げて以て燭されんことを。

【大意】南岳に椅桐樹あり。上は青雲を凌ぎ、下は千仞の谷に臨めり。然も孤危の地に在るを以て、根を託するの地なし。昔は朝陽に在りて鳳凰の來り栖まんことを待ち(入りて君に仕へんとするに喩ふ)。今は世に棄てられて困苦せり。されば匠人も我が材を認めず、樂師も我が材を收錄せず。故に琴瑟となりて妙音を發するに由なし。(執政者の登庸を得ざるを以て、伎倆を發揮する能はざるに喩ふ。)日月は過ぎ易く老將に至らんとす。之を思へば中夜眠る能はず、獨り起つて徘徊し、逝水の嘆を發し、人命の速なるを哀まざるを得ず。良材ありと雖も之を證する者なければ、何ぞ世に用ひらるるを得んや。願くは君の之を推薦せられんことを。

(一)何劭に答ふ二首

張茂先

【一】卞和。璞を得て楚王に獻じたる人。推薦者に喩ふ。
【二】奇璞。彫琢を加へざる玉。璞は音ボク、叶韻。
【三】神龍。山濤に喩ふ。鍾山に燭龍あり、能く萬物を照す。

(二)吏道何ぞ其れ迫れる。(三)窘然として坐して自ら拘る。(四)纓緌徽纆となる。(五)文憲焉んぞ踰ゆべけん。(六)恬曠足らざるを苦み、(七)煩促毎に餘あり。(八)良朋新詩を貽り、我に示すに游娛を以てす。(九)穆たること清風を灑ぐが如く、(一〇)煥たること春華の敷くが若し。昔より(一一)寮寀を同うし、今に於て(一二)園廬を比ぶ。衰疾(一三)辱殆に近し。庶幾はくは竝に(一四)輿を懸けんことを。(一五)髮を重陰の下に散じ、杖を抱いて清渠に臨み、耳を屬けて(一六)鸎鳴を聽き、目を流して(一七)儵魚を翫び、從容として(一八)餘日を養ひ、樂を(一九)桑榆に取らん。

【大意】官吏たるは甚だ窮屈にして自ら我が身を束縛せるが如く、法規ありて之を踰ゆるを得ず。常に閑暇なきに苦み、齷齪として日を送る。君新詩を我に寄せ、我に遊樂を勸む。其詩恬和の氣ありて清風の吹くが如く、爛然たること春花の笑ふが如し。君と我とは昔より官職を同うし、居宅も亦相接せり。交誼一日にあらず。衰疾の身を以て官に在るは、危辱を招くの道なり。願くは相與に官を辭し、重陰の下に息ひ、清流の上に臨み、鶯鳴を聽き游魚を視、從容游樂して晩年を送らん。

【一】何劭。字は敬祖。晉に仕へて太子太師となる。
【二】吏道。官吏たること。
【三】窘然。窮屈なる貌。
【四】纓緌。冠の紐。徽纆は人を縛る索。
【五】文憲。法規なり。
【六】恬曠。閑暇なり。
【七】煩促。急迫なり。
【八】良朋。何劭を指す。
【九】穆。和なり。
【一〇】煥。光り輝くこと。
【一一】寮寀。官職なり。
【一二】園廬。居宅なり。
【一三】辱殆。危辱なり。老子に足ルヲ知レバ辱メラレズ、止ルヲ知レバ殆カラズとあり。
【一四】輿を懸く。官を辭すること。
【一五】髮を散ず。冠をかぶらざること。
【一六】鸎鳴。黃鸝の鳴くこと。
【一七】儵魚。小魚なり。
【一八】餘日。餘年なり。
【一九】桑榆。日の入る處。老年に喩ふ。

(二〇)洪鈞萬類を陶し、(二一)大塊羣生を稟く。(二二)明闇信に姿を異にし、靜躁亦形を殊にす。予有識に及んでより、志功名に在らず。(二三)虛恬は竊に好む所、文學は少うして經めし所なり。忝く(二四)既過の任を荷ひ、白日已に西に傾く。道長うして智の短きを苦み、責重くして才の輕きに困む。(二五)周任遺規あり、其言明にして且つ清し。(二六)負乘我が戒をなす。(二七)夕まで惕れ坐して自ら驚く。是を用て(二八)嘉貺に感じ、心を寫して中誠を出す。篇を發すること溫麗なりと雖も、乃ち其情に違ふなからんや。

【大意】天地萬物を生成す。人の性明暗靜躁各〻異る所あり。予は智識ありてより以來、志を功名に置かず。窃に虛淡の道を慕ひ、少年より文學を脩む。久しく重任を忝うして、今や已に衰老に及び、常に任重く道遠くして、我が才智の足らざるに苦む。昔周任は力量ありて官に就くべく、然らざる者は退くべきを戒め、易經には小人をして君子の事を爲さしむれば、必ず失敗を招くべきことを戒めたり。故に予常に自ら戒

【一〇】洪鈞。天をいふ。萬類は萬物。陶は作なり。
【一一】大塊。地なり。
【一二】明闇。明暗なり。
【一三】虛恬。老莊の道。
【一四】既過。從來といふが如し。
【一五】周任。古の賢人なり。遺規は後世に遺せる訓戒。論語に周任言ヘルアリ、曰ク力ヲ陳ベテ列ニ就ク、能ハザル者ハ止ムトとあり。
【一六】負乘。易經に負ヒテ且ツ乘レバ寇ノ至ルヲ致スとあり負は負擔、小人の事なり。乘は乘車、君子の事なり。
【一七】夕まで。易經に夕マデ惕若スレバ厲ケレドモ咎ナシとあり。常に戒慎驚懼し居れば咎なく蒙むることなしとの意。
【一八】嘉貺。よき賜物。詩を贈られしこと。

慎驚懼しつつあり。今新詩を贈り、游樂を勸められしに因り、わが中情を述べて、之に答ふる所以なり。ただ章句溫麗なりと雖も、今俱に朝に在りて尙ほ隱退する能はざるは、未だ我が眞情に協へりとなす能はざるを憾むのみ。

張華に贈る

(一)何敬祖

四時更〻代謝し、(二)懸象迭に卷舒す。暮春忽ち復た來り、和風(三)節と俱にす。俯して清泉の涌くに臨み、仰いで(四)嘉木の敷くを觀る。我が(五)陋圃に周旋し、西のかた(六)廣武の廬を瞻る。既に貴くして儉を忘れず、(七)有に處て能く無を存す。(八)俗を鎭ずるは簡約に在り、(九)樹塞焉んぞ羣るに足らん。在昔(九)班司を同うし、今者園墟を竝ぶ。私に願くは(一〇)黃髮を偕にし、逍遙して琴書を綜べ、(一一)爵を茂陰の下に舉げ、手を攜へて共に(一二)躊躇せんことを。奚を用てか形骸を遺れん。(一三)筌を忘るる

【一】何敬祖。前詩に出づ。
【二】懸象。日月なり。卷舒は往來といふが如し。
【三】節。氣節なり。氣節と俱に來ること。
【四】嘉木。佳樹なり。
【五】陋圃。敬祖の園なり。周旋は周遊なり。
【六】廣武。張華廣武侯に封ぜらる。
【七】有。富なり。無は貧なり。
【八】樹塞。門外に樹木を植ゑて屏とすること、諸侯の爲すべき事なり。論語に邦君樹シテ門ヲ塞グ、管氏モ亦樹シテ門ヲ塞グとあり。
【九】班司。官職なり。
【一〇】黃髮。老壽をいふ。
【一一】躊躇。緩步なり。
【一二】筌。秀才の軍に入るに贈る詩に見ゆ。

は魚を得るに在り。

【大意】四時往來して忽ち暮春の節となりぬ。余乃ち清泉の湧出するを見、佳樹の花を著くるを眺めつつ庭内を遊歩し、因つて西隣なる君の居宅を望む。君は富貴に在りて貧賤を忘れず、簡約節儉を以て俗情を鎮め、樹塞の僭越に倣はず。實に高徳の士なり。予は昔君と官職を同うし、今亦居宅を接せり。願くは相與に老壽に上り、琴書の樂をなし、遊樂を倶にせん。何を以てか形體を遺るべき。ただ大道を悟得するに在り。

(一)馮文羆が斥丘の令に遷れるに贈る　陸士衡

於皇なる聖世、時れ文惟れ晉。命を受くること天よりし、奄に(三)黎獻を有つ。(三)閭閻既に闢き、(四)承華再び建つ。明明として上に在り、集るあるは惟れ(五)彦なり。　其一

【大意】わが晉は文徳を以て天下を和げ、天命を受けて天子となり、衆賢を臣とし、閭閻門既に開きて、又承華門を建て（武帝始めて天子となり、愍懐太子既に立ちし事をいふ）俊秀の士を集めて左右に置く。

【一】馮文羆。太子洗馬より斥丘令に遷る。士衡贈るに此詩を以てす。斥丘は縣の名、縣の長官を令といふ。
【二】黎獻。衆賢なり。
【三】閭閻。洛陽城門なり。
【四】承華。太子の門の名。
【五】彦。秀士なり。

奕奕たる馮生、哲問允に迪む。天(七)子を保定し、徳として鑠からざるはなし。心を邁ふと(八)玄曠、志を矯ぐること(九)崇邈なり。彼の承華に遵ひ、其容(一〇)灼灼たり。　其二

【大意】馮生盛美にして賢知の道を蹈み、天其徳を賦與して美ならざるはなく、行事美大にして志を擧ぐること高遠なり。よく太子に奉事し、其容灼灼として光輝あり。

嗟我人(一一)斯、翼を(一二)江潭に戢む。命ありて集り止、翻飛して南よりす。幽谷より出でて、爾と林を同うす。雙情交〻映し、物を遺れて心を識る。　其三

【大意】我れ江南に生る。天子の命を受けて京師に到り、君と同じく太子洗馬となる。鳥の幽谷より出で相與に林を同うするが如し。因つて交情互に密に、深く同心の誼を結ぶ。人亦言へるあり、交道實に難しと。(一三)頌たるある弁、(一四)千載一たび彈ず。今我と子と、世を曠うして歡を齊うす。利は(一五)金石を斷ち、氣は秋蘭より(一六)惠なり。　其四

【六】奕奕。美盛の貌。
【七】子。馮生を指す。
【八】玄曠。玄は美、曠は大。
【九】崇邈。崇は高、邈は遠。
【一〇】灼灼。光る貌。
【一一】斯。助辭なり意義なし。下文の止も亦同じ。
【一二】江潭。士衡は吳の人。故にいふ。
【一三】頌。弁の貌。弁は冠なり。
【一四】千載。千年なり。漢書に王陽位ニアレバ貢公冠ヲ彈ズとあり。貢禹は王吉と友たり、吉既に貴顯なり。貢禹乃ち其冠の塵を掃ひ、王吉の推擧に由りて出で仕へんことを待つなり。
【一五】金石。易經に二人心ヲ同ウスレバ其利金ヲ斷ツ、同心ノ言ハ其臭蘭ノ如シとあり。
【一六】惠。美なり。

【大意】古人既に交道の難きをいへり。然も君と我とは千歳の後に生れて、貢禹、王吉と其交情を同うし、其の堅利は以て金石をも斷つべく、其氣は秋蘭の香よりも美なり。

(一七)羣黎未だ綏んぜず。帝用て勤む。(一八)我れ明德を求め、(一九)百里に肆ぬ。僉いふ(二〇)爾諧へよと。民を是れ(二一)紀せしむ。乃ち眷みて北に徂き、(二二)帝祉を對揚す。　其五

【大意】庶民未だ安からず。帝因つて大に政事に勤め、明德の士(馮生)を求めて縣令となさんとす。宰臣皆言ふ馮生其政を諧和すべしと。帝乃ち馮生をして斥丘の民を治めしむ。馮生是に於て北のかた斥丘に往き、帝德を發揚す。

疇昔の游、(二三)好合纏緜たり。借ひ未だ給らずといふも、亦既に三年なり。居ては(二四)華幄に陪し、出でては(二五)朱輪に從ひ、(二六)驥を方べ鑣を齊うし、迹を比べ塵を同うす。　其六

【大意】君と我とは從來親交極めて密なり。未だ足れりとなすを得ざれども、既に三年の久しきに

【一七】羣黎。庶民なり。
【一八】我。帝をいふ。明德とは善德ある人。馮生を指す。
【一九】百里。縣なり。縣は凡そ方百里なり。
【二〇】爾諧。爾は馮生を指す。其政を諧和せよとなり。
【二一】紀。治むること。
【二二】帝祉。帝の福なり。對揚は天意に答へて發揚すること。
【二三】好合。親交なり。纏緜は密なる貌。
【二四】華幄。太子の帳なり。
【二五】朱輪。朱塗の車。太子の車なり。
【二六】驥。駿馬なり。

及べり。其間居ては俱に太子の帳帷に侍し、出でては駒を竝べ迹を連ねて太子に從へり。

(二七)之子既に命ぜられ、(二八)四牡項領す。塗に遵ひて遠く蹈み、軌を騰げて高く騁す。(二九)慶雲質を扶け、清風景を承く。嗟我れ人を懷ふ。其の邁く惟れ永し。　其七

【大意】馮生既に帝命を受け、車に駕して任に斥丘に赴く。我れ之を見送れば瑞雲其身を扶け、清風其影を護る。因つて此の遠行の人を思ふこと深し。

(三〇)否泰殊なるあり、窮達違ふあり。子が(三一)春華に及ぶも、爾が(三二)秋暉に後る。逝いて將に我を去り、彼の(三三)朔陲に陟らんとす。子を之れ念ふにあらずんば、心孰が爲にか悲まん。　其八

【大意】人には運と不運とあり、窮達亦各〻異り、故に我は君と少年の榮華を俱にするを得たるも、晩年の盛貴を俱にするを得ず。(士衡時に官を免せられて家居す。故に此言あり。)君既に往き、將に斥丘に到らんとす。君の如き親交ある友を思はずして、復た誰をか思はんや。

【二七】之子。馮生を指す。
【二八】四牡。四匹の馬。一車に四馬を駕す。項領はクビキを項上に著くること。
【二九】慶雲。瑞雲なり。質は軀なり。
【三〇】否泰。好運と不運なり。
【三一】春華。少年なり。
【三二】秋暉。老成なり。
【三三】朔陲。北邊なり。斥丘をいふ。

陸士衡

(一)賈長淵に答ふ

【一】賈長淵。賈謐、字は長淵。

余昔(一)太子洗馬たり。魯公賈長淵、(二)散騎常侍を以て、一(四)東宮に侍すること年を積めり。余出でて(五)吳王の郎中令に補し、元康六年、入りて(六)尚書郎となる。魚公詩一篇を贈る。此詩を作りて之に答ふと云爾。

伊れ昔皇あり、肇めて(七)黎蒸を濟ふ。天に先だちて物を創め、(八)景命に是れ膺る。降りて(九)羣后に及び、迭に毀れ迭に興る。(一〇)邈たるかな終古、(一一)崇替徵あり。　其一

【大意】昔三皇天下を統べ、天意に先だちて萬物を化成し、始めて天命を受けて天子となる。爾來衆君主或は興り或は亡び、その興廢の徵歷然として存せり。

漢の季に在りて、(一二)皇綱幅裂し、(一三)火辰暉を匿し、(一四)金虎質を曜かし、雄臣(一五)馳騖し、義夫節に赴き、位を釋て戈を揮ひ、言に王室を謀る。　其二

【大意】漢の末に至り、皇威衰へて天下騷亂するや、英雄義士奔走して忠節を蹈み、己の守位を棄て戈を揮つて王室を救はんことを謀る。

王室の亂るる、邦として泯びざるはなし。彼の(一六)墜景の如く、曾て振ふべからず。乃ち(一七)三哲を眷み、斯民を乂めしむ。土を啓くこと難しと雖も、物を改めて天に承く。　其三

【大意】王室亂るれば、國として滅びざるはなし。恰も落日の再び回らすべからざるが如し。天乃ち劉備、孫權、曹操の三雄を眷顧し、天下の民を治めしむ。三雄乃ち艱難を排して國土を拓き、漢の物制を改めて天命に奉承す。

爰に茲の(一八)有魏、宮に(一九)天邑に卽く。(二〇)吳實に龍のごとく飛び、(二一)劉も亦岳のごとく立つ。(二二)干戈載ち揚り、(二三)俎豆載ち戢まる。民は師の興るに勞れ、國は(二四)凱の入るに玩ふ。　其四

【大意】ここに於て吳魏蜀の三國、天下を三分して各〻帝位に卽き、その勢龍の如く山の如し。遂に三國分爭の端を開き、干戈頻りに動いて、禮樂を脩むるに遑なく、民は戰亂に苦み、國は唯戰勝を尙ぶに至れり。

天(二五)霸德を厭ひ、(二六)黃祚羣を告ぐ。(二七)獄訟魏を

【一】太子洗馬。官名。
【二】散騎常侍。官名。
【四】東宮。皇太子なり。
【五】吳王。名は晏、字は平度、晉の武帝の第二十三子、吳に封ぜらる。郎中令は官名。
【六】尚書郎。官名。
【七】黎蒸。衆庶なり。
【八】景命。景は大、天の大命なり。
【九】羣后。衆君主なり。
【一〇】邈。遠きこと。終古は太古より以來。
【一一】崇替。興廢なり。
【一二】皇綱。皇室の權力。幅裂は帛幅の如く裂くること。
【一三】火辰。心星なり。この星明かなれば天下和平なり。暗ければ天下爭亂す。
【一四】金虎。金は太白星、虎は昴星、この二星相薄れば兵亂あり。
【一五】馳騖。奔走といふが如し。

【一六】墜景。落日なり。
【一七】三哲。劉備、孫權、曹操なり。
【一八】有魏。有は意義なし。曹操天子となり、國を魏と號す。
【一九】天邑。帝都なり。
【二〇】吳。孫權天子となり、國を吳と號す。
【二一】劉。劉備なり、天子となり、國を蜀漢と號す。
【二二】干戈。タテ及びホコ。武器なり。
【二三】俎豆。祭の時供物を盛る器。戢は藏なり。
【二四】凱。凱歌なり。戰勝ちて歸る時の歌。
【二五】霸德。魏をいふ。
【二六】黃祚。魏は土德なり、土

違り、謳歌晉に適く。(二八)陳留藩に歸し、我が皇禪に登る。(二九)庸岷稽顙し、(三〇)三江獻を改む。

其五

【大意】天魏主の無德を厭ひ、乃ち其凶兆を示す。是に於て獄を決し訟を定め、道德を謳歌する者、皆魏を去りて晉に往く。魏主乃ち位を禪りて藩臣の位に就き、我君（晉の武帝）帝位に卽く。吳蜀亦晉德に歸服して臣となる。

(二一)赫たるかな隆晉、奄に(二二)率土に宅り、天人に對揚して、(二三)有秩斯れ祜す。惟れ(二四)公太宰として、光に(二五)二祖を翼け、(二六)洪胄を誕育して、(二七)戎に魯に纂がしむ。

其六

【大意】赫赫たる我が晉、天下を統御し、天人の意を得て、茲に天子の位に在り。君の父賈公太宰として二祖（晉の太祖世祖）を輔佐し、君を生長して魯公の封爵を繼がしむ。

の色は黃なり。故に黃祚といふ。祚は皇位なり。

【二七】獄訟。孟子に天下ノ朝覲獄訟スル者、堯ノ子ニ之カズシテ舜ニ之キ、謳歌スル者堯ノ子ヲ謳歌セズシテ舜ヲ謳歌スとあり。

【二八】陳留。魏帝位を晉に禪る。乃ち魏帝を封じて陳留王となす。

【二九】庸岷。庸は國の名。岷は山の名。蜀をいふ。稽顙は頓首といふが如し。

【三〇】三江。吳をいふ。

【三一】赫。盛なる貌。

【三二】率土。天下なり。

【三三】有秩。秩は次なり。天子の位次にのぼること。

【三四】公。賈謐の父、賈充を指す。

【三五】二祖。晉の太祖大將軍となりし時、賈充を以て司馬右長史となし、世祖禪を受くるに及んで太宰となす。

【三六】洪胄。長子なり。謐を指す。誕育は生みそだてしこと。

【三七】戎。汝なり。賈充を指す。

(三八)東朝既に建ち、(三九)淑問義義たり。(四〇)我れ明德を求め、同を濟ふに和を以てす。魯公戾りて、(四一)袞服委蛇たり。(四二)皇儲を思媚して(四三)承華に高步す。

其七

【大意】太子（愍懷太子なり）立ちて美譽頃る高し。明德の士を求めて共に王事を濟し、心を同うして和穆せんとす。魯公（賈謐）乃ち京師に至り、散騎常侍に任ぜられ、太子の宮に事ふることとなれり。昔我れ茲に逮び、時れ惟れ(四四)下僚なり。子と(四五)棲遲し、林を同うして條を異にす。年殊にして志比し、(四六)服舛ひて義稠し。游三春に跨え、情(四七)二秋に固し。

其八

【大意】昔我亦太子洗馬となり、君が下僚たり。同じく太子の宮に事へたれども、君は尊にして我は卑（林を同うして條を異にす）。年齡異れども（謐は少、士衡は長）志は同じく、服は異れども交義は密なり。三春の行樂を偕にし、二年を歷て情誼益〻堅し。

祇んで皇命を承け、(四八)出納違ふなく、往きて(四九)藩朝を踐み、來りて(五〇)紫

【三八】東朝。太子をいふ。

【三九】淑問。問は聞なり。美譽なり。義義は高き貌。

【四〇】我。太子を指す。明德は善德ある人。

【四一】袞服。王公の服なり。委蛇は美なる貌。

【四二】皇儲。太子なり。思媚の媚は愛なり。

【四三】承華。太子の宮門なり。

【四四】下僚。したやく。太子洗馬をいふ。

【四五】棲遲。遊息なり。

【四六】服。章服なり。章服は尊卑によりて制を異にす。

【四七】二秋。二年なり。

【四八】出納。王言を出すといること。

【四九】藩朝。吳なり。

【五〇】紫微。天子の宮なり。

微を歩み、(五一)祕閣に升降して、(五二)我が服載ち暉る。孰か懼れずと云はん、仰いで(五三)明威を肅む。其九

【大意】君は謹んで王言を出納して過失あるなく、出でて吳王に仕へて郎中令となり、歸りて皇宮に仕へて尚書郎となり、光榮ますます其身に加はり、仰いで天子の明威を敬す。

(五四)分索は則ち易く、手を攜ふるは實に難し。昔の良游を念ひ、茲焉に永歎す。公の云に感ずる、此の(五五)音翰を貽る。(五六)蔚たる彼の高藻、玉の如く蘭の如し。其十

【大意】夫れ離別は易く、集會は難し。昔日の同遊を思へば、永嘆せざるを得ず。公亦我を思ひ詩筆を寄せらる。其文彩あること玉の如く蘭の如し。

惟れ(五七)漢に木あり、曾て境を踰えず。惟れ南に金あり、萬邦詠を作す。(五八)民の胥好する、(五九)狂狷聖を厲き、在昔に(六〇)儀形せしむ。予子が命を聞けり。其十一

【大意】江漢に木あり柑といふ。之を江北に移せば變じて橙となる。故に境を超えて他に移すべか

【五】祕閣。尚書省なり。
【五一】我。賈謐を指す。
【五二】明威。天子の威嚴なり。
【五三】分索。索は散なり。
【五四】音翰。翰は筆、詩章なり。
【五五】蔚。文彩ある貌。高藻は美しき詩。
【五六】漢。川の名、南方に在り。
【五七】民。人なり。賈謐を指す。
【五八】狂狷。狂は進取の氣象に富むも行の及ばざる人。狷は律義にして固く義を守る人。中庸を得ざる人をいふ。
【六〇】儀形。範を取りのつとること。

らず。南に金あり百鍊すれども銷せず。故に萬國之を詠ず。(賈謐の贈詩に「南に在りては柑と稱し、北に度れば則ち橙」の句あり。士衡を戒むるに節を變ずべからざるを以てせるなり。士衡因つて、答ふるに金の堅剛に倣ひて、節を變ぜざるべきを以てするなり)君よく我を愛好し、我に訓戒の詩を賜ひ、此の狂狷の心を厲き、聖人の心となさしむ。則るに古人の道を以てせよとの言、亦謹んで之に從はん。

(一)承明に於て作り　(二)士龍に與ふ

陸士衡

世に牽かれて(三)時網に嬰り、駕して言に遠く(四)徂征す。飲餞豈異族ならんや。親戚弟と兄と。(五)婉孌たる居人の思、(六)紆鬱たる游子の情、(七)明發まで安寐を遺れ、(八)寤言して涕纓に交る。塗を(九)長林の側に分ち、袂を(一〇)萬始の亭に揮ふ。(一一)佇眄して遐景を要し、耳を傾けて餘聲を玩る。南に歸りて(一二)永安に憩ひ、北に邁きて承

【一】承明。亭の名。亭とは驛といふが如し。
【二】士龍。士衡の弟、陸雲也。
【三】時網。世網といふが如し。世間の係累なり。
【四】徂征。行くこと。吳より洛陽に行くなり。
【五】婉孌。思慕の貌。居人は後に留まる人、陸雲等を指す。
【六】紆鬱。愁思の貌。游子は旅客、士衡自ら謂ふ。
【七】明發。曉なり。
【八】寤言。目の覺むること。言は助辯。纓は冠の紐。
【九】長林。亭の名。
【一〇】萬始。亭の名。
【一一】佇眄。立どまりて見廻すこと。遐景は遠影なり。要は視んと心に求むること。
【一二】永安。亭の名。

明に頓る。永安に(一三)昨軌あり、承明に子予を弃つ。俯仰して(一四)林薄を悲み、慷慨して(一五)辛楚を含めり。往を懷ひて歡端を絶ち、來を悼んで憂緒を成す。別を感じて翮を舒べんことを慘み、歸を思ひて渚に遵はんことを樂む。

【大意】われ世累に罹りて遠く洛陽に往かんとすれば、君（士龍）は我を送りて此に來れり。君は我を慕ひつつ故郷に留まり、我は愁を懷いて此地を去らんとす。悲愁のあまり曉に至るまで眠られず、眠覺れば涙流れて纓を沾す。心を決して萬始亭に相別れしも、尚ほ立つて君の影を望み、耳を傾けて君が聲を聽かんと欲す。君南に歸りて永安亭に至らば、昨日の車迹あるを見ん。我北に往きて承明亭に至るも復た君を見ず。ただ叢林の間に俯仰して悲痛するのみ。往時の歡を思へば、今や已に其端を絶てり。將來を思へば憂心起りて心緒を亂す。離別を悲むの情は翮を舒ぶるの飛鵠よりも痛み、歸郷を思ふの情は渚に遵ふの歸雁よりも樂むなり。

【一】尚書郎。官名。顧榮、字一は彥先、吳人なり、晉に仕へ一て尚書郎たり。
【二】大火朱光を貞し、

【三】昨軌。兄弟二人にて昨日通りし車の跡。
【四】林薄。叢林なり。
【五】辛楚。悲痛なり。

(二)尚書郎顧彥先に贈る二首

陸士衡

(六)積陽南より熙る。
(七)望舒金虎に離り、
(八)屏翳重陰を吐く。
(九)淒風時序に迕ひ、
(一〇)苦雨遂に霖を成す。朝に游んで(八)輕羽を忘れ、夕に息ひて重衾を憶ふ。物に感じて百憂生じ、(九)纏緜として自ら相尋ぐ。子と(一〇)蕭牆を隔て、蕭牆阻り且つ深し。形影曠にして接せず、託する所は聲と音とのみ。音聲日夜闊し。何を用てか吾が心を慰めん。

【大意】今や盛夏の時なるに日夜雨ふりつづき、寒風時ならざるに至り、人人皆患苦に堪へず。朝には暑くして扇を欲し、夕には寒くして重衾を擁せばやと思ふ。此の風雨の序を失へるに感じ、遂に百憂交〻起りて絶ゆる事なし。君と僕とは垣一重を隔てて住すれば、姿は相見る能はず、ただ時時音信を通ずるのみ。若し音信疎濶なるに至らば、如何ぞ我が此憂を慰むるを得んや。

朝游して(一一)曾城に游び、夕に息ひて(一二)直廬に旋る。迅雷中宵激し、驚電光夜舒ぶ。(一三)玄雲朱閣に拖き、振風(一四)綺疏に薄る。(一五)豐注脩霤に溢れ、(一六)潢

【五】肆翳。雨の神。
【六】淒風。寒風なり。時序は時候の順序。
【七】苦雨。霖なり。ながあめ。

【八】輕羽。扇なり。
【九】纏緜。思亂るる貌。
【一〇】蕭牆。庭の垣。

【一一】曾城。層城に同じ。
【一二】直廬。宿直所なり。
【一三】玄雲。黑雲。
【一四】綺疏。窓なり。
【一五】豐注。多量の雨水。脩霤は長きアマドヒ。
【一六】潢潦。雨水なり。階除は

潦階除を浸す。(一七)停陰結んで解けず、(一八)通衢化して渠となる。(一九)沈稼梁潁に湮み、流民(二〇)荆徐に泝る。(二一)眷言して桑梓を懷ふ。乃ち將に魚とならんとするなからんや。

【大意】朝に城闕の間に出仕し、夕に宿直所に歸れば、中夜雷霆轟き電光閃き、黑雲朱閣に曳き疾風窓を打ち、雨水高簷の霤に溢れ、階庭を浸し、雲結んで開けず、通路化して溝となる。梁潁の間稻粱水に沒し、人民泝りて荆徐に避難す。因つて思ふに、吾が故郷は水國なり。其民或は化して魚となるに至らんか。憂ふべきなり。

(一)顧交阯公眞に贈る

陸士衡

顧侯明德を體し、淸風肅くして已に邁し。迹を發して(二)藩后を翼け、改め授けられて(三)南裔を撫す。鼓を(四)五嶺の表に伐ち、旌を萬里の外に揚ぐ。績を遠くして小を辭せず、德を立てて大

【一】顧交阯。顧祕。字は公眞、晉に仕へて交州刺史たり。交阯は交州なり。
【二】藩后。后は君なり。公眞初め吳王の郎中令となる。
【三】南裔。南方の邊地。交阯なり。
【四】五嶺。大庾、始安、臨賀桂陽、揭陽をいふ。支那の南方にある山なり。
【七】停陰。あまぐも。
【八】通衢。通路なり。
【九】沈稼。稼は田苗なり。梁潁は二郡の名。
【一〇】荆徐。二州の名。
【一一】眷言。顧ること。言は助辭。桑梓は故郷なり。士衡は吳の人。吳は水國なり。

殿階及び庭。

に在らず。高山安んぞ凌ぐに足らん、巨海猶ほ(五)縈帶す。惆悵して飛駕を瞻、領を引いて(六)歸旆を望む。

【大意】顧公は身に明德を抱き、威風肅厲なり。初め吳王の郎中令となり、任せられ、南方萬里の外に征戰せられんとす。よく遠地に功績を立てんとして小位を辭せず、德を立てんことを主として必ずしも大國を求めず。其人品想ふべきなり。交州は帝京を距ること遠く、途に高山ありと雖も、その險越え易く、大海之を繞れば、水路また渡り難からず。われ公の去るを見て悲に堪へず。願くは早く帝京に歸られんことを。

從兄(一)車騎に贈る

陸士衡

孤獸故藪を思ひ、離鳥舊林を悲む。(二)翩翩たる游宦の子、辛苦誰か心をなさん。(三)谷水の陽を髣髴し、(四)崐山の陰を婉孌し、(五)營魄茲土を懷ひ、(六)情爽飛沈の若

【一】車騎。官名。從兄は陸士光なり。
【二】翩翩。旅遊の貌。游宦は官吏として他鄉に在ること。
【三】谷水。吳地に在る川。髣髴は見て明かならざる貌。
【四】崐山。吳地に在る山。婉孌は思慕する貌。
【五】營魄。心魂なり。茲土は吳なり。
【六】精爽。心魂なり。
【五】縈帶。衣帶の如く繞る。
【六】歸旆。旗を歸して京に歸ること。

し。(七)寤寐安豫するなく、(八)願言して欽する所を思ふ。彼の(九)歸塗の艱に感じ、我をして怨慕深からしむ。安んぞ忘歸草を得て、言に背と襟とに樹ゑん。斯言豈虛作ならんや。思鳥悲音あり。

【大意】故郷に在る從兄を思ひて作れるなり。鳥獸すら尙ほ故林を思ふ。況んや人に於てをや。遊宦して他郷に在れば心常に苦んで安き時なく、吳地の山水を思ひて戀戀の情に堪へず。心之が爲に飛ぶが如く沈むが如く、定あることなく、起臥の間常に敬慕する所の君を思ひつつあれども歸途の險難を思へば、益〻怨慕の心に堪へざるなり。ただ忘歸草を得て之を前後に植ゑ、之を見て歸郷の情を忘るるの外なし。我が此言あるは、決して徒爾にあらず、鳥すら故林を思ひて悲しむにあらずや。

【七】寤寐。ねてもさめても。安豫は安樂なり。
【八】願言。思ふこと。言は助辭。
【九】歸塗。歸途なり。

(一)張士然に答ふ

陸士衡

身を契くして(二)祕閣に躋る。祕閣は(三)峻且つ玄なり。終朝文案を理し、薄暮眠るに遑あらず。駕して言に(四)明祀を巡ひ、敬を致して年を祈るに在り。(五)春王の囿に逍遙し、(六)千畝の田に躑躅す。廻渠(七)曲陌を繞り、通波(八)直阡を扶く。(九)嘉穀重穎を垂れ、芳樹(一〇)華顚を發く。余は固より水郷の士、轡を捲りて清淵に臨み、(一一)戚戚として遠念多く、行行遂に篇を成す。

【大意】余は著作郎として祕書省に仕ふ。この省は高深幽遠の地に在り。朝には文案を作り、夜も眠るに遑なし。天子の駕に從ひ百神を祭りて豐年を祈り、春王囿に從遊し、籍田の儀に陪す。阡陌縱横して溝渠其間を繞り、稻粱穗を垂れ、樹梢に花を著く。余は吳地水郷の人なり。水を慕ふこと常人と異り。故に忽ち清淵に臨み、故郷を思ひ、遂に此篇を成せり。

【一】張士然。張悛、字は士然、少くして文章を以て士衡と友とし善し。
【二】祕閣。祕書省なり。士衡は著作郎として祕書省に在り。
【三】峻。高なり。玄は幽深なり。

【四】明祀。祭祀なり。
【五】春王囿。洛陽宮にある園の名。
【六】躑躅。千畝。天子の籍田なり。躑躅は徘徊といふが如し。
【七】曲陌。曲れるアゼミチ。
【八】直阡。眞直なるアゼミチ。
【九】嘉穀。美穀なり。重穎は穂なり。
【一〇】華顚。花咲く梢。
【一一】戚戚。憂ふる貌。

(一)顧彥先が爲に婦に贈る二首

陸士衡

家を辭して遠く行遊す。(二)悠悠三千里。

【一】顧彥先。名は榮、字は彥先、吳の人、吳平ぎて後、士衡兄弟と同じく洛に入り、三俊の號あり。
【二】悠悠。遠き貌。

(三)京洛風塵多く、(四)素衣化して緇となる。身を脩めて憂苦を悼み、(五)同懷の子を感念す。(六)隆思心曲を亂し、(七)沈歡滯りて起らず。歡沈みて剋く興し難く、心亂れて誰が爲にか理せん。願くは(八)歸鴻の翼を假り、翻飛して(九)江汜に游ばん。

【大意】此首は顧彥先が洛陽に客遊せし時、顧に代りて、其妻に寄せし詩なり。われ家を離れて三千里外の洛陽に客たり。京師は風塵多く、白衣も忽ち化して黑となるほどなり。身を脩めんとして志を得ず、常に憂苦を抱くに因り、頻に鄕里に在る汝を思ひ、歡情沈滯して復た起らず。心亂れて理めんやうなし。願くは歸雁の翼を借り得て、汝の所に飛び返らんことを。

(一〇)東南に思婦あり、(一一)長歎(一二)幽闥に充つ。借問す歎ずるは何が爲ぞ、(一三)佳人天末に眇なり。(一四)遊宦して久しく歸らず、山川脩く且つ濶し。形影(一五)參商乖き、(一六)音息曠うして達せず。離合常あるにあら

【三】京洛。洛陽。晉の都。
【四】素衣。白衣なり。緇は黑色。
【五】同懷の子。心を同うする人、妻をいふ。
【六】隆思。繁きおもひ。心曲は中心なり。
【七】沈歡。憂の爲に沈滯せる歡情。
【八】歸鴻。北より南に歸る雁。
【九】江汜。江岸なり。吳は江南に在り。
【一〇】東南。吳をいふ。思婦は夫を思慕する妻。
【一一】幽闥。深閨なり。
【一二】佳人。彥先を指す。天末は遠方。
【一三】遊宦。前詩に見ゆ。
【一四】參商。二星の名、この星出沒して相見ることなし。
【一五】音息。音問消息。

ず、彼の弦と(一六)筈とに譬ふ。願くは(一七)金石の軀を保ち、妾が(一八)長饑渴を慰めんことを。

【大意】此首は婦に代りて顧に答ふるなり、題誤れり。吳國に思婦あり。長嘆して深閨の中に在り。何故に長嘆するかといふに、夫遠く京師に宦し、山川長遠にして、相隔たること參と商との如く、音信も久しく通せざればなり。人生の離合は常にすべからず。猶は弓弦と箭筈と暫く相會ふも、忽ち相離るるが如し。ただ身體を保養し、早く歸りて妾が相思の情を慰め給へ。

【一六】筈。矢端の弦を受くる所。
【一七】金石。堅固なること。
【一八】長饑渴。相思の情に喩ふ。

陸士衡

(一)馮文羆に贈る

昔(二)二三子と、承華の南に游息し、翼を拊ちて(三)枝條を同うし、翻飛して各〻(四)尋を異にす。苟に風を凌ぐの翮なく、徘徊して故林を守る。慷慨して誰が爲にか感ずる、(五)願言して欽する所を懷ふ。軫を(六)清洛の汭に發し、馬を(七)大河の陰に驅せ、佇立して(八)朔塗を望めば、悠悠として迥に且つ深し。(九)分索は古も悲みし所、志士苦心

【一】馮文羆。前に見ゆ。
【二】二三子。馮文羆等を指す。承華は太子の宮門、士衡文羆と同じく太子洗馬たり。
【三】枝條。條も枝なり。
【四】尋。仞なり。八尺をいふ。
【五】願言。思ふこと。言は助辭。
【六】清洛。洛陽の南にある川。
【七】大河。黃河なり。
【八】朔塗。北方の道。斥丘縣は北に在り。
【九】分索。離別なり。

多し。悲情川に臨んで結び、苦言風に隨つて吟ず。愧づらくは(一〇)雜佩の贈なし。(一一)良訊兼金に代ふ。(一二)夫子遠猷を茂くし、(一三)欵誠惠音を寄せよ。

【大意】　われ君と共に太子に仕へて洗馬たり。恰も鳥の枝を同うして栖めるが如し。然も羽翼力を同じうせず、君は翻飛して斥丘縣令となりしも、余は舊官を守りて此に留る。ただ悲嘆して君を思慕するのみ。因つて車馬を驅りて洛外に出で、君の行を送りて斥丘を望めば、悠悠として遼遠なり。夫れ別離は古人の悲みし所、我豈心を苦めざるを得んや。川に臨んで悲情を抱き、風に隨つて苦吟を發す。今別るるに臨み、君に贈るに雜佩を以てせんと思へども、貧にして力能はず。已むなく訓戒の辭を呈して餞別となす。願くは美遠の德を養ひ、誠心の志を抱き、時に音信を寄せられよ。

【一〇】雜佩。寶重の物。
【一一】良訊。善き戒の辭。兼金は好金なり。
【一二】夫子。文瞿を指す。遠猷は美遠の德。
【一三】欵誠。誠信なり。惠音は音信なり。

弟(一)士龍に贈る　陸士衡

行きて路の長きを怨み、(二)憖焉として別の促なるを傷む。途を指して悲餘あり、觴に臨んで歡足らず。我は(三)西流の水の若く、子は(四)東跱の岳と

【一】士龍。陸雲なり。
【二】憖焉。憂ふる貌。
【三】西流。士衡は吳より洛陽に往く。故に西流といふ。
【四】東跱。東に止ること。士龍は吳地に留る。故に東跱の

なる。慷慨して(五)逝言感じ、徘徊して(六)居情育す。安んぞ手を攜へて俱にするを得て、(七)契闊騑服と成らん。

【大意】　われ鄉里を離れて洛陽に往かんとし、道途の長遠なるを怨み、君と忽ち相別れざるを得ざるを悲む。行程の遠きを見ては悲益〻加はり、離杯を擧ぐるも歡情少しも起らず。是れより我は西を指して去り、君は永く鄉に留る。往く身は感慨の言多く、留る者は情思深し。願くは將來勤苦すと雖も、兄弟相隨ひて相離るるなからんことを。

【一】士龍。陸雲なり。
【二】憖焉。憂ふる貌。
【三】西流。士衡は吳より洛陽に往く。故に西流といふ。
【四】東跱。東に止ること。士龍は吳地に留る。故に東跱の山といふ。
【五】逝言。往く人の言、士衡の言なり。
【六】居情。留り居る人の情、士龍の情なり。育は生なり。
【七】契闊。勤苦なり。騑服は馬なり。一車に四馬を駕す。中央の二を服馬といひ、服馬の兩傍にあるを騑馬といふ。騑服は常に相隨ふ。

賈謐の爲に作り陸機に贈る　潘安仁

肇め(一)初創せしより、(二)二儀烟熅たり。粤に生民あり、(三)伏羲始めて君たり。繩を結び化を闡き、(四)八象文を成す。(五)芒芒たる九有、區域以て分る。其一

【大意】　太古草昧の初、天氣下降し地氣上升して、ここに人を生じ、伏羲始めて天子となり、結繩

【一】賈謐。字は長淵、前の陸士衡の詩に見ゆ。
【二】初創。太古草昧の時。
【三】二儀。天地なり。烟熅は天地の氣の蒸しあがる貌。
【四】伏羲。太古の帝王の名。八象。八卦なり。
【五】芒芒。廣き貌。九有は九州なり。支那全土の稱。

の政をなし、八卦を畫し文字を成せり。九州の都邑ここに始めて區分せらる。

(七)神農更りて王たり、(八)軒轅紀を承け、野を畫り疆を離ち、爰に衆子を封ず。夏殷既に襲り、宗周(九)祀を繼ぎ、(一〇)緜緜たる瓜瓞、(一一)六國互に峙つ。　其二

【大意】神農代りて天子となり、黄帝その統を繼ぎ、國土を分ちて九子を封じ、夏殷之に因り、周亦その統を繼ぎ、六國瓜蔓の相引くが如く互に立てり。

(一二)彊秦兼并し、(一三)四隅を呑滅す。(一四)子嬰面櫬して、(一五)漢祖圖に膺る。(一六)靈獻微弱にして、(一七)涅に在りて則ち渝る。(一八)三雄鼎足して、孫南吳を啓く。　其三

【大意】强秦立ちて六國を并呑し、天下を一統せしも、子嬰に至りて面縛輿櫬して降り、秦ここに滅ぶ。漢の高祖乃ち圖錄に應じて天子となる。靈獻二帝に至り、王室微弱にして震はず。姦雄の爲に移され、ここに三國分立の端を開き、孫權遂に南に吳國を建つ。

【七】神農。太古の帝王の名。
【八】軒轅。太古の帝王の名。黄帝なり。紀は統といふが如し。
【九】祀。世なり。
【一〇】緜緜。絶えざる貌。瓜瓞は瓜の蔓。
【一一】六國。韓燕趙魏齊楚なり。
【一二】彊秦。暴秦なり。
【一三】四隅。四方なり。
【一四】子嬰。秦王の名。面省とは、面縛し棺を負ひて降ること。櫬は棺なり。
【一五】漢祖。漢の高祖。圖に膺るとは未來記に應ずること。
【一六】靈獻。後漢の二帝の名。
【一七】涅。水底の黑土、どぶどろ。曾子の言に沙泥ニ在レバ之ト皆黑シとあり。
【一八】三雄。魏の曹操、蜀の劉備、吳の孫權なり。鼎立とは天下を三分して立つこと。

南吳伊れ何ぞ、僭號して王と稱す。大晉天を統べ、仁風遐く揚る。(一九)僞孫璧を銜み、土を奉げ疆を歸す。(二〇)婉婉たる長離、江を凌ぎて翔る。　其四

【大意】吳國是れ何物ぞ、僭號して王と稱するのみ。わが晉の武帝天下を統べ、仁風天下に洽きに至り、吳王孫皓晉に降りて國土を捧げ、吳ここに滅ぶ。時に鳳鳥あり江を渡りて帝京に翔る。(陸機は吳の人なり、吳の滅ぶるや、洛陽に來り仕ふるに喩ふ。)

長離を誰とか云ふ、咨爾(二一)陸生なり。(二二)鶴九皐に鳴くすら、猶ほ厥聲を載す。況んや迺ち(二三)海隅にして、名を上京に播くをや。爰に(二四)旌招に應じ、翼を(二五)宰庭に撫ふ。　其五

【大意】鳳とは卽ち君(陸機を指す)なり。鶴の九皐に鳴くすら、猶は詩經に之を記載せり。況んや大鳳遠く吳地に居り、遙に其名を京師(晉都洛陽)に馳せたるをや。乃ち宰臣楊駿の辟に應じて來り仕ふるに至りぬ。

【九】僞孫。孫皓なり。僭號して王と稱す。故に僞といふ。璧は國寶。降る者之を君に奉る。面縛して手の執るべきなし。故に銜むといふ。
【一〇】婉婉。美なる貌。長離は鳳なり、以て陸機に喩ふ。
【一一】陸生。陸機なり。
【一二】鶴。詩經に鶴九皐ニ鳴キ聲天ニ聞ユとあり。九皐は深き澤。
【一三】海隅。吳をいふ。
【一四】旌招。孟子に士ヲ招クニ旌ヲ以テスとあり。
【一五】宰庭。晉の太傅楊駿、陸機をめして祭酒となす。宰とは駿を指す。

(二六)儲皇の選、實に(二七)惟良を簡ぶ。(二八)英英たる朱鸞、來ること南岡よりす。(二九)藻を崇正に曜し、(三〇)玄冕丹裳す。彼の蘭蕙の如し。載ち其芳を採る。

【大意】太子の師友は必ず天下の英俊を擇ぶ。陸生南より來り、太子洗馬となり、文章を崇正殿に輝かし、其芳蘭蕙の如し。太子則ち其道德の芳を取る。

(三一)藩岳鎭を作し、我が京室を輔く。(三二)桑梓に旋反し、帝弟に弼と作る。或は云ふ(三三)國宦は、清塗の失ふ攸なりと。(三四)吾子洗然とし、恬淡にして自ら逸む。　其七

【大意】惠帝の弟晏、吳王となりて吳を鎭じ、以て皇室に藩屏となるや、君その郎中令に任ぜられ、故國に歸る。人或は言ふ太子洗馬より出でて吳王の郎中令となれるは、卽ち左遷なりと。君少しも意に介せず、洒然として自ら樂めり。(三五)廊廟惟れ清く、(三六)俊乂是れ延む。擢でられて(三七)嘉舉に應じ、(三八)國よりして遷り、轡を(三九)羣龍に

【二六】儲皇。太子なり。
【二七】惟良。賢良なり。
【二八】英英。鮮明なる貌。朱鸞は瑞鳥。陸機に喩ふ。
【二九】藻。文章なり。崇正は太子の宮なり。
【三〇】玄冕。黑き冠。丹裳は赤き裳、大夫の儀服なり。
【三一】藩岳。諸侯をいふ。晉の惠帝の弟、吳王晏出でて大將軍となり以て吳を鎭ず。陸機之に仕へて郎中令となる。
【三二】桑梓。鄕里なり。吳をいふ。
【三三】旋反。歸ること。國宦。諸侯の官。清塗とは清官の途なり。
【三四】吾子。陸機を指す。洗然は洒然なり。
【三五】廊廟。天子の朝廷。
【三六】俊乂。俊傑なり。
【三七】嘉舉。拔擢といふが如し。
【三八】國。吳をいふ。
【三九】羣龍。衆賢に喩ふ。

齊うし、(四〇)納言を光讚し、(四一)省闥に優游し、筆を(四二)華軒に珥む。　其八

【大意】朝廷よく理まり、俊傑皆進用せらる。君亦拔擢せられて郎中令より入りて尙書郎に任ぜられ、衆賢と相伍して納言を輔佐し、尙書省に出仕し、筆を殿上に援りて王命を起草す。

昔余と子と、(四三)東朝に繾綣す。禮するに賓を以てすと雖も、情は(四四)友僚に同じ。絲竹を嬉娛し、(四五)鞞を撫ち韶を舞ひ、(四六)脩日朗月、手を攜へて逍遙す。　其九

【大意】昔君と僕とは同じく太子に仕へ、禮を以て相敬せりと雖も情に於ては同僚と異らず、(謐は散騎常侍にして位尊く、陸機は太子洗馬にして位卑し)常に絲竹舞樂を以て興に樂み、永日を消し明月を賞せり。

我れ羣を離れてより、今に(四七)二周なり。其面を簡てりと雖も、(四八)分は情深に著る。子其れ(四九)超たり。實に我心を慰む。言に發して詩を爲り、(五〇)好音を俟ち望む。　其十

【大意】我れ君と別れてより已に二年なり。面は相見ずと雖も、朋友の分義は深情に明かなり。今

【四〇】納言。官名、帝命を出納することを掌る。光讚は輔くること、陸機は郎たり、故にいふ。
【四一】省闥。尙書省なり。
【四二】華軒。殿上の曲欄。
【四三】東朝。太子の朝廷。繾綣は情思の厚きこと。
【四四】友僚。同僚なり。
【四五】鞞。小鼓なり。韶は舜の樂の名。
【四六】脩日。長き日、朗月は明月なり。
【四七】二周。二年なり。
【四八】分。朋友たるの分義。
【四九】超。のぼりて尙書郎となれること。
【五〇】好音。音信なり。

擢んでられて尚書郎となれるは、實に吾が心を慰むるに足る。因つて詩を作りて君に贈り、君が返詩を望む所以なり。

其の高さを崇さんと欲すれば、必ず其層を重ぬ。德を立つるの柄、(五)安恆にあらざるはなし。南に在りては(六)甘と稱し、北に度れば則ち橙。子が(七)鋒穎を崇くし、頽かず崩れざれ。　其十一

【大意】德を高くせんと欲せば自ら修養を積まざるべからず。德を立つるは常道を安守するに在り。江南の柑は之を江北に移せば橙となる。人も亦此の如くなり易し。君よく之を戒め境遇に因りて其節を變ずる勿れ。益その德を高うして、崩壞せざらんことを勉めよ。

陸機が出でて吳王の郎中令となるに贈る　(一)潘正叔

(二)東南の美、曩に惟れ(三)延州。(四)顯允なる陸生、今に於て儔尠し。鱗を(五)南海に振ひ、翼を(六)清流に濯ぎ、(七)翰林に婆娑し、(八)墳丘に容與す。

【一】潘正叔。名は尼、字は正叔、晉に仕へて位太常卿に至る。
【二】東南。吳をいふ。陸機は吳の人。
【三】延州。延陵の季子、卽ち吳の季札なり。
【四】顯允。明信なり。陸生は陸機なり。
【五】南海。吳をいふ。

【大意】昔季札は吳の俊傑と稱せられしが、今日に於て陸生あり、亦絕倫の英才なり。嘗て吳主に仕へ、吳の滅ぶるや來りて晉に仕へ、儒林に交り古書を涉獵す。

玉は(九)瑜を以て潤ひ、(十)隋は光を以て融なり。乃ち上京に漸み、(十一)儲宮に羽儀す。爾の(十二)清藻を玩び、爾の芳風を味ひ、之を泳げば彌〻廣く、之を挹めば彌〻冲し。　其二

【大意】玉は瑜を以て潤ひ、珠は光を以て朗なるが如く、人は學を加ふるを以て美となす。陸生既に學を積んで美なり。乃ち洛陽に至り太子洗馬に任ぜられ、太子の儀表となる。太子その文章高風に倣ふ。然も其道德の源を酌めば、益〻深遠なるを覺ゆ。

(十三)崑山に何かある。(十四)瑤あり珉あり。爾と同僚にして、具に惟れ近臣なり。予は(十五)素秋を涉り、子は(十六)青春に登る。愧づらくは老成なくして、彼の日新に厠るを。　其三

【大意】省閣に君子多し。我と君と亦同僚にして太子の近臣たるも（正叔は太子舍人にして、陸機

【六】清流。晉をいふ。
【七】翰林。學者仲間。婆娑は遊ぶこと。
【八】墳丘。古書なり。左傳に三墳五典八索九丘ヲ讀ムとあり。容與は逍遙といふが如し。
【九】瑜。玉の中間の美なる者
【十】隋。隋侯の珠。
【十一】儲宮。太子なり。羽儀は儀表となること。
【十二】清藻。機の文章なり。
【十三】崑山。山の名、美玉を產す。省閣に喩ふ。
【十四】瑤。美玉なり。珉は美石なり。君子に喩ふ。
【十五】素秋。老年に喩ふ。
【十六】青春。少年に喩ふ。

は太子洗馬なり）我は老いて君は少し。我に老成人の德なくして、日新の德ある君と相伍するは、私に愧づる所なり。

(一七)祁祁たる大邦、惟れ(一八)桑惟れ梓。(一九)穆穆たる伊人、南國の(二〇)紀なり。帝曰く爾諧へよと。惟れ(二一)王の卿士たり。(二二)俯僂して命に從ふ。奚をか恤へ奚をか喜ばん。　其四

【大意】衆盛なる吳國は、實に陸生の鄕里にして、穆穆たる陸生は、吳國の綱紀なり。帝陸生に命じて吳王の郎中令となす。陸生乃ち身を屈して王命に從ふ。是を以て王の心中憂あることなけん。

(二三)我が車既に巾り、我が馬既に秣ふ。(二四)星陳夙駕し、載ち脂さし載ち轄さし、(二五)二宮を婉孌し、殿闥に徘徊す。(二六)醪澄みて饗するなし。孰か饑渴を慰めん。　其五

【大意】陸生乃ち車馬を整へて早朝に出發せんとす。因つて二宮を顧戀し殿閣に徘徊す。濁酒已に澄み、之を酌んで離杯を擧ぐるも陸生憂へて饗けず。何ぞ我が君（陸生）を慕ふの深情を慰するを得ん。

【一七】祁祁。衆多の貌。大邦は吳をいふ。
【一八】桑梓。鄕里なり。
【一九】穆穆。美なる貌。
【二〇】紀。綱紀なり。
【二一】王。吳王なり。
【二二】俯僂。身を屈して王命に從ふこと。
【二三】我。陸機を指す。
【二四】星陳夙駕。朝早く出發すること。
【二五】二宮。帝及び太子の宮。婉孌は顧み慕ふ貌。
【二六】醪。濁酒なり。

昔子(二七)私を忝うし、我に(二八)蕙蘭を貽る。今子(二九)東に徂く。何を以てか旃に贈らん。(三〇)寸晷惟れ寶なり。豈(三一)璵璠なからんや。彼の美なる陸生、與に(三二)晤言すべし。　其六

【大意】昔君我れに佳詩を贈らる。今君の吳に赴くに際し、我何を以て君に餞すべき、只規箴の言を贈らんとす。夫れ世に美玉なきにあらざれども、美玉は寶とするに足らず。ただ寸陰以て寶となすべし。あゝ陸生の美なる、いつか復た與に相語るを得べき。

(一)河陽に贈る

潘正叔

(三)慮生單父を化し、(三)子奇東阿に涖む。(四)桐鄕遺烈を建て、(五)武城絃歌を播く。(六)逸驥夷路に騰り、

【一】河陽。潘岳河陽令たり。岳は正叔の從父なり。故に其名を言はざるなり。
【二】慮生。慮子賤なり。よく單父を治めたり。
【三】子奇。人名。よく東阿を治めたり。
【四】桐鄕。地名。漢の朱邑、字は仲卿、桐鄕の嗇夫となり。遺業後世に傳ほる。遺烈は遺績なり。
【五】武城。地名、孔子の弟子子游、武城の宰となり、其教上下に及び、學問隆盛にして絃歌の聲絶えず。
【六】逸驥。駿馬なり。潘岳に喩ふ。夷路は坦途なり。

【二七】私。恩惠の意。
【二八】蕙蘭。香草の名。詩に喩ふ。
【二九】東。吳なり。
【三〇】寸晷。一寸の光陰。僅の時間。
【三一】璵璠。美玉なり。
【三二】晤言。對談なり。

潛龍(七)洪波に躍る。弱冠にして(八)鼎鉉に歩し、既に立つて(九)三河に宰たり。しく、(一〇)藻を摛ぶること春華より豔なり。徒に(一一)天姿の茂を美す。豈人爵の多きを謂はんや。

【大意】君（潘岳を指す）の地方官として大功績あるは、恰も、處生の單父を治め、子奇の東阿を治め、朱邑の桐鄉に遺績を傳へ、子游の武城に絃歌を敎へたるが如し。實に良馬を平路に縱にし、潛龍を大波に躍らしむるが如く、才能官途と相協へるものといふべきなり。君は弱冠にして賈充公の府掾となり、又出でて三河の令となり。其聲譽は秋蘭よりも芳しく、其文雅は春花よりも麗し。今予の君を稱美するは、天質の茂盛なるに在り。その人爵の如きは敢て論ぜざるなり。聲を流すこと秋蘭より馥

【七】洪波。大波なり。
【八】鼎鉉。鼎は三公の象なり鉉は鼎耳の環なり。岳二十にして賈充が府掾となる。
【九】三河。河東、河内、河陽なり。宰は長官なり。
【一〇】藻。文章なり。
【一一】天姿。天性なり。

(一)侍御史王元貺に贈る

潘正叔

(二)崑山瓊玉を積み、廣厦衆材を構ふ。(三)游鱗靈沼に萃り、翼を撫つて(四)天階を希ふ。膏蘭孰が爲にか消さん。治を濟すは賢能に由る。(五)王侯崇禮を厭ひ、迹を廻らして(六)憲臺を清うす。(七)蠖屈固に小往き、(八)龍翔迺ち大來る。心を協せて聖世を毗け、力を畢して(九)康哉を讃せよ。

【一】侍御史。官名。
【二】崑山。山の名、玉を產す。瓊玉は美玉なり。
【三】游鱗。龍なり、君子に喩ふ。靈沼は省閣に喩ふ。
【四】天階。省閣に喩ふ。
【五】王侯。王元貺をいふ。崇禮は門の名。王元貺前に尙書郎となり。朝奏皆此門に在り。
【六】憲臺。御史の署。
【七】蠖屈。シヤクトリムシの如く屈すること。
【八】龍翔。龍の如く天を翔ること。
【九】康哉。世の安らかに治ること。書經に咎繇乃チ歌ヒテ曰ク、元首明ナル哉、股肱良キ哉、庶事康キ哉とあり。

【大意】崑山は美玉を積み、大厦は衆材を構へて成るが如く、衆賢相聚りて國家を構成す。今や龍鳳の如き君子、皆仁義の道を以て天子の左右に集れり。夫れ膏蘭の物たるや、明を以て暗を燭し、香を以て臭を化し、自ら銷爍を致すも、敢て勞となさず。賢能の國家を治むるも亦此の如し。王公（元貺を指す）嘗て尙書郎となりて崇禮門に在りしが、今之を厭ひ迹を廻らして侍御史となれり。是れ蠖屈の小を出でて、龍翔の大に入れるものなり。宜しく衆賢と心を協せて聖世を輔け、康哉の化を讃頌すべきなり。

卷の第十三

詩　丁

贈答　二

何劭、王濟に贈る

(一)傅長虞

(二)朗陵公何敬祖は咸の(三)從内兄なり。(四)國子祭酒王武子は咸の(五)從姑の外孫なり。並に明德を以て世に重んぜられ、咸之に親み之を重んず。情は猶ほ(六)同生のごとく、義は則ち師友なり。何公既に(七)侍中に登り、武子俄にして(八)亦作る。二賢相得て甚だ歡び、咸も亦之を慶ぶ。然れども自ら(九)闇劣なるを恨み、其(一〇)繾綣を願ふと雖も、之に從ふこと由末し。(一一)歷試效なく、且つ(一二)家艱あり、(一三)心存し目替

【一】傅長虞。傅咸、字は長虞、晉の北地泥陽の人なり。孝廉に擧げられ太子洗馬に拜せられ、後司隸校尉となる。

【二】朗陵公。何劭、字は敬祖、朗陵公に襲封せらる。

【三】從内兄。妻の從兄。

【四】國子祭酒。官名。王濟、字は武子。

【五】從姑。父の從父姉妹をいふ。

【六】同生。兄弟なり。

【七】侍中。官名なり。

【八】亦作る。王濟も亦侍中となる。

【九】闇劣。暗愚なり。

【一〇】繾綣。敬慕の情深きこと。

【一一】歷試。諸官に歷仕せること。

【一二】家艱。父母の喪。

【一三】心存し。心には常に何王

る。詩を賦し懷を申べ、以て之に貽ると云爾。

日月(一四)太清を光し、(一五)列宿紫微を曜す。(一六)赫赫たる大晉の朝、明明として(一七)皇闈を闢く。(一八)吾兄既に鳳のごとく翔り、王子亦龍のごとく飛ぶ。(一九)雙鸞蘭渚に游び、(二〇)二離清暉を揚ぐ。手を攜へて玉階に升り、坐を竝べて(二一)丹帷に侍す。(二二)金璫惠文に綴り、(二三)煌煌として令姿を發す。斯榮庶ふ攸に(二四)高蹤を企まざらんや。(二五)麟趾邈として追ひ難し。川に臨むも(二六)芳餌なし。何爲れぞ(二七)空坻を守らん。(二八)槁葉風を待ちて飄り、逝いて將に君と違れんとす。君に違れて能く戀ふなからんや、(二九)尸素當に言に歸るべし。身を(三〇)蓬蓽の廬に歸し、道を樂んで以て飢を忘れん。進んでは則ち云に補ふなく、退いては則ち其私を恤ふ。但願くは弘美を隆にし、(三一)王

を思へども目に見るを得ずとの意。

【一四】太清。天なり。

【一五】列宿。二十八宿なり。紫微は天帝の宮。

【一六】赫赫。盛なる貌。

【一七】皇闈。宮門なり。

【一八】吾兄。何劭を指す。

【一九】雙鸞。二匹の鳳凰、王何に喩ふ。蘭渚は中書省に喩ふ。

【二〇】二離。二匹の長離、長離は鸞鳥なり。王何に喩ふ。

【二一】丹帷。赤きトバリ、天子の宮殿をいふ。

【二二】金璫。耳珠なり。侍中は冠に金璫を附く。惠文は冠の名。

【二三】煌煌。輝く貌。令姿は美姿なり。

【二四】高蹤。高軌といふが如し。

【二五】麟趾。麒麟の足。邈は遠き貌。

【二六】芳餌。善德に喩ふ。

【二七】空坻。空岸なり。

【二八】槁葉。枯葉なり。作者自ら喩ふ。

【二九】尸素。官吏として無能なること。

【三〇】蓬蓽の廬。草屋なり。

【三一】王度。天子の法度。清夷は清平なり。

度日に清夷ならんことを。

【大意】　日月天に輝き、列星紫宮を曜すが如く、赫赫たる晉朝に於ては宮門を開いて賢士を待つ。是に於て何公先づ侍中に任ぜられ、王公亦之に次ぐ。二賢相竝んで天子に侍するは、恰も鸞鳳の蘭渚に遊び、羽を振ひて光輝を揚ぐるが如し。二賢手を攜へて殿陛に侍し、冠に金璫を附けて美姿を輝かせり。かかる榮貴は固より予輩の冀ふ所にあらざれども、親密の情誼を結ばんことは常に希ふ所なり。ただ其位高くして追攀する能はざるを恨むのみ。然れども餌なくして空岸を守るは、魚を得るの道にあらず。身に善德なくして徒に高貴の人を慕ふも詮なきなり。われ今枯葉の風に飜るが如く、將に二君と相離れんとす。（傅咸時に出でて冀州刺史となり、將に赴任せんとす）よく眷戀の情なからんや。然れども身暗愚にして吏才なければ、當に職を退いて茅屋に歸り、先王の道を樂んで飢を忘るべきなり。進んでは闕を補ふなく、退いては其私を憂ふるを悲む。二君よろしく其德を弘美にし、王度をして益〻清平ならしめんことを勉むべし。

傅咸に答ふ

郭泰機

(一)皎皎たる白素の絲、織りて(二)寒女の衣となす。寒女妙巧なりと雖も、(三)杼

【一】皎皎。潔白なる貌。白素は白色なり。白素絲は美才に喩ふ。
【二】寒女。貧賤なる女。賤士

機を秉るを得ず。天寒くして(四)運の速なるを知る。況んや復た鴈の南に飛ぶをや。(五)衣工刀尺を秉り、我を棄てて忽ち遺るるが若し。(六)人諸を身に取らずんば、世事焉んぞ希ふ所あらん。況んや復た已に朝餐しぬ。曷に由りてか我が飢を知らん。

【大意】　傅咸の己を薦めざるを諷するなり。通篇皆比喩より成る。故に其直言を嫌はざるなり。我れ卑賤なれども美材あり。美材あれども世に用ひらるる能はず。徒に日を送らば老將に至らんとす。是れ我が仕進に急なる所以なり。然るに君は少しも我を推薦することなし。君の如き同情心なき者には、何事を望むも亦そのかひなし。況んや君は既に高官に登りたれば、他人の卑賤をば敢て意に介せざるをや。

(一)顧彥先が爲に婦に贈る二首

陸士龍

(二)悠悠として君行邁く。(三)煢煢として妾獨り止まる。山河安んぞ踰ゆべき、永路萬里を隔つ。京室に(四)妖冶多く、(五)粲粲たる都人子あり。(六)雅

に喩ふ。
【三】杼機。杼はヒ、機はハタ。
【四】運。時の運行。
【五】衣工。傅咸に喩ふ。刀尺はハサミとモノサシ。
【六】人諸云云。己の心を以て人の心を度らざればとの意。

【一】顧彥先。卷第十二に見ゆ。
【二】悠悠。遙なる貌。
【三】煢煢。孤獨の貌。
【四】妖冶。美女なり。
【五】粲粲。衣服の鮮明なる貌。都人子は都會の婦女。
【六】雅步。なまめきたる步みかた。纖腰は細腰なり。

歩して纖腰を擢で、巧笑して(七)皓齒を發す。佳麗良に美すべし。(八)衰賤焉んぞ紀するに足らん。遠く眷顧の言を蒙れるも、恩を銜んで始を望むにあらず。

【大意】　土龍の集に『顧彥先が爲に婦に贈る二首』、『婦の爲に答ふ二首』ありといふ。此は婦に代りて答ふる詩なり。婦に贈る詩にあらず、題誤れり。君(顧彥先を指す)は遠く洛陽に客となり、妾は孤影蕭然として此(妻は吳に在り)に止まる。山河千里の遠地なれば、行きて相見ん術もなし。京師には美女多く、美服をまとひ、細腰を振り、好笑して媚を呈するならん。容色も早や衰へたる妾の如きは、復た言ふに足らざるなり。されば遠く眷顧の言(詩を寄せたるをいふ)を賜りたるも、だ其恩を忝しと思ふのみにて、始めの如き愛情を垂れ給へとは言はず。

(九)海に浮んでは水をなし難く、(一〇)林に游んでは觀をなし難し。容色は時に及ぶを貴び、(一一)朝華は日の晏くるを忌む。(一二)皎皎たる彼の姝子、(一三)灼灼たる春を懷ふ桑、(一四)西城雅舞を善くし、(一五)摠章清彈に饒なり。(一六)鳴簧丹脣を發し、(一七)朱絃素腕を繞る。輕裾猶ほ電の揮ふがごとく、雙袂霧の

【七】皓齒。白き齒。
【八】衰賤。妻自ら謂ふ。紀は錄なり。

【九】海。京師に喩ふ。
【一〇】林。京師に喩ふ。
【一一】朝華。木槿なり。
【一二】皎皎。明淨の貌。姝子は都の美女。
【一三】灼灼。盛なる貌。桑は美女なり。
【一四】西城。洛陽の西北角に在り、妓女の居る處。
【一五】摠章。古の女樂なり。清

散ずるが如し。(一八)華容藻幄に溢れ、哀響(一九)雲漢に入る。(二〇)知音は世に希なる所、君にあらずんば誰か能く讚せん。(二一)北辰の星を棄て置き、此の(二二)玄龍の煥たるを問ふ。(二三)時暮れて復た何をか言はん。華落つれば理必ず賤し。

【大意】　君は京師に在りて見る所既に廣ければ、鄙野の陋婦の如きは復た觀るに足らざるべきも、木槿の日の晏くるを畏るると同じく、美女も年歷れば色衰ふるものにて、妾も昔は今に勝りしなり。京師には西城摠章の歌妓あり、丹脣素腕輕裾雙袂、運轉の微妙迅速なること電霧の如く、帳に溢れ雲に入ると聞く。君もと歌舞に通ず。定めて其妙を讚歎しつつあらん。此の定まれる妻を措きて、美艷の色を求むるは、誠に怨むべきなり。然れども容色衰へて賤まるるは亦理の常なれば、今更怨むを要せざるなり。

(一)兄機に答ふ

陸士龍

悠遠なるも塗極むべし。別促にして(二)會の長きを怨む。思を銜んで(三)行

【一八】華容。美しき容姿。藻幄は美しき帳。
【一九】雲漢。雲なり。
【二〇】知音。よく音樂の妙を聞きわくる人。
【二一】北辰。北極星なり。この星は移動することなし。故に定まれる妻に喩ふ。
【二二】玄龍。美女に喩ふ。煥は輝くこと。
【二三】時暮。老いたるをいふ。

【一】兄機。卷第十二の弟士龍に贈ると題する詩を參照すべし。
【二】會。再會の時。

邁を戀ひ、言を興して　㊃臨觴に在り。南津に　㊄絶濟あり、北渚に　㊅河梁なし。神往いて逝感を同うし、形留りて　㊆參商を悲む。㊇衡軌若し迹を殊にせば、㊈牽牛も　㊉箱に服くにあらず。

【大意】君が行程遠しと雖も、いつかは行き盡すことを得べきも、今や別離の期既に促りて、再會の期すべからざるは、誠に怨むべし。情を抱いて君の行を慕ひ、離杯を擧ぐるに臨みて此言を發せざるを得ず。われ南に歸るに渡津の以て渡るべきあるも、君の北行には橋の渡るべきなし。道途の苦辛思ひやるべし。されば心は君に隨つて共に逝き、身は留りて參と商と相見ざるが如し。夫れ兄弟の相依るは、當に衡軌の如くなるべし。然も若し迹を殊にすれば、たとひ牛ありと雖も、復た車に駕するを得ざるなり。（兄弟の名あるも同く聚會するを得ざるに喩ふ。）

【三】行邁。行き去ること。
【四】臨觴。離杯を擧ぐること。
【五】絶濟。わたしば。絶は水を渡ること。
【六】河梁。橋なり。
【七】參商。二星の名。この二星出沒して相見ることなし。
【八】衡軌。車のクビキ。
【九】牽牛。星の名。ここには牛の意に用ふ。
【一〇】箱。車なり。

一張士然に答ふ

陸士龍

行き邁きて長川を越え、㊁飄颻して風塵に之に答ふ。

【一】張士然。吳平ぎて後洛陽に入り、詩を雲に贈る。雲故に喩ふ。
【二】飄颻。飄ること。行旅に

を冒す。通波　㊂枉渚に激し、悲風　㊃丘榛に薄る。㊄脩路窮迹なく、㊅井邑自ら相循ふ。㊆百城各〻俗を異にし、㊇千室良鄰にあらず。舊を歡んで　㊈假合し難く、風土豈虛しく親まんや。㊉桑梓の域に感念し、㊊眼中の人を髣髴す。㊋靡靡として日夜遠く、㊌眷眷として苦辛を懷く。

【大意】君は風塵を冒して遠く洛陽に往くに曲浦を涉り悲風を聞き、長途行けども窮らず、幾たびか城邑を過ぎ、然も各地風俗を異にすれば、親善すべき鄰となし難く、故鄉の舊友のみ慕はしくして、妄に親交を結び難く、ただ故鄉の山川、親友をのみ思ひつづけつつ、顧みがちに日夜進み行くならん。

【三】枉渚。曲渚なり。
【四】丘榛。叢木を榛といふ。
【五】脩路。長途なり。
【六】井邑。城邑といふが如し。
【七】百城。郡をいふ。
【八】千室。千戶なり。邑なり。
【九】假合。かりに親交すること。
【一〇】桑梓。鄉里なり、吳をいふ。
【一一】眼中の人。親友をいふ。
【一二】靡靡。行く貌。
【一三】眷眷。顧み慕ふ貌。

二盧諶に答ふ

劉越石

㊁捐て、辛酸の苦言を備へ、㊃經通の遠旨を暢ぶ。執玩反覆し、手を釋く能

【一】盧諶。字は子諒、劉琨盧志と親善なり、故に志の子諶を辟して主簿となし、後從事中郎となす。段匹磾の幽州を領するや、諶求めて其別駕となる。
【二】劉越石。名は琨、字は越石、中山の人、永嘉の初、并州刺史たり。建興二年、大將軍を加へられ、并州に都督た

はず。慨然として以て悲み、歡然として以て喜ぶ。昔在少壯のとき未だ嘗て㉓檢括せず。遠く老莊の㉔齊物を慕ひ、近く㉕阮生の放曠を嘉し、厚薄何に從りてか生じ、哀樂何に由りてか至るを怪む。自頃㉖輔張して逆亂に困む。國破れ家亡びて親友㉗彫殘す。㉘塊然として獨坐すれば則ち哀憤兩ながら集り、杖を負ひて行吟すれば、則ち百憂俱に至る。時に復た相與に觴を擧げ膝を對し、涕を破りて笑となし、終身の㉙積慘を排し、數刻の暫歡を求む。譬へば由ほ㉚疾疢年を彌りて㉛一丸之を銷さんと欲するがごとし。其れ得べけんや。夫れ才は世に生じ、世實に才を須つ。和氏の璧は焉んぞ獨り㉜郢握に曜くを得ん。夜光の珠は何ぞ專ら㉝隨掌に玩ばるるを得ん。天下の寶は固に當に天下と之を共にすべし。但㉞分析の日、悵恨せざる能はざるのみ。然る後㉟聃周の虛誕たり、嗣宗の㊱妄作たるを知るなり。昔㊲驥驥

【一】積慘。積憂なり。
【二】疾疢。熱病なり。
【三】一丸。一個の丸藥。
【四】郢握。郢は楚の都、楚王の掌中なり。此れ諶のただ琨の處に留るべきにあらざるに喩ふ。
【五】隨掌。隨侯の手なり。
【六】分析。離別なり。
【七】聃周。老子、名は聃、莊子名は周。虛誕は虛欺なり。
【八】妄作。虛欺の行。
【九】驥驥。駿馬なり。戰國策に昔驥驥鹽車ニ駕シテ吳阪ヲ

り。三年司空に進む。
【三】捐。賜はるといふがごとし。
【四】經通。古今一貫して變らざる意。
【五】檢括。行を慎むこと。
【六】齊物。莊子に齊物論あり、萬物を視て以て一となす。
【七】阮生。阮籍、字は嗣宗、放誕にして禮敬に拘らず。放曠は放縱なり。
【八】輔張。驚懼の貌。逆亂とは劉聰の亂を指す。
【九】彫殘。傷害せらるること。
【一〇】塊然。獨居の貌。

の轅に吳阪に倚り㊴良樂に鳴けるは、㊵知と不知となり。㊶百里奚の虞に愚にして秦に智なりしは、㊷遇と不遇となり。㊸今君之に遇へり之を昜めんのみ。復た意を文に屬せざると二十餘年、久しく廢して則ち㊹次なし。想ふに必ず其の一たび㊺反さんとを欲するならん。故に㊻指に稱へて一篇を送る。適〻以て㊼來詩の益〻美なるを彰すに足らんのみ。琨頓首頓首。厄運初めて遘ひ、㊽陽爻六に在り。㊾乾象棟のごとく傾き、㊿坤儀舟のごとく覆る。(一)橫厲糾紛し、(二)羣妖競ひ逐ふ。火(三)神州を燎き、(四)洪華域に流る。彼の黍(五)離離たり、彼の稷(六)育育たり。我が皇晉を哀み、痛心目に在り。其一

【大意】晉帝の隆運極りて窮厄の災あり、

上ル、遷延シ轅ヲ負ヒテ進ム能ハズ、伯樂ニ遭ヒ仰イデ之ニ鳴ク、伯樂ガ已ヲ知ルヲ知レバナリとあり。
【一〇】良樂。王良及び伯樂。共に馬を知るを以て名あり。
【一一】知。琨諶を知る能はず、匹磾之を知るをいふ。
【一二】百里奚。人名。もと虞に仕へて虞亡び、秦に仕へて秦霸たり。漢書に僕聞ク百里奚虞ニ居テ虞亡ビ、秦ニ之キテ秦霸タリト、虞ニ愚ニシテ秦ニ智ナリシニアラズ、用ト不用トナリとあり。
【一三】遇。明君に遇ふこと。不遇は明君に遇はざること。
【一四】今君。諶の匹磾に用ひられしことをいふ。
【一五】次。次序、次第なり。
【一六】反。返書すること。
【一七】指に云云。指は旨なり。返書を望まるる貴意に從つてとの意。
【一八】來詩。諶の琨に贈りし詩を指す。
【一九】陽爻云云。爻とは易の卦を成す六つの畫段の稱。陽爻六に在りとは乾の卦の下より數へて第六爻、卽ち上九をいふ。其辭に「亢龍悔あり」とあり。龍ものぼりつめては災厄あるをいふ。晉の災に遇ふをいふなり。
【二〇】乾象。天なり。
【二一】坤儀。地なり。
【二二】橫厲。狂暴なり。糾紛は亂るる貌。
【二三】羣妖。劉聰等をいふ。
【二四】神州。帝都なり。
【二五】洪。洪水なり。華域は帝都なり。

天地崩亂して棟の傾くが如く、舟の覆るが如く、羣賊競つて相奔逐すること洪水燎火の如し。(劉聰僭號して平陽に卽位し、從弟曜を遣し晉を攻めて洛陽を破り、子粲を遣はし長安を攻めて之を陷れしむ)皇都化して田畝となり、黍稷繁茂するに至り、人をして心を痛めしむ。

天地心なし。萬物塗を同うす。(三八)淫に禍することなく、善に福することなく、則ち虛し。(三九)逆は邑を全うするあり、(四〇)義は都を完うするなし。(四一)英藥夏落ち、(四二)毒卉冬敷く。彼の(四三)龜玉の、韞櫝して諸を毀れるが如し。(四四)芻狗の談、其れ最も得たるか。其二

【大意】天地は萬物を愛育するの心なく、是非善惡を分たず、視て以て一途となす。今羣賊惡を爲して福を受け、晉室善を爲して禍を受く。是れ應報驗なしといふべきなり。逆賊は榮え義主は衰へ、恰も美花の夏(夏は花落つるの時にあらず)落ち、毒草の冬(冬は花咲く時にあらず)花咲くが如し。龜玉の櫝中に破れしが如く、晉室今や敗れて復た救ふ者なし。老子の『天地は不仁

【三六】離離。穗の垂るる貌。
【三七】育育。生長する貌。
【三八】淫。過罪なり。
【三九】逆。劉聰をいふ。
【四〇】義。晉室をいふ。
【四一】英藥。美花なり。晉室に喩ふ。
【四二】毒卉。毒草なり。亂賊に喩ふ。敷は花咲くこと。
【四三】龜玉。龜甲と玉、皆國寶なり。韞櫝は箱に藏めて置くこと。
【四四】芻狗。草にて作りし犬。祭祀に之を用ふ。祭終れば之を棄つ。

なり。萬物を以て芻狗となす』(晉盛なれば人之を貴び、衰ふるに及んで人之を棄つるに喩ふ)との言は、實に其理を得たり。

咨余軟弱にして(四五)負荷に克へず。(四六)愆釁仍に彰れしに、榮寵屢加はる。威の建たざる、禍延き凶播く。忠國に隕ち、孝家に愆つ。斯罪の積れること、彼の山河の如く。斯釁の深きこと、終に能く磨するなし。其三

【大意】われ幷州都督たりしも、軟弱にして興復の任に勝へず。國恩に負くの罪淺からざるに、却つて屢寵榮を蒙り、威力建たずして劉聰の爲に敗られ、父母害に遇ひ、我亦禍に遭ひて播遷す。國に對しては不忠の臣となり、家に對しては不孝の子となる。此罪積んで山河の高深なるが如し。能く消磨すべきにあらず。

(四七)郁穆たる舊姻、(四八)嬿婉たる新婚。其敗を慮らず、唯義を是れ敦うす。糧を裹み弱を攜へ、(四九)匍匐して星のごとく奔る。未だ爾の駕を輟めざるに、已に我が門を隳る。(五〇)二族偕に覆りて、(五一)三孽根を竝ぶ。長く(五二)舊孤に慙ぢ、

【四五】負荷。國の大事を引受くること。
【四六】愆釁。罪過なり。
【四七】郁穆。和美の貌。舊姻は古き姻戚、現が妻は諶が從母なり。
【四八】嬿婉。和美の貌。新婚とは諶が妹、現が弟に嫁せるをいふ。
【四九】匍匐。手を地に著けてはふこと。
【五〇】二族。現と諶との族。
【五一】三孽。三人の子孫の意。諶と現と現が兄の子とをい

(五三)永く寃魂に負く。其四

【大意】我が家と汝の家とは、舊姻新婚の親戚なりしかば、汝は吾が敗北すべきを知らず、ただ親戚の義を賴み、糧を持ち老幼を攜へて我に來り投ず。汝未だ車を下らざるに、我が家已に賊に破られ、劉盧の二族俱に害に遭ひ、僅に三遺孤を存するのみ。(現が父母は令狐泥の害する所となり、諶が父母は劉粲の害する所となる。)今當に三遺孤を扶けて父母の仇を報ずべし。然も其術なきを悲む。

(五四)亭亭たる孤幹、獨生して伴なく、綠葉(五五)繁縟にして、(五六)柔條脩罕なり。朝には爾の實を捋り、夕には爾の竿を捋る。竿翠(五七)尋に豐ち、(五八)逸珠椀に盈つ。寔に我が憂を消し、憂急なるも用て緩し。逝いて將に去らんとす。庭虛しくして情滿つ。其五

【大意】汝は孤生の竹の葉繁り枝長きが如し。(美材あるに喩ふ)われ朝には汝の實(竹實は食ふべし)を採り、夕には汝の竿を採るに、竿翠にして長さ尋に滿ち、其實美にして椀に滿つ。(己の諶に親んで大に益を得たるに喩ふ)此に因つて我が憂を消すを得たり。今汝

(五三)舊孤。三孽をいふ。

(五五)繁縟。繁くして文彩あること。

(五六)柔條。わかき枝。脩罕は枝長くして節稀れなること。

(五七)尋。八尺なり。兩節の間長さ八尺ありとなり。

(五八)逸珠。すぐれたる實。德に喩ふ。

(五三)寃魂。罪なくして死せる亡靈、上の二族を指す。

(五四)亭亭。高き貌。孤幹は孤生の竹、以て諶に喩ふ。

(五五)繁縟。繁くして文彩あること。

(五六)柔條。わかき枝。脩罕は枝長くして節稀れなること。

(五七)尋。八尺なり。兩節の間長さ八尺ありとなり。

(五八)逸珠。すぐれたる實。德に喩ふ。

將に我を棄てて去らんとす。(段匹磾の所に往くなり。)わが憤怨の情心に滿つ。虛滿伊れ何ぞ。蘭桂移し植ゑん。彼の(五九)春林を茂くし、此の(六〇)秋棘を瘁す。(六一)鳥あり翻飛して、休息するに遑あらず。(六二)桐にあらざれば棲まず、竹にあらざれば食はず。永く(六三)東羽を戢め、翰びて(六四)西翼を撫ぐ。我の之を敬する、歡を廢し職を輟む。其六

【大意】庭虛しく情滿つれば如何にすべき、ただ蘭桂(君子に喩ふ)を移し植うべきのみ。汝の我を去りて匹磾に歸するは、惜みても餘あれども、鳳凰は桐にあらざれば棲まず竹實にあらざれば食はざる鳥なれば(諶の賢主を擇ぶに喩ふ)永く此に休息すべきにあらず。今汝の此地を去りて西のかた幽州に赴かんとするに臨み、汝を敬慕し殆ど歡と職とを廢せんばかりなり。音は賞せらるるを以て奏し、味は殊なるを以て珍とせらる。文は以て言を明にし、言は以て神を暢ぶ。之子の往く、(六五)四美臻らず。(六六)澄醪觴を覆ひ、(六七)絲竹塵を生じ、(六八)素卷啓くなく、(六九)幄に談賓なし。既に我が德を孤にし、又我が鄰を闕く。其七

【大意】盧諶の既に去りし後、獨居無聊の情

(五九)春林。匹磾に喩ふ。

(六〇)秋棘。棘はイバラ、惡木なり、琨自ら喩ふ。

(六一)鳥。鳳凰なり、以て諶に喩ふ。鳳凰は桐に棲み竹實を食ふといふ。

(六二)桐、竹。賢明の主に喩ふ。

(六三)東羽。諶の并州を去るに喩ふ。

(六四)西翼。諶の幽州に赴くをいふ。時に匹磾幽州刺史たり。

(六五)四美。音味文言なり。

(六六)澄醪。澄みたる濁酒。

(六七)絲竹。管絃なり。

況を述ぶ。音樂は賞識者あるに因りて奏せられ、滋味は新異なるを以て珍重せられ、文章は以て言語を明にし、言語は以て精神を述ぶるなり。汝既に去りて我に此の四美なし。故に杯を掩ひて復た飲まず、(味を受く。)管絃は塵に埋まり(樂を受く。)書卷は繙かず(文を受く。)帳中に談論の客なし。(言を受く。)此の如くにして我れ竟に孤獨となりぬ。

(七)光光たる段生、(七)幽を出でて喬に遷り、忠に資り信を履み、武烈しく文昭かなり。旌弓(七)騂騂として、輿馬(七)翹翹たり。乃ち(七)長麓を奮ひ、是に轡し是に(七)鑣す。何を以て子に贈らん。心を公朝に竭せ。何を以て懷を叙べん。領を引いて長く謠はん。其八

【大意】段生は微賤より出でて高貴に登り、忠信文武の德を兼ぬ。今儀衞を盛にし厚祿を以て汝を辟す。汝よろしく往くべし。往きて善く段生に事へ、以て時艱を救ふべし。われ汝の往くを望み、長歌して別を惜まん。

【六八】素卷。飾なき書卷。
【六九】幄。帳なり。談賓は話相手。
【七〇】光光。德の輝く貌。段生は段匹磾。
【七一】幽。幽谷なり、微賤に喩ふ。喬は喬木なり、高き木、高貴に喻ふ。
【七二】騂騂。調利なり。
【七三】翹翹。衆き貌。
【七四】長麓。長き柰。厚祿に喻ふ。
【七五】鑣。くつわ。

重ねて盧諶に贈る　劉越石

(一)握中懸璧あり、本自ら(二)荆山の璆なり。彼の太公望を惟ふに、昔在(三)渭濱の叟なり。(四)鄧生何ぞ感激して、千里來りて相求むる。(五)白登曲逆を幸とし、(六)鴻門留侯に賴る。(七)重耳五賢に任じ、(八)小白射鉤を相とす。苟も能く(九)二伯を隆にせば、安んぞ黨と讎とを問はん。中夜枕を撫して歎じ、數子と游ばんことを想ふ。吾が衰へたること久しいかな、何ぞ其れ(一〇)周を夢みざる。誰か云ふ聖は節に達す、(一一)命を知りて故より憂へずと(一二)宣尼獲麟を悲み、西狩(一三)孔丘を涕かしむ。功業未だ建つに及ばず、夕陽忽ち西に流る。時か我と與ならず、去りて雲の浮

【一】握中。掌中なり。懸璧は一本に玄璧に作る。黑き玉なり。盧諶に喩ふ。
【二】荆山。山の名。
【三】渭濱。渭水のほとり。太公望渭濱に釣す。文王の獵するに遇ひて其臣となり、遂に大功を建つ。
【四】鄧生。鄧禹なり。鄧禹は南陽の人なり、光武皇帝の河北を安集するや、南陽より河を渡り、追ひて鄴に至りて拜謁す。
【五】白登。地名、匈奴漢の高祖を白登に圍む、高祖曲逆侯陳平の計を用ひて免るるを得たり。
【六】鴻門。地名、漢の高祖と楚の項羽と此地に會す。項羽高祖を殺さんとす。留侯張良の謀を以て免るるを得たり。
【七】重耳。晉の文公の名。晉に内亂ありて文公狄に奔る。其臣五人皆賢なり。よく文公を輔佐す。五賢とは狐偃、趙衰、顚頡、魏武子、司空季子なり。
【八】小白。齊の桓公の名　管仲嘗て小白を射て帶鉤に中つ。小白齊に君たるに及び、怨を措きて管仲を相とす。
【九】二伯。二人の霸者、齊の桓公、晉の文公なり。
【一〇】周を夢む。論語に「甚しいかな吾が衰へたるや、久しいかな吾復た夢に周公を見ず」とあり。
【一一】命。天命なり。
【一二】宣尼。孔子なり。獲麟とは魯の哀公十四年、西に狩して麟を獲たること。孔子麟の出づること時ならざるを悲み

べるが若し。(一四)朱實勁風に隕ち、(一五)繁英素秋に落つ。狹路(一六)華蓋を傾け、(一七)駭駟雙轅を摧く。何ぞ意はん百鍊の剛、化して指を繞るの柔とならんとは。

【大意】前詩の意未だ盡きざるに因り、故に復た此詩を贈れるなり。わが掌中に美玉あり。(盧諶が才質の偉なるをいふ。)古代にも亦此に比すべき人傑あり。太公望、鄧禹、陳平、張良、晉の五賢齊の管仲の如き皆然り。夫れ人傑たる者は宜しく大に爲すあるべきなり。文公を輔け、光武を佐け、白登の圍を脱せしめ、鴻門の厄を免れしめたるが如き以て見るべし。苟も己を輔くる者は、其の黨與たると仇敵たるとは復た論ぜざるなり。予中夜枕を撫ちて嘆息し、以上の諸子と同じく偉業を建て、晉室を興復せんとを望むも、徒に衰老の嘆を發するのみ。人或は云ふ聖人は天命を知る、故に憂なしと。是れ大に然らず。孔子も西に狩して麟を獲たるを見て、涙を流せるにあらずや。われの悲嘆する固より怪むに足らず。況んや興復の業未だ成らずして、老將に至らんとするをや。今や疾風秋霜の亂世にして志士皆傾倒す。狹路の車蓋を破り、驚駟の轅を摧くが如し。われ嘗て百鍊の剛鐵を以て自ら許したるに、今や賊の破る所となり、意氣柔弱なるに至りぬ。汝早く功を建て亦

て泣けりといふ。

【一三】孔丘。孔子、名は丘。

【一四】朱實。赤き果實。勁風は强風。

【一五】繁英。繁き花。秋の色は白し、故に素秋といふ。

【一六】華蓋。車蓋なり。

【一七】駭駟。驚く馬。轅は車の轅。

沮喪することなかれ。

(二)劉琨に贈る竝書　盧子諒

(三)故吏從事中郎盧諶、死罪死罪。諶性を稟くること短弱、世に當りて(三)任罕なり。其の自然に因りて用て靜退に安んず。木に在りては(四)不材の資を闕き、鴈に處りては(五)善鳴の分に乏し。卷くこと(六)蘧子に異り、愚なること(七)甯生に殊なり。(八)匠者時に眄み、(九)饌賓を免れず。嘗て自ら思惟するに、(一〇)運會に因緣し、(一一)接事を蒙るを得たり。(一二)清塵に奉ぜしより、今に(一三)五稔なり。(一四)謨明の效著はれず、(一五)候人の譏已に彰る。(一六)大雅含弘にして山藪を量苞す。加以待接彌〻優に、(一七)款眷逾〻昵し。(一八)運籌の謀

【一】劉琨。前詩を見よ。

【二】故吏。もとの部下の官吏。從事中郎は官名。

【三】任。用なり。

【四】不材。役に立たざる木。莊子に「此木は不材を以て其天年を終るを得たり」とあり。

【五】善鳴。よく鳴くこと。莊子に「鳴く能はざる者を殺す」とあり。

【六】蘧子。蘧伯玉なり。論語に「蘧伯玉は邦に道あれば則ち仕へ、邦に道なければ則ち卷いて之を懷にすべし」とあり。

【七】甯生。論語に「甯武子は邦に道あれば則ち智なり、邦に道なければ則ち愚なり」とあり。

【八】匠者　大工なり。木に在りて不材を闕く、故に匠者時に之を顧みて用ひんとするなり。段匹磾の眷顧を受くるに喩ふ。

【九】饌賓。客に供すること。鴈善鳴に乏しきを以て殺して客に供せらるるなり。喩意前に同じ。

【一〇】運會。好運といふが如し。

【一一】接事。從事中郎となりて事へしこと。

【一二】清塵。足下に事へてといふこと。

【一三】五稔。五年なり。

【一四】謨明。謀の賢明なること。

【一五】候人。戈を執りて道路を護る人〻毛詩の序に「候人は小人を近づくることを刺るなり」とあり。

【一六】大雅。君子なり。劉琨を

に與り、(一九)讒私の歡に厠り、(二〇)綢繆の旨、骨肉に同じきあり。其の知己たる古人も喩ふるなし。昔(二一)聶政は嚴遂の願に殉し、(二二)荆軻は燕丹の義を慕ひ、意氣の間、軀を糜かすも悔いず。節に達すると微しと雖も、之を庶ふべしと謂へり。然も苟も情ありといふ、孰か能く(二三)懷はざらん。故に身を委するの日、(二四)夷險之を已にし、事願と違ひ、(二五)外役を忝うするに當り、遂に左右を去り、迹を府朝に收む。蓋し本同じくして末異るは(二六)楊朱哀を興し、始め素くして終玄ければ(二七)墨翟涕を垂る。(二八)分乖の際咸歎慨すべし。感を致すの途或は茲より迫なり。亦奚ぞ必ずしも路に臨んで後(二九)長號し、絲を覩て後(三〇)獻欷せんや。是を以て仰いで(三一)先情を惟ひ、俯して(三二)今遇を覽、存に感じ亡を念ひ、物に觸れて眷を增す。易に曰く書は言を盡さず、言は意を盡さずと。然らば則ち書は言を盡すの器にあらず、言は意を盡すの具にあらず。況んや言も意を盡すに至

【一七】款眷。誠意を以て愛顧すること。
【一八】運籌。謀をめぐらすこと。
【一九】讒私。私宴なり。
【二〇】綢繆。相親むこと。
【二一】聶政。嚴遂の依賴を受け韓相俠累を殺し、己も亦自殺す。顧は恩顧なり。
【二二】荆軻。燕の太子丹の依賴を受け、秦王を刺さんとして果さず。
【二三】懷。報恩を思ふこと。
【二四】夷險。治亂なり。
【二五】外役。段匹磾に事へて別駕となりしをいふ。
【二六】楊朱。人名。楊朱は岐路を見て歎ず、本同じくして末異ればなり。
【二七】墨翟。人名。墨翟白き絲を見て泣く、其の黑くすべく、黃にすべきを以てなり。
【二八】分乖。分離なり。
【二九】長號。泣くこと。
【三〇】獻欷。悲嘆なり。
【三一】先情。諶が亡父の情をいふ。
【三二】今遇。琨に遇へるをいふ。

るを得ざるあり、書も言を盡すに至るを得ざるあるをや。(三三)猥瀒に勝へず、謹で詩一篇を貢す。抑も以て(三四)弘美を揄揚するに足らず、亦以て其の抱く所を攄ぶるのみ。若し公大惠を肆べ其厚恩を遂げ、錫ふに(三五)咳唾の音を以てし、其の違離の意を慰めば、則ち所謂(三六)咸池もて北里に酬い、(三七)夜光もて魚目に報ゆるなり。諶の願なり、敢て望む所にあらざるなり。諶死罪死罪。

(三八)濬哲なる惟れ皇、紹いで(三九)有晉を熙し、厥の(四〇)弛維を振ひ、光に(四一)遠韻を闡く。來るあるは斯れ(四二)雍、至り止るは伊れ順なり。(四三)三台朗を擒べ、(四四)四岳峻を增す。其一

【大意】盧諶既に段匹磾の處に在り、琨が前恩を憶ひ此詩を贈る。懷帝深智の德あり、能く晉統を繼ぎ、已に廢れたる綱紀を振ひ、先帝の遺德を輝かし、來り至る者皆和順にして之に從ふ。是に於て君臣よく和し、諸侯其人を得たり。(劉琨の幷州刺史たるをいふ。)

(四五)伊陟商を佐け、(四六)山甫周を翼け、艱難を(四七)弘濟し、(四八)王休を對揚す。苟に德を異にするにあら

【三三】猥瀒。煩怨なり。
【三四】弘美。劉琨の寬弘なる德。揄揚は贊稱すること。
【三五】咳唾の音。琨の返詩をいふ。
【三六】咸池。堯の音樂。北里は紂の音樂。
【三七】夜光。珠の名。魚目は魚の眼球なり。
【三八】濬哲。深智なり。皇は晉の懷帝を指す。
【三九】有晉。晉なり、有は意義なし。
【四〇】弛維。廢れたる綱紀。
【四一】遠韻。德音なり。
【四二】雍。和なり。
【四三】三台。星の名、其色齊明なれば君臣和す。
【四四】四岳。諸侯なり。峻は高なり。
【四五】伊陟。殷の賢臣なり。商

す、世を(四九)曠うして流を同うす。其忠貞を加へ、(五〇)其徽猷を宣ぶ。其二

【大意】昔伊陟は殷を佐け、仲山甫は周を翼け、よく國家の大難を匡救し、王の美命を對揚せしが、今足下（現を指す）の功德また伊陟山甫と異らず。遠く世を隔つと雖も、全く其風を一にす。乃ち忠貞の節を致し、善謀を宣揚す。

伊れ諶の(五一)陋宗、昔(五二)嘉惠に遘ひ、申ぬるに(五三)婚姻を以てし、著すに(五四)累世を以てす。義は(五五)休戚を等うし、好は興廢を同うす。孰か云ふ諧ふにあらずと。樂の(五六)契の如し。其三

【大意】吾が家嘗て足下の恩惠を蒙り、且つ婚姻を結ぶこと父子二世に及ぶ。故に兩家の關係は喜憂興廢皆之を同うす。誰か相和せずといふや、其の相和すること樂聲の和合するが如し。王室(五七)師を喪ひ、(五八)私門播遷す。公を望んで之に歸し、險を視て艱を忽にせんとす。茲願遂げず、(五九)中路に阻顚す。仰いで(六〇)先意を悲み、俯して(六一)身愆を思ふ。其四

【大意】王師劉聰の爲に敗られ、吾が家爲に離散するや、われ足下を望んで之に歸し、以て險難を緩うせんことを希ひしに、目的を達する能はずして、父母皆劉粲（聰の子）の爲に殺害せらる。我れ乃ち仰いでは父母の怨恨を悲み、俯しては身の過を思ふ。

(六二)大鈞運を載ひ、(六三)良辰遂に往く。彼の日月を瞻るに、迅きこと俯仰に過ぐ。今を感じ昔を惟ひ、口に存し心に想ふ。借ひ昨の如しといふも、忽ち(六四)疇曩となる。其五

【大意】造化運行し良時忽ち去る。日月の迅きこと俯仰よりも甚し。現時を感じ足下の處に在りし昔時を思ひて、心口を離れず。足下の處に居りしは眞に昨日の如きも既に五年の昔となりぬ。疇曩伊れ何ぞ、逝く者は彌〻疎なり。(六五)溫溫たる恭人、終を愼むこと初の如し。彼の(六六)遺音を覽るに、此の(六七)窮孤を恤ふ。彼の(六八)樛木の、蔓葛以て敷くに譬ふ。其六

【大意】既往の事を思ふも、去る者の日日に疎きは人情の常なり。ただ足下は寬弘の君子なれば、

【四七】弘濟。救ふこと。
【四八】王休。休は美なり、王の美命。對揚は天意に答へ揚ぐること。
【四九】曠。遠なり。
【五〇】徽猷。美道なり。
【五一】陋宗。卑陋の姓。
【五二】嘉惠。恩惠なり。
【五三】婚姻。前詩に見ゆ。
【五四】累世。父子二代なり。
【五五】休戚。喜憂なり。
【五六】契。和合なり。
【五七】師を喪ふ。劉聰の爲に敗られしをいふ。

【大意】王師劉聰の爲に敗られ、吾が家爲に離散するや、われ足下を望んで之に歸し、以て險難を緩うせんことを希ひしに、目的を達する能はずして、父母皆劉粲（聰の子）の爲に殺害せらる。我れ乃ち仰いでは父母の怨恨を悲み、俯しては身の過を思ふ。

【五八】私門。諶の家なり。播遷は離散なり。
【五九】中路。中途なり。阻顚とは諶の父母劉粲の爲に害されしをいふ。
【六〇】先意。父母害に遭ひて死せし意恨。
【六一】身愆。わが身の過失。
【六二】大鈞。造化なり。運ぼ運行。
【六三】良辰。良時なり。
【六四】疇曩。昔遠なり。
【六五】溫溫。寬柔の貌。恭人は現をいふ。
【六六】遺音。現が先に諶に贈りし詩をいふ。
【六七】窮孤。諶自ら謂ふ。
【六八】樛木。枝の下り曲れる木。詩經に「南に樛木あり、葛藟之に纍ふ」とあり。

終始その眷顧を變ずるなく、遙に詩を寄せて我を憂へ我を勵す。我之を恃むこと恰も曲木ありて蔓草之に縈ふが如し。

妙なるかな蔓葛、樛木に託するを得たるも、葉雲のごとく布かず、華星のごとく燭らず。(六九)承くると卞和に倂く、質(七〇)荆璞にあらず。眷(七一)尤良に同じく、用(七二)驥騄より乏し。其七

【大意】奇なるかな蔓葛樛木に著くことを得たるも、性疎薄にして枝葉繁らず、隨つて光明を發せず。恩を蒙ること卞和の玉に等きも、其質楚山の璞にあらざるを以て、美玉と成らず。眷顧を受くること王良に同じきも才能は其駿馬に劣れり。(琨の恩遇を受けたるも、功を建つる能はざるに喩ふ。)

【六九】承。受なり。琨の恩を蒙るをいふ。卞和は璞玉を楚の山中に得、之を王に獻ぜし人。因つて玉の名とす。

【七〇】荆璞。卞和の楚の山中より得たる璞玉。璞は音ボク。

【七一】尤良。左傳に「晉の趙鞅、衛太子を戚に納れ將に戰はんとす、郵無恤簡子に御たり」杜預の註に「郵無恤は王良なり」とあり。

【七二】驥騄。駿馬なり。

【七三】駑猥。鈍馬なり。己に喩ふ。

【七四】駿珍。駿馬なり、賢良に喩ふ。

【七五】弼諧。輔和なり。

【七六】良謨。よき謀略。

【七七】狐趙。狐偃・趙衰なり。晉の文公内亂を避けて狄に奔るや、其臣五人あり、よく文公を輔佐す。狐偃、趙衰、顚頡、魏武子、司空季子是れなり。

承くること亦既に篤く、眷亦既に親し。(七三)駑猥を飾奬し、駕を(七四)駿珍に方べ、(七五)弼諧成るなく、(七六)良謨陳ぶるなし。(七七)狐趙を覬むなく、五臣に與るあり。其八

【大意】恩顧を蒙ること親厚にして駑鈍を以て叨に賢良の士に伍し、輔和の道成らず、奇謀の陳ぶべきなく、趙狐の大功を建つるを望む能はざるに、然も五臣の列に加はれり。五臣奚にか與る。(七八)百罹に契闊す。身は險阻を經、足は(七九)幽遐を蹈む。義は恩に由りて深く、(八〇)分は昵に隨つて加はる。(八一)綢繆して心を委ね、自ら(八二)匪他に同じ。其九

【大意】かの五臣は何事にか與れる。主君に從つて百憂に遇へり(諶と琨と俱に危難に遇へるに同じ)。險阻艱難備に之を嘗め、節義は恩親によりて益〻深し。因つて心を委ねて相親むこと兄弟に異らず。

昔在暇日、通理を妙尋し。彼の意氣を尤め、是の節士を狹しとす。情は體を以て生じ、感は情を以て起る。(八三)趣舍要を同うし、窮達斯に已む。其十

【七八】百罹。百憂なり。契闊は勤苦すること。

【七九】幽遐。遐は遠、危難なり。

【八〇】分。猶ほ節といふが如し。昵は親密なり。

【八一】綢繆。相親むこと。

【八二】匪他。兄弟なり。詩經に「豈伊れ異人ならんや、兄弟にして他に匪ず」とあり。

【八三】趣舍。進止なり。

【大意】昔閑暇の日、道義を尋ねて、意氣を以て身命を隕すは、皆正道にあらざるを知る。故に節士を狹しとして、之に傚はんことを欲せず。彼の節士の如きは身に由りて情を生じ、情に由りて感激を發せるのみ。進止の理は畢竟相同じ、窮達は自然に任すべきのみ。

(八四)由余の片言、秦人是れ憚る。(八五)日磾忠を效し、(八六)聲を有漢に飛ばす。(八七)桓桓たる撫軍、古賢に冠たり。來りて(八八)幽都に牧たり、厥の(八九)途炭を濟ふ。其十一

【大意】由余穆公の宮室壯大なるを言ふや、穆公之を難りて以て德を修め、金日磾は忠孝の名を漢代に馳す。わが撫軍將軍段匹磾亦此等衆賢の上に出で、この幽州に牧となり、民の苦艱を救ふ。塗炭既に濟ひ、寇挫け民阜なり。其(九〇)疲隸を謬り、之に(九一)朝右を授く。上は任の大なるに懼れ、下は施の厚きを欣ぶ。實に(九二)高明を祇み、敢て守る所を忘れんや。其十二

【大意】匹磾已に民の苦を救ひ、寇賊去りて庶民殷富なり。乃ち誤りて我を擧げて別駕(官名)となす。我乃ち上は任の大なるを懼れ、下は恩の厚きに感じ、名譽を失墜せざらんことを謹み、敢て其職守を忘れず。

彼の(九三)反哺を相るに、尙ほ翔禽に在り、孰か是れ人にして、(九四)斯の心に忍びんや。每に山海に憑り、(九五)高深を覿んことを庶ひ、遐に存亡を眺、緬に飛沈を成す。其十三

【大意】彼の烏を視るに尙ほ反哺の孝あり。人にして父母の讐を忍ぶを得んや。又每に山海に依りて足下(琨を指す)を見んことを庶ひ、遙に存亡を視て、喜憂を成しつつあり。(九六)長徽已に纓り、逝いて將に徙り擧らんとす。迹を(九七)西踐に收め、哀を(九八)東顧に銜む。曷ぞ途遼なりと云はん、曾て(九九)咫歩だもあらず。豈(一〇〇)夙夜せざらんや、行に露多きを謂ふ。其十四

【大意】われ既に匹磾の辟す所となり、身に別駕の任を帶ぶるも、將に西幽州を去りて、東幷州に徙らんことを思ふ。其道決して遠きにあらず、而も敢て往かざるものは、匹磾の我に二心あるを疑はんことを懼るればなり。

(一〇一)緜緜たる女蘿、(一〇二)松標に施ひ、澤を(一〇三)洪幹に稟け、陽に(一〇四)豐條を晞かせども、根淺くして固うし難く、莖弱くして彫み易し。彼の(一〇五)纖質を操り、此の(一〇六)衝飈を承く。其十五

【八四】由余。人名なり、秦の穆公の時の人、穆公其謀を用ひて地を拓くこと千里、遂に西戎に霸たり。片言は一言なり。

【八五】日磾。漢の金日磾なり。ここは匹磾に喩ふ。

【八六】聲。名聲なり。有漢は漢室なり。

【八七】桓桓。武勇の貌。撫軍は匹磾をいふ。撫軍將軍幽州の牧たり。

【八八】幽都。幽州をいふ。牧は長官なり。

【八九】途炭。塗炭に同じ、水火の難なり。

【九〇】疲隸。賤民なり。謎自ら謂ふ。

【九一】朝右。右は上なり。匹磾の謎を擧げて別駕となしことを言ふ。

【九二】高明。身の譽をいふ。

【九三】反哺。哺は口中にある食物をいふ。子が親に養はれし恩を、長じて後に報ゆるをいふ。烏に反哺の孝あり。

【九四】斯心。父母の讐に報いんとの心。

【九五】高深。琨をいふ。

【九六】長徽。長き索。

【九七】西踐。幽州は西に在り。

【九八】東顧。幷州は東に在り。

【九九】咫歩。咫は八寸なり。

【一〇〇】夙夜。朝晩行くこと。

【一〇一】緜緜。長き貌。女蘿は蔓草の名。謎自ら喩ふ。

【一〇二】松標。松の梢。琨に喩ふ。

【一〇三】洪幹。大なる幹。

【一〇四】豐條。太き枝。

【一〇五】纖質。微弱の身。

【一〇六】衝飈。疾風なり。匹磾の辟召に喩ふ。

【大意】　我れ足下の庇護を受けしこと、恰も女蘿の松梢に附けるが如し。常に恩澤に浴せりと雖も、質微弱にして自ら本根を固うする能はず。況んや匹磾の召辟に遭へるをや。

纖質寔に微にして、衝飈に斯れ値ふ。誰か謂ふ言精しと、致は意を賞するに在り。魚を得るを見ずして、亦厥餌を忘る。其形骸を遺て、之を(一〇七)深識に寄す。其十六

【大意】　身微弱なるを以て忽ち匹磾の辟に誘はる。今敢て之を辯解せず。請ふ足下の我が意を諒せられんことを。(莊子に「言論を以てすべき者は物の粗なる者なり。意致を以てすべき者は物の精なる者なり」とあり。)我が行は既に理に當らず、亦自ら辯解する能はず。因つて我が形骸を遺て、足下の深識判斷を請ふ。

(一〇八)先民意を頤ひ、山に潛み(一〇九)几に隱り、仰いで丹崖に熙し、俯して綠水に澡ぎ、和を求むるなく、自ら衆美に附く。(一一〇)退蹤に慷慨し、(一一一)高旨に愧づるあり。其十七

【大意】　古人の意を養ふや、或は山に隱れ或は几に憑り、仰いでは丹崖に燥かし、俯しては綠水に漱ぎ、人に和することを求めずして、人自ら其美に附和す。われ此に倣はんことを欲すれども能はず。故に古人の高旨に愧づるあり。

【一〇七】深識。現の意をいふ。
【一〇八】先民。古人なり。
【一〇九】几。坐する時よりかかる具。莊子に「南郭子綦几に隱りて坐し、嗒焉として其耦を喪へるに似たり」とあり。
【一一〇】退蹤。古人の高遠なる行。
【一一一】高旨。古人の高尚なる旨意。

愛に異論を造せば、(一一二)肝膽も楚越なり。惟れ大觀を同うすれば、(一一三)萬塗も一轍なり。死生既に齊し、榮辱奚ぞ別たん。其(一一四)玄根に處て、廓焉として結ぶなし。其十八

【大意】　世に足下を匹磾に讒する者あり。故に匹磾と足下との間阻遠となれるも(異論とは讒に喩ふ。莊子に「其異る者よりして之を視れば、肝膽も楚越なり」とあり)足下は常に大觀を抱くを以て萬物を以て一となす(鶡冠子に「達人は大觀す」とあり、文子に「聖人は萬異を以て一同となす」とあり)既に死生を以て一となす。何ぞ榮辱を別たんや。よく大道を體得して心怨結するなし。

福は禍の始たり、禍は福の階たり。天地は盈虛し、寒暑は周廻す。(一一五)夫差の祀られざるは、釁齊に勝つに在り。(一一六)句踐の伯たるは、祚會稽より霸業を成せるは、會稽山に敗れたるに由る。(禍化して福となる。)

【大意】　福は禍の本にして、禍は福の本なり。天地は盈虛し寒暑は往來す。物皆然り。夫差の滅びたるは其兆齊と戰ひて勝ちしに在り。(福化して禍となる)句踐の

【一一二】肝膽。内臟の名。相近きに喩ふ。楚越は二國の名。相遠きに喩ふ。
【一一三】萬塗。萬途なり。
【一一四】玄根。道なり。廓焉は心の空虛なること。
【一一五】夫差。吳王の名。齊を艾陵に伐ちて之に勝ち、驕りて越王句踐の爲に滅さる。祀られずとは滅亡するをいふ。
【一一六】句踐。越王句踐なり。夫差と戰ひて敗れ會稽山に棲む。後之を滅す。伯は霸なり。

(二七)邈たるかな達度、唯道に是れ杖る。形未だ泰からざるあるも、神暢びざるなし。川の流るるが如く、淵の量きが如し。上は(二八)棟隆を弘め、下は民望に塞たん。其二十

【大意】足下は高遠の度量を有し、ただ道に據りて行ふ。故に身は屈する所あるも、神智は則ち通ぜざるなく、川の流るるが如く、淵の深きが如し。上は晉室を興復して棟梁の臣となり、下は萬民の望に滿たん。

【二七】邈。遠き貌。達度は弘大なる度量。琨をいふ。
【二八】棟隆。高き棟。

(二)崔溫に贈る

盧子諒

逍遙して城隅に歩し、暇日聊か(二)游豫す。北のかた沙漠の垂を眺、南のかた(三)舊京の路を望む。(四)平陸長流を引き、(五)岡巒茂樹を挺んで、中原(六)迅飈を厲し、(七)山阿雲霧を起す。(八)游子恆に悲懷し、目を擧げて永慕を增す。(九)良儔偕にするを獲ず、情を舒べて將た焉にか訴へん。遠く(一〇)賢士の風を念ひ、遂に往古の務を存す。(一一)朔鄙俠氣多し豈唯地の固しとする所なるのみならんや。(一二)李牧邊城を鎮じ、(一三)荒夷南懼を懷ふ。(一四)趙奢疆埸を正し、秦人北慮を折く、(一五)羇旅して寛政に及び、(一六)負を委ねて時と遇ふ。恨むらくは(一七)駑蹇の姿を以て、(一八)非子の御を煩すを。亦既に負擔を弛て、位を忝うして何の暇ありてか民譽を收めん。(一九)倪寛殿たるを以て黜けられ、終に乃ち(二〇)衆賦に最たり。(二一)何武赫赫たらざるも、遺愛常に去るに在り。(二二)古人は希ふ所にあらず。短弱自ら(二三)素あり。何を以てか斯辭を敷く。惟れ(二四)二子の故を以てなり。

【大意】暇日に當りて城角を遊歩し、北のかた沙漠を眺め、南のかた洛陽を望めば、長川平地を流

【一】崔溫。崔悅、字は道儒、溫嶠、字は太貞。
【二】游豫。遊樂なり。
【三】舊京。洛陽なり。賊軍に燒破せらる。故に舊京といふ。
【四】平陸。平地なり。
【五】岡巒。山なり。
【六】迅飈。疾風なり。
【七】山阿。山の隈なり。
【八】游子。客遊の人、盧子諒時に幽州に宦遊せり。
【九】良儔。良友なり。崔溫を指す。
【一〇】賢士。古の良將をいふ。
【一一】朔鄙。北方の邊地。幽州

ないふ。
【一二】李牧。趙の北邊の良將なり。匈奴慴れて敢て邊城に近づかず。
【一三】荒夷。匈奴なり。
【一四】趙奢。趙の將なり。疆埸は趙の邊界。
【一五】羇旅。客遊なり。寛政は寛容の政。
【一六】負。身なり。
【一七】駑蹇。鈍馬なり。
【一八】非子。古の善御者の名。匹磾に喩ふ。
【一九】黔庶。人民なり。
【二〇】罪戾。罪過なり。
【二一】倪寛。漢人なり。左内史に遷るや、民の僞に假貸す。故を以て租多く入らず。後軍發するあり。左内史租課を負へるを以て殿たり。免ぜらるるに當り民皆之を失はんことを恐れ、負擔して租を輸す。課更に以て最上なり。殿は最下なり。
【二二】衆賦。租課なり。最は最上なり。
【二三】何武。字は君公、楚の内史となり仁厚なり、官に居て赫赫の名なきも、去つて後常に遺愛あり。
【二四】古人。倪寛何武を指す。
【二五】素。素より仁厚の性あるをいふ。
【二六】二子。崔溫をいふ。

れ、茂樹高山に聳え、中原に疾風あり、山曲に雲霧起る。われ他郷に宦遊して常に悲を抱く。足下の如き良友あるも、之と與に遊樂する能はず。ただ永慕を增すのみにして、衷情誰にか吐露せん。此の地は古名將の遺跡を存し、ただ游俠の風あるのみならず、地勢も亦堅固なり。彼の李牧の邊城を守るや、匈奴懼れて南侵せず、趙奢の邊界を守るや、秦人北來の意を絶てるが如き、以て見るべし。われ今官遊して寛容の政（段匹磾の別駕たるをいふ）を蒙り、身を委ねて之に事ふるも、駑馬の非子の御を煩すが如く、功績の觀るべきものなく、負擔の役を免れ、庶民を治むるの任を辱うす。ただ身の罪戾を免れんとするに急にして、未だ民譽を收むるに暇あらず。昔倪寛は民租の入らざるを以て黜けられしも、後終に租入の最たるを得、何武は赫赫たる盛名なかりしも、去つて後人民之を愛慕せりといふ。われ固より此の二人に如かずと雖も、仁厚の性なきにあらず、窃に之に倣はんと期せり。足下はよく我が情を知る、故に此辭を發するなり。

(一)魏子悌に答ふ

(二)崇臺は一幹にあらず、珍裘は(三)一腋にあらず。多士大業を成し、羣賢(四)弘績を濟す。(五)時來の

盧子諒

【一】魏子悌。劉琨の從事たり、子諒と官を同うす。
【二】崇臺。高臺なり。
【三】一腋。一狐の腋の皮。

會を蒙るに遇ひ、聊か(六)朝彦の跡を齊うす。此の腹背の羽を顧み、彼の(七)排虛の翮に愧づ。身を寄せて(八)四岳に蔭れ、好を託して(九)三益に憑る。(一〇)傾蓋終朝なりと雖も、(一一)大分は疇昔に邁ぐ。危に在りては毎に險を同うし、安に處ては(一二)易を異にせず。俱に(一三)晉昌の艱を涉り、共に(一四)飛狐の厄を更、恩は(一五)契闊に由りて生じ、義は(一六)周旋に隨つて積る。豈に(一七)鄉曲の譽を謂はんや、謬りて(一八)本州の役に充てらる。(一九)乖離我をして感せしめ、悲欣情をして惕れしむ。理は精神を以て通ず。形骸の隔れるを曰はず。妙詩篤好を申べ、清義(二〇)幽賾を貫く。恨むらくは(二一)隨侯の珠の、以て(二二)荆文の璧に酬ゆるなきを。

【一】魏子悌。劉琨の從事たり、子諒と官を同うす。
【二】易。平安なり。音エキ、叶韻。
【三】晉昌。郡名、石勒の攻むる所となる。
【四】飛狐。塞の名。嘗て賊の得る所となる。劉琨、子諒子悌と往きて之を伐ち、賊の敗る所となりて安次に奔る。
【五】契闊。勤苦すること。
【六】周旋。追逐なり。
【七】鄉曲。鄉里なり。
【八】本州。幽州を指す。子諒は涿郡の人、涿郡は幽州に屬す。段匹磾の辟に應じ幽州別駕となりしことを言ふ。
【九】乖離。別離なり。
【一〇】幽賾。深遠なる道理。
【一一】隨侯の珠。珠の名。妙詩に喩ふ。
【一二】荆文の璧。楚人卞和璞玉を得て王に獻ず。楚の文王之を理めしめ寶を得たり、命じ

【大意】高臺は一木の枝の成す所にあらず、狐白裘は一狐腋の成す所にあらず、國を治むるも亦然り、衆賢相賴りて始めて大業を成すを得るなり。劉琨に事へしも、毎に身の不能を顧みて、足下の英俊なるに愧づ。既に身を寄せて劉氏に事へ、亦足下と好を結び、脩交短日月なりしも、情誼は古人に過ぎ、常に安危を共にし、晉昌飛狐の間に艱苦し、恩義益〻深かりき。われ固より鄉里の譽を求めざれども、誤りて本州の別駕に任ぜられ、足下と相別るるに至り、今の別離を悲み、昔の同聚を欣び、感慨殊に切なりき。然れども精神相通ずれば、身の遠隔は敢て悲む所にあらず。今足下妙詩を寄せ、深理を述べらる。ただ我れ不才にして好詩を以て酬ゆる能はざるを恨むのみ。

て和氏の璧といふ。子悌の詩に喩ふ。

靈運に答ふ

謝宣遠

夕霽風氣涼しく、閑房(一)餘清あり。軒を開いて(二)華燭を滅せば、月露(三)皓として已に盈つ。(四)獨夜物役なく、寢ぬれば亦云に寧し。忽ち(五)愁霖の唱を獲、勞を懷ひて(六)所誠を奏す。彼の行旅の艱を歎き、茲の(七)眷言の情を深うす。伊れ余慰寡しと雖も、(八)殷憂聾く爲に輕し。(九)牽率して嘉藻に酬い、長揖して(一〇)吾生に愧づ。

【一】餘清。殘りの涼しさ。
【二】華燭。飾れる燈火。
【三】皓。白き貌。
【四】獨夜。客なき夜。
【五】愁霖の唱。謝靈運が宣遠に寄せたる詩をいふ。

【大意】積雨夕に霽れ、室に餘涼あり。窓を開き燈を消して坐すれば、月色露光室内に滿ち、身既に無事なるを以て、起臥ともに安し。忽ち足下の愁霖の詩を得たり。詩中に雨中行役の苦を歎き、我を眷戀するの深情を述ぶ。余が情慰安少しと雖も、足下の詩を得て暫く深憂を輕くするを得たり。今足下の好意に牽かれて答詩を作れりと雖も、詩の妙足下に及ばざるを愧づ。

【六】所誠。懇誠の情。
【七】眷言。眷戀なり。
【八】殷憂。殷も亦憂なり。
【九】牽率。來詩に牽かれてとの意。嘉藻は妙詩なり、靈運の詩を指す。
【一〇】吾生。靈運を指す。

安城に於て靈運に答ふ

謝宣遠

條繁くして林彌〻(一)蔚たり。波清くして源、逾〻(二)濬し。(三)華宗吾が秀を誕し、(四)之子前胤を紹ぐ。(五)綢繆して風徽を結び、(六)烟熅して芳訊を吐く。(七)鴻漸事に隨つて變じ、(八)靈臺年と與に峻むこと。

【一】安城。宣遠・安城の守たり。
【二】蔚。盛に茂ること。
【三】華宗。貴族をいふ。謝氏を指す。秀は美なり。誕は生。
【四】之子。靈運を指す。
【五】綢繆。情緒の纏綿すること。風徽は美詩なり。
【六】烟熅。氣の蒸升する貌。

し。其一

【大意】　枝繁くして林益〻茂り、波清くして源益〻深きが如く、吾が謝氏足下の如き俊秀の士を生み、祖先の遺業を繼がしむ。情思結んで妙詩となり、仕進の途漸く進み、其德年と共に高し。

(九)華蕚相光飾し、(一〇)嚶鳴同響を悅ぶ。親を親んで子余を敦くし、賢を賢として吾れ爾を賞す。景を比ぶれば鮮輝後れ、年を方ぶれば一日長ず。萎葉は(一一)榮條を愛し、涸流は河廣を好す。其二

【大意】　我と足下とは兄弟の義あるを以て、互に相推重し、また詩章を以て唱和するを樂む。足下は親親の道を以て我に厚くし、我は尊賢の道を以て足下を尊ぶ。其德を比ぶれば、我れ足下に及ばざるも、年齡を比ぶれば、我れ足下より長せり。萎葉は榮枝を愛し、涸流は廣川を好むが如く、我れ卑德なるを以て足下の高德を愛す。

業を殉みて(一二)成操を謝し、禮に復して貧樂に愧づ。幸に(一三)代耕を果すに會ひ、江南の曲に(一四)符守す。運を履んで(一五)荏苒を傷み、塗に遵つて(一六)緬邈を歎く。懷を布いて欽する所を(一七)存す。我が勞一に何ぞ篤き。其三

【大意】　われ事業を營みて素志を遂ぐる能はず、又克己復禮し貧に居り道を樂む能はず。幸に祿仕を得て江南に太守たるも、每に歲月の過ぎ易く、歸路の遠隔なるを歎く。今感慨を述べて敬慕する所の足下に寄す。足下宜しく我が相思の勞を想見すべきなり。

肇は允に規を同うすと雖も、翻飛各〻槩を異にす。(一八)封畿の外に迢遞し、(一九)承明の內に窈窕たり。塗を尋ぬれば塗既に睽き、理に卽けば理已に對す。(二〇)絲路恆悲あり、矧んや迺ち吾が愛に在るをや。

其四

【大意】　我れ初め足下と規模を同うせるも、陞進飛躍に至りては亦及ばず。我は遠く安城に在りて太守となり、足下は深く殿中にありて祕書監たり。仕途を尋ぬれば、內外職を異にせるも、理を考ふれば賢者は內に在り、不賢者は外に在りて、理よく當れり。昔楊墨の二子絲路を見て悲めりといふ。況んや我と足下と相愛して然も離居するをや。豈悲嘆せざるを得んや。

芳訊は芳言なり。美詩なり。

【七】鴻漸。漸は進なり。易經に「鴻陸に漸む」とあり。仕進に喩ふ。

【八】靈臺。德に喩ふ。

【九】華蕚。兄弟なり。宣遠は靈運の從兄なり。

【一〇】嚶鳴。二鳥の和鳴すること。

【一一】榮條。榮ゆる枝。

【一二】成操。志を成就すること。謝は去なり。

【一三】代耕。禮記に「祿は以て耕に代ふるに足る」とあり。

【一四】符守。漢書に「初めて郡守の與に竹使符をつくる」とあり。符を剖きて安城に守たるをいふ。

【一五】荏苒。歲月の過ぎ易きこと。

【一六】緬邈。遙遠なり。

【一七】存。存問なり。

【一八】封畿。畿內なり。迢遞は遠き貌。

【一九】承明。殿の名。窈窕は幽深の貌。

【二〇】絲路。墨子は練絲を見て泣く。以て黃にすべく以て黑にすべきを以てなり。楊子は岐路を見て哭す。以て南すべく北すべきを以てなり。

(三)跬行して歩武を安んじ、翮を鍛いで(三)數仞を周る。豈高遠を識らざらんや、方に違ひ往きて(三)各あり。(四)歳寒くして霜雪嚴に、(五)過半にして路愈〻峻し。己を量りて友朋を畏れ、勇退して敢て進まず。行いて(六)令猷を勵めよ。誠を寫して(七)來訊に酬ゆ。其五

【大意】我れ足を擧げて行くも、一迹の内に安んじ、羽を傷へるを以て、飛躍するも數仞の上に過ぐるなし。高遠に登るを知らざるに非れども、既に道に違へるを以て進めば悔あり。年老いて世路の益〻難きを覺ゆ。吾が材の薄劣なるを以て友朋を畏れ、故に敢て進まず。足下宜しく益〻善道を勉むべし。聊か誠心を述べて來問に答ふ。

【一】跬行。一足を以て行くこと。歩武は足迹なり。
【二】數仞。仞は八尺なり。
【三】各。悔なり。
【四】歳寒。老年に喩ふ。
【五】過半。人生の半を過ぐること。
【六】令猷。善道なり。
【七】來訊。來問なり。

西陵にて風に遇ひ(一)康樂に獻ず

謝惠連

我が行(二)孟春を指し、春仲尚ほ未だ發せず。途に趣いて遠く期あり、離を念ひて情歇むなし。裝を成して(三)良辰を候ち、舟を漾べて(四)嘉月

【一】康樂。謝靈運なり。靈運は康樂侯に封ぜらる。
【二】孟春。初春なり。
【三】良辰。良き時。安靜にして風なき時。
【四】嘉月。春月なり。

を陶む。塗を瞻て意悽むこと少く、還顧して情闕くること多し。其一

【大意】われ初春に行途に上らんと擬し、然も仲春に至るも尚ほ出發せず、程既に遠く、離情亦禁じ難し。旅裝を成して好時を待ち、舟を泛べて春景を賞し、往路を見ては心を痛ましめ、故郷を顧みては情を傷ましむ。(五)哲兄仳別を感じ、相送りて(六)坰林を越ゆ。(七)野亭の館に飲餞し、袂を澄湖の陰に分つ。(八)悽悽たる留子の言、(九)眷眷たる浮客の心。廻塘(一〇)艫栧を隱し、遠望すれども形音を絶つ。其二

【大意】賢兄また別離を悲み、我を送りて野外に來り、驛路の館に離杯を擧げ、湖陰に袂を分ち、行く者留る者與に悲戀の語あり。回顧すれば、舟廻塘に隱れ、遠望すれども影響を見ず。

(一)跬行。一足を以て行くこと。歩武は足迹なり。
【二】孟春。初春なり。
【三】良辰。良き時。安靜にして風なき時。
【四】嘉月。春月なり。
【五】哲兄。賢兄なり。靈運を指す。仳別は離別なり。
【六】坰林。爾雅に「野外を林といひ、林外を坰といふ」とあり。
【七】野亭。野驛なり。
【八】悽悽。悲戀の貌。留子は後に留る人、靈運をいふ。
【九】眷眷。悲戀の貌。浮客は行客なり、惠連自ら言ふ。
【一〇】艫栧。船首の栧。
【一一】驛驛。行く貌。
【一二】戚戚。憂傷なり。
【一三】浦陽。江の名。
【一四】浙江。江の名。

(二)靡靡として長路に即き、(三)戚戚として遙悲を抱く。悲遙にして但自ら弭る。路長くして當に誰にか語るべき。行き行きて道轉た遠く、去り去りて情彌〻遲し。昨(一三)浦陽の汭を發し、今(一四)浙江の湄に宿る。其三

【大意】既に長途に就くも憂傷して遠悲を抱き、ただ自ら止るのみにして人の語るべきなし。道を

行くこと遠しと雖も、想戀の情遲遲として絶つ能はず。昨日浦陽江の汭を發して、今日始めて浙江の湄に達しぬ。

(一五)屯雲曾嶺を蔽ひ、驚風飛流を涌かしめ、(一六)零雨墳澤を潤し、落雪林丘に灑ぎ、浮氛崖巘に晦く、(一七)積素原疇を惑る。(一八)曲汜薄か停旅し、通川行舟を絶つ。其四

【大意】雲聚りて重嶺を蔽ひ、風急にして波浪を擧げ、雨雪山丘に灑ぎ、烟雲暗くして積雪道を埋め、江流窮りて舟皆停止して行かず。

(一九)津に臨めども濟るを得ず、楫を佇めて風波に阻てらる。(二〇)蕭條たる洲渚の際、氣色諧和すること少し。(二一)西瞻して游歎を興にし、(二二)東睇して悽歌を起す。積憤(二三)疢痾を成すも、(二四)萱なし將た如何せん。其五

【大意】渡津に臨めども風波に阻てられて濟るを得ず、徒に楫を止めて天候の定まるを待つ。洲渚の際を望めば、風雲錯起して景色の諧和するなし。西を眺めては、兄と遊びし昔を思ひて歎息を發し、東を望みては行路の遠きを見て獨り悲歌を吐く。

【一五】屯雲。聚れる雲。曾嶺は層嶺なり。
【一六】零雨。落つる雨。
【一七】積素。積雪なり。原疇は原野。
【一八】曲汜。水の分流する處。停旅は旅客の停止すること。
【一九】津。わたしば。
【二〇】蕭條。寂寂の貌。
【二一】西瞻。西方を見ること。
【二二】東睇。東方を見ること。悽歌は悲しき歌、卽ち此詩なり。
【二三】疢痾。熱病なり。
【二四】萱。わすれぐさ。此草を植うれば、よく人をして憂を忘れしむといふ。

(二)舊園に還りて作り、(三)顏范二中書に見す　謝靈運

滿を辭す豈(三)秩を多しとせんや、病を謝して年を待たず。偶〻(四)張邴と合ひ、久しく(五)東山に還らんと欲す。(六)聖靈昔廻眷し、(七)微尙宣ぶるに及ばず。何ぞ意はん(八)衝飈激し、烈火炎煙を縱にせんとは。玉を焚くこと(九)崐峯より發し、(一〇)餘燎遂に遷さる。(一一)沙に投じて理既に迫り、(一二)邛に如きて願亦愆る。長く(一三)歡愛と別れ、永く平生の緣を絶つ。舟を千仞の壑に浮べ、轡を萬尋の巔に摠る。流沫險とするに足らず、(一四)石林豈艱となさんや。(一五)閩中安んぞ處るべけん、日夜歸旋を念ふ。事は(一六)兩如の直に躓き、心は(一七)三避の賢に愜ふ。身を青雲の

【一】舊園。會稽始寧縣の園なり。
【二】顏范二中書。中書侍郎顏延之、范泰。
【三】秩。俸祿なり。
【四】張邴。張良及び邴漢、共に漢の人にて晚年官を辭して隱居せり。
【五】東山。會稽の始寧縣をいふ。
【六】聖靈。宋の高祖(武帝)。
【七】廻眷は己を眷顧すること。微尙。己の好尙する所、歸隱の志をいふ。
【八】衝飈。疾風なり。徐羨之等亂をなし廬陵王及び賢良を殺す、故に玉を焚く云云といふ。
【九】崐峯。書經に「火崐崗に炎れば玉石俱に焚かる」とあり。
【一〇】餘燎。餘炎なり。靈運時に廬陵王の司馬たり。初めて永嘉の守に遷さる。故に餘燎云云といふ。
【一一】沙。長沙なり。漢の賈誼長沙に謫せらる。
【一二】邛。蜀の臨邛なり　漢の司馬相如、卓文君と與に臨邛に往く。然も志の如くならず。
【一三】歡愛。顏范を指す。
【一四】石林。險山の名。
【一五】閩中。東越なり。永嘉郡の地方。
【一六】兩如。論語に「子曰く直なるかな史魚、邦に道あるも

上に託し、巖に栖んで飛泉を把む。(一八)盛明氛昏を盪し、(一九)貞休屯邅を康んず。(二〇)殊方咸な貸を成し、(二一)微物采甄に豫る。感深うして(二二)操固からず、質弱くして(二三)板纏し易し。曾ち是れ昔園に反り、(二四)往を語りて實に(二五)款然たり。(二六)曩基卽ち先づ築き、(二七)故池更に穿たず。果木(二八)舊行あり、(二九)壤石遠延なし。休憩の地にあらずと雖も、聊か永日の閑を取る。生を衞る自ら經あり、陰を息めて(三〇)牽く所を謝す。(三一)夫子情素を照にす。懷を探りて往篇を授く。

【大意】我れ盈滿を辭して俸祿を思はず。病を以て官を退き身の老ゆるを待たず。偶然張良邴漢二賢と其志を同うし、茲に始めて會稽の舊園に歸隱するを得たり。高祖皇帝嘗て我を眷顧し給へるにより、高臥の素志を果す能はず。乃ち出で

矢の如く、邦に道なきも矢の如し」とあり。事は兩つながら矢の如きの直に躓くといふ意。

【一七】三避。史記に「孫叔敖楚に相たり、三たび相を去りて悔いず、其の己が罪にあらざるを知ればなり」とあり。三避は三黜なり。

【一八】盛明。太祖（文帝）を指す。氛昏は徐羨之等をいふ。盪は掃なり。

【一九】貞休。正美の德、太祖を指す。屯邅は國難をいふ。

【二〇】殊方。異域といふが如し。貸は恩惠なり。

【二一】微物。己が身を謙していふ。采甄は採錄といふがごとし。

【二二】操。守操なり、前文の微尙をいふ。

【二三】板纏。牽引といふが如し。太祖の徵召に應じたるをいふ。

【二四】往。往時なり。

【二五】款然。よろこぶこと。

【二六】曩基。以前に築きし基礎。

【二七】故池。もと穿ちし池。

【二八】舊行。もとの行列。

【二九】壤石。土石なり。遠延は遠方より引き來ること。

【三〇】牽。俗務なり。

【三一】夫子。顏范を指す。情素は情實なり。

仕ふ。時に徐羨之等亂を構へ廬陵王以下の賢良を殺す。我亦遷されて永嘉太守となれり。恰も賈誼の長沙に謫せられて窮厄し、司馬相如の臨邛に往きて願の遂げられざりしが如し。かくて二君（顏范）と別れ舊來の因緣を絕ち、山川の危難を冒して任に赴く。その艱難たるや流沫、石林の比にあらず。且つ永嘉の地たるや、安居の處にあらず。故に日夜歸臥を思はざるはなし、我れ既に世の治亂に隨つて直道を變ぜざるを以て遷さる。遷さると雖も、己の罪にあらざるを以て敢て悔いず。高山に登り、飛泉を掬みて、山水の間に放にす。太祖皇帝盛明の德を以て徐羨之等を誅し、正美の道を以て國難を安んじ給ふや、四方遠國皆その恩惠を蒙り、我亦採錄せられて祕書監に任ぜらる。我れ恩に感ずること深くして、歸隱の操守固からず。資質弱きを以て牽引せられ易し。故に徵召に應じて官に就きぬ。今始めて歸隱の志を全うし、官を辭して舊園に歸り、往時を語りて欣び、舊居の基池また穿築を加へず、果樹舊の如く竝び、土石遠引を勞せず。この園は休憩の地にあらずと雖も、永日の閑を消するに足る。攝生息身以て俗務の拘牽を避けんと欲す。二君は能く我が眞情を知れり。故に己の誠心を吐露して此詩を寄す。

(二)臨海嶠に登り初めて(三)疆中を發して作

【一】臨海。郡の名。嶠は山頂なり。

る。從弟惠連に與ふ。(三)羊何に見して共に之に和すべからしむ　謝靈運

(四)杪秋遠山を尋ぬ。山遠くして行くに近からず。子と(五)山阿に別れ、酸を含んで(六)修畛に赴く。中流袂判に就き、去らんと欲して情忍びず。顧望して脰未だ悁れざるに、(七)汀曲舟已に隱る。汀に隱れて望舟を絶ち、棹を駑せて驚流を逐ふ。一生の歡を抑へて、千里の游に幷奔せんと欲す。日落ちて(八)棲薄に當り、纜を繫いで江樓に臨む。豈惟だ夕情の斂まるのみならんや、爾と共に(九)淹留せんことを憶ふ。昔時の歡に淹留して、復た今日の歎を增す。茲情已に慮を分つ。況んや乃ち(一〇)悲端に協へるをや。秋泉北澗に鳴り、哀猨南巒に響く。(一一)戚戚たる新別の心、(一二)悽悽として久念攢る。攢念別心を攻む。旦に(一三)青谿の陰を發し、暝に(一四)剡中に投じて宿し、明に(一五)天姥の岑に登る。高高として雲霓に入る、還期那ぞ尋ぬべき。長く子が(一六)徽音を絶たん。

【一】躑中。地名。
【二】羊何。羊は羊璿之、何は何長瑜。
【四】杪秋。晩秋なり。
【五】山阿。山隈なり。
【六】修畛。長徑なり。
【七】汀曲。汀は水岸なり。
【八】棲薄。簾なり。
【九】淹留。久しく留ること。
【一〇】悲端。秋をいふ。
【一一】戚戚。憂ふる貌。
【一二】悽悽。悲傷の貌。
【一三】青谿。溪の名。
【一四】剡中。剡は縣の名。
【一五】天姥。山の名。剡縣に在り。
【一六】浮丘公。古の仙人の名。徽音。よき音信。

【大意】晩秋に方りて遠山を尋ね登れば、道遠くして行けども盡きず。汝と山曲に分れ、悲を含み長徑を取りて進む。中流に袂を分つとき、我れ離情に忍びず、回顧して汝を見、頸未だ疲るるに及ばずして吾が舟既に汀曲に隱れて復た汝を望むべからず。乃ち驚流を破りて舟を進む。因つて一生の歡を止めて汝と共に千里の遊をなさんことを思ふ。落日簾帷を射るころ、江樓に臨んで纜を繫ぐ。夕情斂まれりと雖も、尚ほ汝と共に留滯せんことを思ふ。昔歡を追念して、更に悲嘆を增し、以て思慮を分つ。況んや悲秋の時に遇へるをや。澗泉の響、山猿の聲を聞きて、新別舊念交〻心に攢まり、攢念更に又別離の心を攻激す。旦に青谿を發して夕に剡縣に宿し、翌日天姥山に登る。高く雲を凌いで登り、歸期豫め期すべからず。山中若し仙人に遇はば永く汝と音信を絶つに至らん。

從弟惠連に酬ゆ　謝靈運

(一)人徒を謝し、(二)迹を滅して雲峯に入る。(三)巖壑耳目を寓せ、(三)歡愛音容を隔つ。永く賞心の望を絶ち、長く興に同うするなきを懷ふ。(四)末路令弟に値ひ、顏を開いて心胷を披く。其一

【一】人徒。衆人なり。
【二】巖壑。山水なり。
【三】歡愛。惠連を指す。音容は聲と姿。
【四】末路。晩年なり。令弟は惠連を指す。

【大意】我れ病に臥して交遊を絶ち、深く山峯の中に隠れ、心目を山水の間に放にし、汝と音容を隔つ。敢て我が心を識る者あるを望むなく、又共に事を同うする者なきを思へり。晩年汝に遇ひ、始めて我が心胸を開くを得たり。

心胷既に云に披けり、意得て咸く斯に在り。測を凌いで我が室を尋ね、(五)帙を散じて知る所を問ふ。夕に曉月の流るるを慮り、朝に(六)曛日の馳するを忌む。(七)悟對厭歇なきも、聚散分離を成す。其二

【大意】既に汝に遇ひて我が心胸を開き、始めて得意揚揚たるを得たり。汝來りて我が室を訪へば、書帙を開きて互に知る所を問ひ、欣然として相樂み、日月の流れ去るを畏る。相對晤して厭ふことなきも、人理に聚散あり、遂に分離するに至りぬ。

分離して(八)西川に別れ、景を廻らして(九)東山に歸る。別時悲已に甚し、別後情更に延く。傾想して(一〇)嘉音を遲つ。果して(一一)濟江の篇を枉ぐ。風波の事に(一二)辛勤し、洲渚の言に(一三)款曲す。其三

【大意】汝と西川に別れて、我は東山に歸りぬ。別るる時、悲已に甚しかりしも、別後に至りて

【五】帙。書帙なり。
【六】曛日。夕日なり。
【七】悟對。悟一本に晤に作る。相對して語ること。厭歇はいとひやむること。
【八】西川。地名。
【九】東山。靈運の居る處。
【一〇】嘉音。よきおとづれ。
【一一】濟江の篇。惠連の靈運に贈りし詩なり。枉とは惠むといふが如し。
【一二】辛勤。辛苦なり。
【一三】款曲。委曲といふが如し。ねんごろなること。

更に深きを加へ、偏に心を傾けて汝の音信を待ちしが、汝果して濟江の詩を寄せ來る。其詩を讀むに、風波を渡りて苦勞せし事を委曲に叙述せり。洲渚既に時を淹うす。風波予行くこと遲し。務めて(一四)華京の想に協ふ。詎ぞ空谷の期を存せん。猶ほ復た(一五)來章を惠むも、祇に余が思を攪すに足る。黨若(一六)歸言を果さば、共に暮春の時を陶まん。其四

【大意】汝洲渚の際に留滯し、風波に阻てられて行く能はず。然も遊宦の念急にして復た意を山谷に存せず。我に惠むの詩も、誰我が心を亂すに足るのみ。若し別時の約を果して歸り來らば、當に共に暮春の時を樂まん。

暮春未だ交ばずと雖も、仲春善く(一七)遊遨せん。山桃(一八)紅萼を發き、野蕨(一九)紫苞を漸め。(二〇)嚶鳴已に悅豫するも、幽居して猶ほ(二一)鬱陶たり。夢寐に歸舟を佇ちて、我が吝と勞とを釋かん。其五

【大意】未だ暮春の好氣節に及ばずとも、仲春ならば亦よく遊樂を共にせん。今や山桃紅花を著け野蕨紫芽を長じ、鳥啼いて樂めども、我れ獨り汝を思ひて哀み、夢寐にも汝の歸を待てり。汝來ら

【四】華京。京華なり。京師なり。
【五】來章。贈詩なり。
【六】歸言。惠連別るる時。歸隱せんとの言ありしなり。
【七】遊遨。あそぶこと。
【八】紅萼。紅花なり
【九】紫苞。紫色の叢なり。
【一〇】嚶鳴。鳥の啼くこと。
【一一】鬱陶。憂思するなり。

ば始めて我が吝恨と憂勞とを解くを得ん。

(一)王太常に贈る

顏延年

(二)玉水方流を記し、(三)琁源圓折を載す。寶を蓄へて毎に聲希なり。祕すと雖も猶ほ彰徹す。龍を聆いて(四)九淵を瞰、鳳を聞いて(五)丹穴を窺ふ。歷聽するに豈多士ならんや、唯然も(六)時哲を覩る。文を舒べて(七)國華を廣め、言を敷いて(八)朝列を遠くす。德輝(九)邦懋を灼し、芳風(一〇)鄉耋に被る。(一一)側きと幽人の居に同じく、(一二)郊扉常に晝閉ぢたり。(一三)林閭時に晏く開き、亟〻(一四)長者の轍を廻らす。庭昏くして野陰を見、山明にして松雪を望む。靜に惟ひて(一五)羣化を浹くし、(一六)徂生窮節に入る。豫の往くは誠に歡の歇ればなり、悲の來るは樂の闋れるにあらず。

【一】王太常。太常は官名。王僧達なり。

【二】玉水。尸子に「凡そ水は其方折なる者には玉あり、其圓折なる者には珠あり」とあり。

【三】琁源。琁は珠玉なり。圓折は圓く曲ること。

【四】九淵。深き淵。莊子に「千金の珠は必ず九重の淵、驪龍の頷下に在り」とあり。

【五】丹穴。山の名、鳳凰其中より出づ。

【六】時哲。現時の賢人。王僧達を指す。

【七】國華。國の光華。

【八】朝列。列一本に烈に作る。烈は業なり。

【九】邦懋。國の美華。

【一〇】鄉耋。鄉里の老人。顏延年自ら謂ふ。王顏ともに瑯琊臨沂の人。

【一一】側。陋なり。

【一二】郊扉。林外の門扉、林閭。野外の門。

【一三】長者。尊貴の人。

【一四】轍。

【一五】羣化。萬物の變化。

【一六】徂生。徂は往なり。生命の過ぎ往くこと。窮節は衰老は長文句。謝は去なり。

【一七】屬。詩に綴ること。繁翰。

【一八】短札。短き手紙。

美を(一七)屬して繁翰を謝し、遙懷(一八)短札に具す。

【大意】水方流すれば玉あり、圓折すれば珠あり。水の珠玉を蓄ふるや、其聲を靜め、珠玉あるを祕すと雖も、其光明必ず上に通徹す。(王太常の赫赫の名なきも明德あるに喩ふ)龍嘯を聽いては深淵を視、鳳鳴を聞けば丹穴を窺ふ。(珠玉あるを知りて人皆視聽を峙つるを謂ふ)歷聽すれども天下に秀士多からず。唯足下を以て現時の賢哲となすべきのみ。足下よく其文章を舒べ、其言語を布き、以て國朝の美を廣め、德輝以て邦國の美を盛にし、又芳風を垂れて鄉老に加ふ。(王太常の顏延年を訪問せるをいふ)我が廬は側陋にして幽人の居に同じく、門扉晝尙ほ閉ぢ、林門晚く開くと雖も、數〻貴人(王太常を指す)の駕を迎ふ。我れ野陰松雪を望み、靜に物理を考察して、萬物變化の理に及び、我が生漸く老境に入れるを悲む。逸樂の去れるは歡の盡きたればなり。悲の來るは音樂の終れるが爲ならず。(淮南子に「樂を奏して喜び、曲終りて悲む」とあり)今君の美事を綴りて詩章となし、敢て長句を累ぬるを避け、悠遠の情を短札の中に籠め以て呈す。

夏夜(一)從兄散騎(二)車長沙に呈す

顏延年

炎天方に㊂埃鬱、暑晏けて塵紛を閡む。獨靜㊃偶坐を闕き、堂に臨んで㊄星分に對す。側に聽く風の木に薄るを、遙に睇る月の雲に開くを。夜蟬夏に當りて急に、㊅陰蟲秋に先ちて聞ゆ。歲候初めて半を過ぐ。㊆荃蕙豈久しく芬しからんや。㊇屏居して物變を惻み、頰を慕ひて㊈情殷を抱く。㊉九逝思を空うするにあらず、㊊七襄文を成すなし。

【大意】炎熱の時、塵氛煩鬱し、晩に至りて乃ち息む。堂上に獨坐して星を眺め、風の木を拂ふを聽き、月の雲を逗るるを見、蟬聲時を得て急に、蛩秋に先ちて鳴くを聞く。今や既に一歲の半を過ぎたり。香草も豈久しく其芬を保つを得んや。我れ隱居して萬物の變化するを傷み、朋友を慕ひて深憂を抱く。我が魂一夕に九回すと雖も、此の思を空うする能はず、恨七反すと雖も、文章を成す能はず。

【一】從兄。騎。散騎は官名。延年の從兄顏敬宗なり。
【二】車長沙。字は仲遠。
【三】埃鬱。埃は當に煞に作るべし。煞は熱なり。
【四】偶坐。人と相對して坐すること。
【五】星分。星の分布すること。
【六】陰蟲。蛩なり。
【七】荃蕙。香草の名。
【八】屏居。隱居なり。
【九】情殷。殷は憂なり。
【十】九逝。楚辭に「魂一夕にして九たび逝く」とあり。
【十一】七襄。七反といふが如し。韓詩に「跂たる彼の織女、終日七襄す。則ち七襄すと雖、報章を成さず」とあり。

(二)東宮に直し(三)鄭尚書に答ふ

顏延年

皇居(三)環極に體り、(四)險を設けて天工を祇む。(五)兩闕通軌を阻て、(六)對禁清風を限る。跂て予東館に旅り、(七)徒歌して(八)南墉に屬す。(九)寢興鬱として已むなし。起つて(十)辰漢の中するを觀る。(十一)流雲青闕に藹く、(十二)皓月丹宮を鑒す。(十三)踟躕して清防密に、(十四)徙倚して(十五)恆漏窮る。(十六)君子芳訊を吐き、物に感じて余が衷を惻ましむ。惜むらくは(十七)丘園の秀なく、彼の(十八)高松に景行す。知言(十九)誠貫あるも、(二十)美價克く充り難し。何を以てか(二十一)嘉貺を銘せん、言に(二十二)絲と桐とを樹ゑん。

【大意】天子の宮居は衆星の北極星を環るに象り、禁衛の士ありて之を護る。故に足下の居る處と我の宿直せる處とは、通路絕えて、を念ひ、載ち寢れ載ち興く」とあり。鬱は心の舒散せざる貌。

【一】東宮。太子の宮。直は宿直なり。延年時に太子舍人たり。
【二】鄭尚書。尚書は官名。鄭鮮之、字は道子、都官尚書たり。
【三】環極。衆星の北極星を環ること。
【四】險。禁衛ないふ。天工は天子を守衛する官。
【五】兩闕。皇居及び太子の宮。
【六】通軌は通路なり。
【七】對禁。二宮禁中に在り故に對禁といふ。清風は鄭尚書に喩ふ。
【八】徒歌。樂器に合せずして歌ふこと。
【九】南墉。墉は墻なり。尚書省は南に在り。故にいふ。屬は意を注ぐこと。
【十】寢興。詩經に「ここに君子
【十一】辰漢。星の名。
【十二】流雲。行雲なり。
【十三】皓月。明月なり。
【十四】踟躕。徘徊なり。清防は屏風なり。
【十五】徙倚。徘徊なり。
【十六】恆漏。長き時刻。
【十七】君子。鄭尚書を指す。芳訊は鄭の贈りし詩をいふ。
【十八】丘園の秀。園中の美草。
【十九】高松。節を守りて移らざるに喩ふ。鄭尚書を指す。景行は倣ふ意なり。
【二十】誠貫。貫は條理なり。
【二十一】美價。鄭の贈りし詩をいふ。
【二十二】嘉貺。結構なる賜。
【二十三】絲桐。琴瑟なり。

足下と相見る能はず。ただ東宮に在りて南墉を思ふのみ。或は起き或は寢ねて心息むべからず、起つて大辰天河の天に中するを見る。雲行き月輝きて宮殿を繞り、我れ徘徊して覺えず曉に至りぬ。足下嘗て詩を我に賜ふ。我れ之を見て感慨を增す。我に丘園の美なし、ただ足下の高節を仰ぐのみ。足下の詩に知言誠實あるも、我之に答ふる能はず。ただ之を琴瑟に播し以て好意に答へんのみ。

(一)謝監靈運に和す

顏延年

(二)弱植にして端操を慕ひ、(三)窘步して先迷を懼る。立つこと寡くして方を擇ぶにあらず、意を刻んで(四)窮棲に藉る。伊れ昔多幸に遊ひ、筆を秉りて(五)兩閨に侍す。(六)丹雘の滋に慙づと雖も、未だ(七)玄素の睽けるを謂はず。徒に(八)良時の詖けるに遭ひ、王道奄ち(九)昏霾す。(一〇)人神幽明絕え、(一一)朋好雲雨乖ふ。(一二)屈を汀洲の浦に弔し、(一三)帝に蒼山の蹊に謁す。巖に倚りて(一四)緒風を聽き、林を攀ぢて(一五)留荑を結ぶ。跂てて予(一六)衡嶠を間つ。曷の月か(一七)秦稽を瞻ん。(一八)皇聖天德を昭にし、豐澤(一九)沈泥を振ふ。惜むらくは(二〇)雀雉の化なし。何を用てか海淮に充てん。(二一)國を去りて故里に還り、幽門(二二)蓬藜を樹ゑ、茨を采りて(二三)昔宇を葺き、棘を翦りて(二四)舊畦を開く。物謝りて時既に晏れ、年往きて志偕ならず。(二五)仁に親んで情昵を敷き、(二六)興玩して辭悽を究む。(二七)芬馥蘭若を歇し、(二八)清越琳珪を奪ふ。言を盡すは報章にあらず、聊か用て所懷を布く。

【一】謝監。謝靈運。時に祕書監たり。
【二】弱植。植は志なり。端操は端直なる操守。
【三】窘步。急步なり。
【四】窮棲。山居なり。
【五】兩閨。二宮なり。宋の文帝及び太子に事へしこと。
【六】丹雘。君恩に喩ふ。
【七】玄素。始は白くして後に黑くなること。
【八】良時。明時なり。
【九】昏霾。世の亂るるに喩ふ。
【一〇】人神云云。世亂れて祭祀行はれず、人と神と隔れること。
【一一】朋好。朋友なり。
【一二】屈。楚の屈原。忠にして逐はれ自ら水に投じて死す。
【一三】帝。舜なり、舜蒼梧の野に葬る。
【一四】緒風。續きて絕えざる風。

【大意】われ弱志にして端直の操を慕ひ、急步して之を追求するも、常に其正道を誤れるを恐れ、身を立つるに拙にして、方正の道を擇んで世を佐くる能はず。志意を刻んで幽棲を假り、以て其節を成す。昔多幸に遇ひ、筆を秉りて二宮に事ふ。固より高恩に報ゆるに足らずと雖も、始終操守を變せざるは、私に自ら信ずる所なり。明時忽ち傾き、王道既に亂れ、(宋の武帝の崩ずるや少帝位を嗣ぎ遊戲度なし)祭祀行はれずして人神相隔り、朋友離散すること雲雨の如し。

【五】留荑。香草なり。
【六】衡嶠。衡山の巓。
【七】秦稽。會稽山なり。靈運此山に隱居す。
【八】皇聖。宋の文帝を指す。
【九】沈泥。顏延年自ら喩ふ。
【一〇】雀雉の化。國語に「雀海に入りて蛤となり、雉淮に入りて蜃となる」とあり。
【一一】國。國都なり。
【一二】蓬藜。草の名。
【一三】昔宇。昔の家。
【一四】舊畦。舊田なり。
【一五】仁。仁者なり。暗に己を いふ。情昵は親近の情。
【一六】興玩。悅愛なり。辭悽は悽切なる辭。
【一七】芬馥。芬香なり。蘭若は香草。
【一八】清越。玉聲の清く揚ること。琳珪は美玉。

我れ亦始安郡の太守に遷さる。因つて屈原を洲渚の間に弔ひ、帝舜に蒼梧の野に謁し、緒風を聽いて心を傷ましめ、香草を結んで遠人に贈る。我れ既に衡山を隔てて遠く始安に在り、何れの時か會稽山（靈運此山中に在り）を見るを得ん。文帝立ちて天德を明にし、恩澤を敷く。我れ徵されて中書侍郎となりしも、德の以て人を化するなし。何ぞ其職に當るを得ん。因つて國都を去りて鄉里に還り、幽居を結んで隱棲す。萬物退落して、吾が年既に老ゆるも志遂ぐる能はず。足下我を親昵し、詩を寄せて悽切の辭を述べらる。其詩芬芳清揚、以て美玉香草の韻氣を奪ふに足る。我れ今言を盡すは、敢て詩章に報ゆるにあらず、聊か我が心中を述ぶるのみ。

顏延年に答ふ

(一)王僧達

(二)長卿華陽に冠たり、(三)仲連海陰に擅なり。(四)珪璋既に文府、(五)精理亦道心。(六)君子高駕を聳げ、塵軌實に林をなす。(七)崇情遠迹に符ひ、清氣(八)素襟に溢る。(九)結游して年義を略し、篤顧して(一〇)浮沈を棄つ。(一一)寒榮共に偃曝し、(一二)春醞時に獻斟す。聿に來りて(一三)歲序暄かなり。輕雲(一四)東岑を出づ。(一五)麥壟秀色多く、楊園好音を流す。此の(一六)乘日の暇を歡び、忽ち(一七)逝景の侵すを忘る。幽衷何を用てか慰めん、(一八)翰墨久しく謠吟す。棲鳳條をなし難く、(一九)淑貺臨む所にあらず。誦して以て永く周旋し、匣にして以て(二〇)兼金に代へん。

【大意】昔司馬相如は文章の美を以て益州に冠たり、魯仲連は道理の精を以て海畔に冠たり。足下の高風亦實に此二賢と羣を成すべく、高情古人の迹に合ひ、清氣自ら本心に盈つ。我れ足下と交を結んで、年齡と禮義とを忘れ、足下我を眷顧すること篤くして、身の盛衰を顧みず。冬は共に背を日に曝し、春は杯を擧げて共に酒を酌む。今や春暖の好季にして、雲東嶺を出で麥初めて秀で禽鳥柳に鳴く。此光景に歡遊すれば、歲月の我を侵すを忘る。我れ常に足下の文章を吟誦し、以て我が心を安んず。足下の文章は鳳の如し。然も我は梧桐にあらず。（鳳は梧桐にあらざれば棲まず）故に鳳を待つの枝となり難し。賜ふ所の詩亦我の能く當る所にあらず。ただ常に諷誦し之を匣中に珍藏し以て好金に代へんとす。

【一】王僧達。宋の瑯邪の人、始興王の行軍參軍となり、稍く遷りて中書令に至る。
【二】長卿。漢の司馬相如、字は長卿。華陽は益州の縣名。
【三】仲連。魯仲連なり。齊人なり。
【四】珪璋。玉なり、長卿に喩ふ。文府は文章の林府。
【五】精理。精微の理。魯仲連をいふ。
【六】君子。顏延年を指す。
【七】崇情。高尙なる心情。遠迹は古人の跡。
【八】素襟。白き襟、延年の心に喩ふ。
【九】結游。交を結ぶこと。年義は年齡及び禮義。
【一〇】浮沈。盛衰なり。
【一一】寒榮。榮は屋の南簷。偃曝は臥して背を日光にさらすこと。
【一二】春醞。春酒なり。獻斟は杯を捧げて共に酌むこと。
【一三】歲序。氣候なり。
【一四】東岑。東方の山。
【一五】麥壟。麥畠。
【一六】乘日。莊子に「日の車に乘りて襄城の野に遊ぶ」とあり。
【一七】逝景。歲月なり。
【一八】翰墨。文章なり。
【一九】淑貺。善き賜。
【二〇】兼金。好金なり。

(一)郡内の高齋に閑坐す、(二)呂法曹に答ふ

謝　玄暉

結構何ぞ(三)迢遞たる、(四)曠望高深を極む。窗中(五)遠岫を列ね、庭際(六)喬林俯す。日出でて衆鳥散じ、山暝くして孤猨吟ず。已に池上の酌あり、復た此れ風中の琴。(七)君子の度なきにあらずんば、孰が爲にか(八)寸心を勞せん。惠ありて能く我を好し、問るに(九)瑤華の音を以てす。(一〇)金門の步を遺れて、(一一)玉山の岑に就くを見るが若し。

【大意】高齋の結構高峻にして、四方の江山悉く一望の中に在り。朝には衆鳥の散ずるを見、夕には孤猿の啼くを聞き、池邊に酒を酌み、風中に琴を彈じ、以て自ら慰むべし。然も足下の美測るべからず。故に相思ふこと最も切なり。足下我に贈るに好詩を以てせらる。之を讀めば官を棄てて我が山居を訪へるに會せるが如きを覺ゆ。

【一】郡内。郡は宣城郡なり。高齋は高樓の室。
【二】呂法曹。呂僧珍、齊王の法曹なり。
【三】迢遞。高き貌。
【四】曠望。遠望なり。高深は江山をいふ。
【五】遠岫。遠山なり。
【六】喬林。喬木の林。
【七】君子。呂法曹を指す。度なしとは測るべからざるをいふ。
【八】寸心。玄暉の心。
【九】瑤華の音。瑤華は玉なり。呂法曹の贈れる詩をいふ。
【一〇】金門。金馬門、法曹の官署。
【一一】玉山。仙人西王母の居る處。玄暉の高齋に喩ふ。

(一)郡に在りて病に臥す。(二)沈尚書に呈す

謝　玄暉

(三)淮陽股肱の守、高臥して猶ほ(四)茲に在り。況んや復た(五)南山の曲をや。何ぞ幽棲の時に異らん。(六)連陰盛農の節、(七)簦笠東菑に聚る。高閣常に晝掩ひ、荒階(八)諍辭少し。(九)珍簟夏室に清く、輕扇(一〇)涼颸を動かす。(一一)嘉魴聊か薦むべく、(一二)綠蟻方に獨り持す。夏李(一三)朱實を沈め、(一四)秋藕輕絲を折る。(一五)良辰竟に何れの許ぞ、(一六)夙昔佳期を夢む。(一七)坐嘯徒に積るべし。邦を爲むること歲已に(一八)朞なり。(一九)絃歌終に取るなし。(二〇)机を撫して自ら嗤はしむ。

【大意】昔淮陽の太守汲黯あり、一室に臥して尚ほ能く淮陽を治めたり。況んや此の宣城郡なしとは測るべからざるをいふ。

【一】郡。宣城郡なり。
【二】沈尚書。尚書は官名。沈約をいふ。
【三】淮陽。地名。漢の淮陽の太守汲黯上書して病と稱す、帝曰く、淮陽は吾が股肱の地なり、卿我が爲に臥して之を治めよと。
【四】茲。淮陽を指す。
【五】南山の曲。宣城郡をいふ。
【六】連陰。久雨なり。
【七】簦笠。笠なり。東菑は東方の田。
【八】諍辭。訟なり。
【九】珍簟。竹の席。
【一〇】涼颸。涼風なり。
【一一】嘉魴。嘉は良きこと。魴は魚の名。
【一二】綠蟻。酒なり。
【一三】朱實。赤き果實。沈は水中に浸すこと。
【一四】秋藕。蓮根なり。
【一五】良辰。よき時、沈約と面會する時をいふ。
【一六】夙昔。嘗て。佳期は沈約と會合の時。
【一七】坐嘯。漢人語をなして曰く、「南陽の太守は岑公孝、弘農の成瑨ただ坐嘯す」と。
【一八】朞。滿一年をいふ。
【一九】絃歌。子游武城の宰となり、絃歌を以て民を化す。
【二〇】机。坐する時よりかかる具。

郡の如きは、之を治むるの易易たること猶ほ幽棲の時に異らず。（玄暉は宣城太守なり。）今や農耕の盛時なれば、農夫は蒻笠を載きて東田に聚り、太守は高閣を掩ひ珍簟に坐し、輕扇を弄して酒肴に厭き、李實を水中に浸し、蓮根を折りて食ふ。涼味掬すべし。而して庭に訟なし。ただ足下に相會せんと欲するも能はず、夢裡に相見るのみ。常に坐嘯を事とし、彼の子游の如き絃歌の化なく、空しく既に一年を經たり。机を撫でて我をして自ら輕笑せしむるのみ。

謝玄暉

暫く(一)下都に使し夜(二)新林を發し(三)京邑に至り、(四)西府の同僚に贈る

大江日夜流れ、客心悲未だ央きず。徒に(五)關山の近きを念ひ、終に(六)返路の長きを知る。(七)秋河曙に耿耿たり、寒渚夜

【一】下都。下の字疑ふらくは還に作るべし、都は丹陽を指す、卽ち金陵なり。
【二】新林。浦の名。白鷺洲の南に在り。
【三】京邑。卽ち金陵なり。
【四】西府。初め玄暉、隋王子隆の文學たり、子隆荆州に在り、辭賦を好み屢僚友を集む。玄暉文才を以て尤も賞愛せらる、長史王秀之之を妬み、密に以て啓聞す、武帝玄暉に都に還るべしと敕す。玄暉道中此詩を作り以て西府に寄す、西府は卽ち荆州なる隋王府なり。
【五】關山。關塞を設けたる山。關山近しとは都を距ること近きをいふ。
【六】返路。歸路なり、返路長しとは西府を距ること遠きをいふ。
【七】秋河。天漢卽ちアマノガハ。耿耿は小明の貌。

(八)蒼蒼たり。領を引いて(九)京室を見れば、(一〇)宮雉正に相望み、(一一)金波鳩鵲に麗き、(一二)玉繩建章に低る。車を(一三)鼎門の外に驅り、(一四)昭丘の陽を見んことを思ふ。(一五)馳暉接ぐべからず、何ぞ況んや(一六)兩鄉を隔つるをや。風雲に烏路あるも、(一七)江漢限られて梁なし。常に恐る(一八)鷹隼擊ち、(一九)時菊嚴霜に委せんことを。言を(二〇)嚴羅の者に寄す、(二一)寥廓已に高く翔れりと。

【大意】大江の水日夜流れて還らず、吾も亦此水と同じく再び西府に還るべからざるを思へば、客心殊に悲を增す。步步金陵に近づくは卽ち步步西府に遠ざかる所以なり。仰げば天河の曉に耿耿として明なるあり、俯せば蒹葭の夕に蒼蒼として茂るあり。見る所悉く悲秋の色ならざるはなし。頸を延ばして金陵を望めば、宮雉正に相對し、月色鳩鵲館を照し、星光建章宮に低るるを見る。車を都門の外に驅りて、荆州を望まんとすれば、日は箭の如く馳せて追ふべからず。況んや山川遠く兩地を隔つるをや。風雲には烏の飛ぶべき道あれども、江

【八】蒼蒼。青黑き貌。
【九】京室。金陵の都。
【一〇】宮雉。宮牆なり。
【一一】金波。月光なり。鳩鵲は館の名。
【一二】玉繩。星の名。建章は宮の名。
【一三】鼎門。金陵の門。
【一四】昭丘。楚の昭王の陵墓、荆州に在り、ここは隋王府に喩ふ。
【一五】馳暉。日なり。
【一六】兩鄉。金陵と荆州。
【一七】江漢。楊子江と漢水。
【一八】鷹隼。はやぶさ。讒人に喩ふ。秋殺の氣至れば鷹隼擊搏す。
【一九】時菊。秋菊なり。玄暉自ら喩ふ。委は萎むこと。
【二〇】嚴羅。鳥を捕ふる網。讒人に喩ふ。
【二一】寥廓。天空なり。

漢には人の渡るべき橋なきを如何せん。我れ常に鷹隼の搏擊を逞うし、菊花の嚴霜に萎まんことを恐る。(讒邪の臣勢を得て、良臣の害せらるるに喩ふ)因つて網を以て鳥を捕へんとする者(讒邪の人に喩ふ)に寄語す。鳥は既に天空高く飛び去りたれば、復た捕ふべくもあらずと。(己遠く荆州を去りたれば、復た讒せんやうなかるべしとの意)

(一)王晉安に酬ゆ　謝玄暉

(二)梢梢として枝早く勁く、(三)塗塗として露晩く晞く。(四)南中に橘柚榮ゆ。寧んぞ(五)鴻鴈の飛ぶを知らんや。霧を拂つて(六)青閣に朝し、日旰けて(七)彤闈に坐す。悵望すれば(八)一塗阻り、(九)參差として百慮依る。(一〇)春草秋更に綠なるも、(一一)公子未だ西に歸らず。誰か能く(一二)京洛に久うせんや、(一三)緇塵素衣を染む。

【大意】晉安地方は暖國なれば、秋冬に至るも樹枝勁く露繁かるべく、橘柚の茂るを見て、鴻雁の飛ぶを知らざるべし。我れ夙に朝堂に朝し、日旰けて尚書省に坐し、遥に足下を思へども、道隔りて通せず、百感交〻心に攢まるのみ。此地は春草秋に至りて更に綠を加へたれば、足下宜しく早く西歸せらるべし。然し都門は塵紛繁くして久しく留るべからざれば、行〻將に相携へて幽棲を共にせん。

【一】王晉安。晉安の郡守王德元なり。晉安は唐の泉州、後の福州なり。
【二】梢梢。樹枝勁强にして葉なき貌。
【三】塗塗。露の厚き貌。
【四】南中。南方の地方、晉安をいふ。
【五】鴻鴈。鴈は南は衡山に至りて又北に還り、衡山以南に行くことなし　故に晉安地方にては鴈の飛ぶを知らず。
【六】青閣。朝堂なり。
【七】彤闈。宮門なり、尚書省なり。時に玄暉は尚書吏部郎たり。
【八】一塗。塗は途なり。晉安に行くべき道。
【九】參差。往來する貌。
【一〇】春草。楚辭に「王孫遊んで歸らず、春草生じて萋萋たり」とあり。
【一一】公子。王德元を指す。晉安は東に在り。故に都に歸るを西に歸るといふ。
【一三】京洛。都。
【一三】緇塵。黑き塵。素衣は白衣なり。

(一)內兄希叔に奉答す

嘉惠を(二)帝子に承け、(三)躧履して(四)王孫に奉ず。屬ろ(五)金馬の署を叨にし、又(七)銅龍の門を點ず。(八)平津の邸に出入し、一たび(九)孟嘗の尊を見る。(一〇)歸來桑柘に翳れ、朝夕(一一)涼溫を異にす。其一

【大意】われ嘗て竟陵王の惠を受けて秀才に擧げられ、衣冠して之に奉侍す。後遷りて金馬銅龍の門に事へ、更に太傅王晏の拔擢を

(二)陸韓卿

【一】內兄。妻の兄。希叔は顧肸、字は希叔。邵陵王國の常侍たり。
【二】陸韓卿。陸厥、字は韓卿、齊の吳の人なり、竟陵王秀才に擧ぐ、後王晏太傅の主簿たり。
【三】帝子。竟陵王を指す。
【四】躧履。步履なり、衣冠といふが如し。
【五】王孫。竟陵王を指す。奉は侍なり。
【六】金馬の署。官署の名。
【七】銅龍。太子の門の名。
【八】平津。漢の公孫弘、平津侯に封ぜられ、東閤を開いて士を待つ。太傅王晏に喩ふ。
【九】孟嘗。齊の公子孟嘗君、賓客を好む。太傅王晏に喩ふ。
【一〇】歸來。官を罷めて私家に歸りしこと。桑柘は木の名。
【一一】涼溫。貴賤といふが如し。

蒙り、其邸に出入したるも、官を罷めて茅屋に歸り、貴賤忽ち地を易ふるに至れり。(一二)殂落固より云に是なり。(一三)寂蔑として終に斯の如し。門を杜ぢて(一四)三徑を清め、(一五)檻に坐して曲池に臨めば、(一六)鳧鵠儔侶に嘯き、(一七)荷芰始めて參差たり。(一八)田田たる葉なしと雖も、爾と(一九)漣漪に汎ばん。其二

【大意】我の凋衰せるは固より當然なり。故に寂寞として此に隱居し、門を閉ぢて庭徑を淨め、欄干に憑りて曲池に臨めば、水禽友を呼び、水草葉を延べ、其景また賞するに足る。其葉未だ繁らずと雖も、足下と舟を其間に泛べて樂まんと欲す。

(二〇)春華と秋實と、庶子と家臣と、(二一)王門の貴き所以は、古より(二二)俊民多ければなり。(二三)離宮杞梓を收め、(二四)華屋徐陳に富み、(二五)上林苑に平旦し、(二六)伊水の濱に日入す。其三

【大意】王侯の貴きは其門に俊賢多ければなり。故に春華の庶子、家丞の秋實皆一門に集れり。太子の門亦賢才を收採し、才華あること徐幹、陳琳の如き者少からず。此等の賢才晨夕側に侍して、或は上林苑に遊び、或は伊水の濱に遊ぶ。(二七)書記既に翩翩として、(二八)賦歌能く妙絶なり。(二九)相如も溫麗を恧ぢ、(三〇)子雲も筆札を慙づ。(三一)駿足長阪を思ひ、(三二)柴車危轍を畏る。茲の(三三)山陽の譏に愧ぢ、此の(三四)河陽の別を空うす。其四

【大意】足下は書記敏捷にして、詩賦亦絶妙なり。司馬相如も溫麗を讓り、谷子雲も筆札を恥づ。足下の如き駿才は長阪に遇ひて足を展べんことを思ひ、己の如き鈍才は常に世路の險を懼る。故に共に歡宴するを恥ぢ、送別の辭を缺く所以なり。

【一一】殂落。凋落なり。
【一二】寂寞。寂寞なり。
【一三】三徑。蔣詡、字は元卿、舍中に三徑あり。
【一四】檻。欄干。
【一五】鳧鵠。水鳥の名。儔侶は同類の友。
【一六】荷芰。蓮及び菱。共に水草の名。參差は葉の齊一ならざること。
【一七】田田。蓮葉の貌。
【一八】漣漪。さざなみ。
【一九】春華。魏志に「邢顒、平原侯植の家丞となる、顒防閑するに禮を以てし屈撓する所なし、是に由りて庶子劉楨と合はず、書して植を諫めて曰く、家丞邢顒は北土の彦なり、而して楨禮遇殊特なるも、顒反つて疎簡なり、私に懼る觀る者將に君侯不肖を習近し賢を禮すること足らず、庶子の春華を采り、家丞の秋實を忘ると謂はんとするをと」とあり。
【二〇】王門。邵陵王の家。
【二一】俊民。賢臣なり。
【二二】離宮。太子の宮なり。杞梓は良木の名。賢才に喩ふ。收は取なり。

【二三】華屋。太子の宮。徐陳は徐幹及び陳琳なり、竝に才華あり、魏の文帝と友とし善かりき。亦賢友に喩ふ。
【二四】上林苑。天子の御苑なり、平旦は曉なり。
【二五】伊水。川の名。日入は暮なり。
【二六】書記。書牘奏記の類をいふ。翩翩は輕く舉る貌。
【二七】賦歌。詩章なり。
【二八】相如。漢の司馬相如なり。其文溫麗なり。
【二九】子雲。漢の谷永、字は子雲、筆札に妙なり。筆札は筆蹟なり。
【三〇】駿足。駿馬なり。希叔に喩ふ。
【三一】柴車。弱車なり、己に喩ふ。危轍は險路。
【三二】山陽。魏の嵇康、向秀と山陽縣に寓居し、常に竹林の譏をなす。
【三三】河陽。魏の曹植潁氏を送る詩に「親昵竝に集り送り、此の河陽に置酒す」とあり。

㉟平原が十日の飲、㊱中散が千里の遊、㊲渤海方に淫滞す。㊳宣城誰か獻酬せん。南山の下に㊴屏居し、此歳の方に秋なるに臨めり。惜い哉時與ならず、日暮れて輕舟なし。其五

【大意】足下と十日の飲をなし、千里駕を命じて訪はんと欲すれども、足下は邵陵王に事へて遠方に淫滞し居れば、共に宣城の美酒を酌むこと能はず。われ今南山の下に隱居し、且つ衰老に及べり。惜いかな歳月我を待たず、人の我を推薦する者なきこと、恰も舟の以て濟るべきなきが如し。

【㉟】平原。平原君趙勝なり、秦の昭王、平原君に書を遺りて曰く、「寡人願くは君と十日の飲をなさん」と。

【㊱】中散。中散大夫嵇康。初め呂安、嵇康と友たり、相思へば則ち駕を命じて千里之に從ふ。

【㊲】渤海。郡名、魏の文帝の吳質、徐幹と遊びし處。希叔が邵陵王に事ふるに喩ふ。淫滞は久しく留ること。

【㊳】宣城。酒の名。

【㊴】屏居。隱居なり。

(一)張徐州謖に贈る

(二)范彦龍

田家(三)樵採し去り、薄暮方に來り歸る。還つて(四)稚子の說く

【一】張徐州。張謖、徐州の刺史となり、去るに臨み彦龍に就いて別を告ぐ、相見ず、故に彦龍此詩を作りて之に贈る。

【二】范彦龍。名は雲、字は彦龍、武興の人なり、齊の竟陵王子良の文學となり、梁に至りて散騎侍郎となる。

【三】樵採。採樵なり。薪を採りに行くこと。

【四】稚子。幼兒なり。

を聞く、客あり(五)柴扉を款く。(六)儐從皆珠玳、(七)裘馬悉く輕肥、(八)軒蓋墟落を照し、(九)傳瑞光輝を生ず。疑ふらくは是れ(一〇)徐方牧か。既に是として復た非かと疑ふ。舊を思ふ(一一)昔言あり、此道今已に微なり。(一二)物情疵賤を棄つ、何ぞ獨り(一三)衡闌を顧みる。恨むらくは雞黍を具へて、(一四)故人と揮ふを得ざりしを。情を懷いて徒に(一五)草草たり、涙下りて空しく(一六)霏霏たり。書を雲間の鴈に寄す、我が爲に(一七)西北に飛べ。

【大意】われ薪を採りて山に入り、晩に歸り來れば、童子言ふ、客あり來り訪へり、隨從の士卒皆珠玉玳瑁を以て飾となし、肥馬に跨り輕裘を著、車馬村里に輝き、瑞節光輝を發せりと。我之を聞きて是れ必ず足下ならんと思ひしも、或は然らざるかと疑へり。古人は舊を忘るべからざるを戒めたるも、今人復た此道を用ひず。凡そ人の情卑賤を棄てて顧ず。足下獨り舊交を思ひて我を訪へり。世俗と類を同うせずと謂ふべきなり。ただ雞を殺し黍を蒸し、足下と離杯

【五】柴扉。柴門なり、己の家をいふ。

【六】儐從。前後に隨從する者。

【七】裘馬。衣裘及び乘馬。

【八】軒蓋。馬車の蓋。墟落は村里。

【九】傳瑞。傳は驛馬、瑞は刺史の節信(しるし)なり。

【一〇】徐方牧。徐州の長官。即ち徐謖。

【一一】昔言。昔人の言。

【一二】物情。人情なり。疵賤は卑賤なり。

【一三】衡闌。衡門なり。木を横たへて門となせるなり。賤者の居なり。

【一四】故人。舊友なり、張徐州を指す。

【一五】草草。心を勞する貌。

【一六】霏霏。涙の落つる貌。

【一七】西北。徐州は揚州の西北に在り。

を擧ぐる能はざりしを恨むのみ。因つて草草として憂へ、霏霏として涙を落し、鴈の西北に飛ぶに託し、音信を足下に傳ふ。

(一)古意、(二)王中書に贈る

范彦龍

官を(三)青瑣闥に攝し、遙に(四)鳳凰池を望む。誰か云ふ相去ると遠しと。(五)脉脉として光儀を阻つ。(六)岱山靈異饒く、(七)沂水英奇に富む。(八)逸翮北海を陵ぎ、(九)搏飛して南皮を出づ。聖明の后に遭逢し、來りて(一〇)桐樹の枝に棲む。(一一)竹花何ぞ莫莫たる。桐葉何ぞ(一二)離離たる。棲むべく復た食ふべし。此外亦何をかせん。豈知らんや(一三)鷦鷯なる者、一粒(一四)餘貲あるを。

【大意】我れ青瑣門に在りて、遙に足下の居る鳳凰池を望めば、兩處相去ること、遠きに

【一】古意。古詩の意に象るをいふ。
【二】王中書。中書監王融なり。
【三】青瑣闥。宮門の名、彦龍通直郎となり、ここに宦す。
【四】鳳凰池。禁苑中の池の名。中書省の在る處。
【五】脉脉。見えざる貌。光儀は尊容といふが如し。
【六】岱山。泰山なり。靈異は賢俊なり。
【七】沂水。川の名。英奇は賢俊なり。岱山沂水は王氏の出でし處なり。
【八】逸翮。すぐれたる翼。賢才に喩ふ。北海は魏の徐幹なり。
【九】搏飛。大風を羽下にまるめ込みて飛ぶこと。南皮は魏の吳質をいふ。
【一〇】桐樹。鳳凰は桐にあらざれば棲まず。
【一一】竹花。鳳凰は竹實にあらざれば食はず。莫莫は盛なる貌。
【一二】離離。下に垂るる貌。
【一三】鷦鷯。みそさざい、小鳥の名。
【一四】餘貲。餘財なり。

あらねど、絶えて足下の容儀を見る能はず。岱山沂水は足下の鄉里にして足下の如き英才を出せり。足下の才は遠く徐幹、吳質（共に魏の文帝の恩寵を蒙りし人）に勝り、殊に聖明の天子に遇ひ、其朝に來り仕ふ。恰も鳳凰の桐樹の枝に棲むが如し。而して竹實桐葉繁茂せるを以て、食ふにも棲むにも不足あることなし。何ぞ其外を望むべけんや。（官祿の厚きに喩ふ）鷦鷯の如きは少食なるを以て、一粒にて尙ほ餘あるを知らずや。（我の如きは卑官に甘んずるに、足下の高官を望むは宜しからずとの意なり）

(一)郭桐廬、谿口を出でて(二)候せらる、余既に未だ至らず、郭仍つて村に進む、舟を維ぐこと之を久うして、郭生方に至れるに贈る

任彦昇

朝に(三)富春の渚を發し、意を蓄へて相思を忍ぶ。(四)涿令春を行りて返り、(五)冠蓋川坻に溢る。望むこと久うして方に來り萃り、悲歡して自ら持せず。(六)滄江路此に窮り、湍險方に茲より。

【一】郭桐廬。桐廬は縣名、會稽郡に屬す、ここに桐廬溪あり、郭峙桐廬縣令たり。
【二】候。待ち受くること。彦昇、時に新安太守たり、故に伺候せるなり。
【三】富春。縣名、會稽郡に屬す。
【四】涿令。後漢の滕撫、初め州郡に仕へ稍遷りて涿縣の令

(七)疊嶂響を成し易く、重ぬるに夜猨の悲きを以てす。客心幸に自ら弭む。(八)中道にして(九)心期に遇ふ。(一〇)親好斯より絶え、孤游此より辭せん。

【大意】われ早朝富春縣を發し、足下を見んと欲するの熱情を忍んで此に來る。適〻足下春耕を巡視して還り來るや、其徳を慕ひて望觀する者川岸に溢るるばかりなり。われ舟を維ぎ足下を望むこと久しうして、始めて相見るを得、自ら悲歡に堪ふる能はず。(望むこと久しきを悲み、來り萃れるを歡ぶなり)江流ここに窮りたれば、此より路益〻險を加へ、山中ただ反響と猿聲とを聞くならん。悲しとも悲し。今幸に足下に會して旅愁を慰め得たるに、今ここに相別れて獨り山中を行かば、又又悲哀を感ずるならん。

【一】疊嶂。重れる山。
【八】中道。中途なり。
【九】心期。親友なり。郭峙をいふ。
【一〇】親好。郭峙をいふ。
【五】冠蓋。冠及び車蓋。鹵簿を觀る者をいふ。川抵は川岸。
【六】滄江。川流なり。
【七】となり、風政脩明なり。借りて郭峙に喩ふ。

行旅上

河陽縣の作二首

潘安仁

微身蟬翼よりも輕く、弱冠にして(一)嘉招を忝くし、疚に在りて賢路を妨げ、再び(二)上宰の朝に升り。猥に(三)公叔の舉を荷ひ、(四)陪を連ねて(五)王寮に厠る。長嘯して東山に歸り、耒を擁して時苗を耨る。幽谷(六)纖葛茂り、峻巖(七)榮條を敷き、(八)落英林趾に隕ち、(九)飛莖陵喬に秀づ。(一〇)卑高亦何の常あらん、升降一朝に在り。徒に恨む(一一)良時の泰にして、(一二)小人の道遂に消するを。譬へば野田の蓬の如く、(一三)幹流して風に隨つて飄る。昔は(一四)都邑の游に倦み、今は(一五)河朔の傜を掌る。城に登りて眷みて(一六)南顧すれば、(一七)凱風微綃を揚ぐ。(一八)洪流何ぞ浩蕩たる、(一九)脩芒鬱とし岩嶤たり。誰か謂ふ(二〇)晉京遠しと、(二一)室邇くして身實に遼なり。誰か謂ふ(二二)邑宰輕しと、令名劭からざるを患ふ。人天地の間に生れて、百年孰か能く要せん。頽ること石を槁つの火の如く、瞥なること

【一】嘉招。徵召なり。

【一】上宰。宰相楊駿、賈充を指す。
【二】公叔。論語に「公叔文子の臣、大夫僎、文子と同じく公に昇る」とあり。
【四】陪。陪臣なり。
【五】王寮。王官なり。
【六】纖葛。細き葛。
【七】榮條。花咲く枝。
【八】落英。落花なり。林趾は林麓なり。
【九】飛莖。高き莖。陵喬は高き岡。
【一〇】卑高。高低なり。
【一一】良時。明時なり。泰は安泰なり。
【一二】小人。微賤の人。安仁自ら謂ふ。
【一三】幹流。流轉なり。
【一四】都邑。都なり、尚書郎たりしをいふ。
【一五】河朔。河陽縣令となりしをいふ。傜は徭役。
【一六】南顧。都の方を望む。
【一七】凱風。南風。微綃は薄き幕。
【一八】洪流。黄河をいふ。浩蕩は廣き貌。
【一九】脩芒。洛陽の北に在る北邙山。岩嶤は高き貌。
【二〇】晉京。晉の都、卽ち洛陽。
【二一】室邇。詩經に「其室則ち邇し、其人甚遠し」とあり。
【二二】邑宰。縣令なり。
【二三】齊都。論語に「齊の景公馬千駟あり、死するの日人得て稱するなし」とあり。是れ遺聲なきなり。

と道を截る飈の若し。(二三)齊都に遺聲なく、(二四)桐鄉に餘謠あり。謙に福するは純約に在り、盈を害するは矜驕に由る。人に君たるの德なしと雖も、民を視ること恍からざらんことを庶ふ。

【大意】われ微賤の身を以て、弱冠にして秀才に擧げられ、病敗不才を以て再び宰府の掾となり、宰相の陪臣として王官に伍するを得たるも、後東山に歸りて農耕を事とす。今幽谷の葛巖上の花枝を見るに、其花林下に落ち、其莖陵上に立つ。されば高低升降は常あるにあらず、其變化一旦夕の間に在るを知る。人の榮辱も亦此の如し。身の沈淪また何ぞ歎ずるに足らんや。然りと雖も生れて聖明の世に遇ひ、我が道獨り窮し、恰も蓬の風に飄るが如く、嘗て帝都に宦遊せし身を以て、河陽縣令となれるは、遺恨なき能はず。因つて城に登りて帝都を望めば、南風わが帳を揚げ、黃河洋洋として流れ、北邙山高く聳え、見るべくして復た往くべからず。悲しいかな。抑〻縣令の職は輕きにあらず、美名を得るは易しとなさず。人生は百年に滿たず、其の迅速なること石を擊つの火、道を截るの風の如し。務めて美名を擧げざれば、死して餘悔あり。死して遺譽なきは我の恥づる所にして、死して餘謳あるは我の望む所なり。天は謙約なる者を見ては福を與へ、矜驕なる者を見ては之を害す。われ縣令たるの德なしと雖も、民を愛養し美名を得んことを希へり。

【二四】桐鄉。漢の朱邑、桐鄉の嗇夫となる、吏人愛して死後に至るまで其德を謳歌す。

日夕陰雲起る。城に登りて(二五)洪河を望む。川氣山嶺を冒ひ、驚湍(二六)巖阿に激す。歸鴈(二七)蘭時に映じ、游魚圓波を動かす。鳴蟬寒音を厲うし、(二八)時菊秋華を耀かす。領を引いて(二九)京室を望めば、(三〇)南路伐柯に在り。(三一)大厦緬として覿るなく、(三二)崇芒鬱として嵯峨たり。(三三)摠摠たる都邑の人、(三四)擾擾たる俗化の訛。水に依りて(三五)浮萍に類し、松に寄りて(三六)懸蘿に似たり。(三七)朱博舒慢を糾し、楚風琅邪に被る。曲蓬何を以てか直き、身を託して叢麻に依ればなり。(三八)黔黎竟に何の常あらん、政の成るは民の和に在り。位は(三九)單父の邑に同じきに、子賤の歌なきを愧づ。豈敢て微官を陋とせんや、但恐くは(四〇)所荷を忝しめんことを。

【大意】夕に河陽城に登りて黃河を望めば、雲氣山を覆ひ奔湍巖角を衝き、鴈蘭渚に映じ、魚波紋を起し、寒蟬鳴き秋菊開く。頸を延べて京師

【二五】洪河。黃河なり。
【二六】巖阿。巖角なり。
【二七】蘭時。蘭の生ぜる渚。
【二八】時菊。秋菊なり。
【二九】京室。京師なり。
【三〇】南路。京師に往く道。伐柯は詩經に「柯を伐り柯を伐る、其則遠からず」とあるにより、近きをいふ。
【三一】大厦。厦一に夏に作る。大夏は洛陽の門の名。緬は遠なり。
【三二】崇芒。高き北邙山。嵯峨は高き貌。
【三三】摠摠。衆き貌。
【三四】擾擾。衆き貌。訛は僞なり。
【三五】浮萍。水に浮べるウキグサ。
【三六】懸蘿。松に懸れるツルクサ。
【三七】朱博。漢の杜陵の人なり、琅邪太守に遷り、事を視ること數年、大に其俗を改む。掾吏の禮節皆楚趙の如し。舒慢は禮節の行はれざること。
【三八】黔黎。衆民なり。
【三九】單父。地名、宓子賤、單父を治め、常に琴を鳴して能く治まれり。
【四〇】所荷。責任、職責。

を望めば、其道甚だ近きも、大夏門邈として見えず、ただ北邙山の聳ゆるを見るのみ。都邑の人衆には俗化の僞訛あり。人俗の政化によりて變遷するは、猶ほ萍の水に隨つて去留し、蘿の松に寄りて高下あるが如し。故に朱博の琅邪を治むるや、掾吏の禮節楚趙の風ありといふ。蓬の性は曲れり。もし麻中に生ずれば扶けずして直し。民を治むるも亦然り。政の成るは民の和するに在り。我れ子賤と職を同うするも、絃歌の化を同うする能はざるを愧づ。豈此官を以て微小となさんや、ただ職責を果す能はざらんことを恐るるのみ。

(一)懷縣に在りて作る二首

潘安仁

(二)南陸修景を迎へ、(三)朱明末垂を送る。(四)初伏新節を啓き、隆暑方に(五)赫羲たり。朝には(六)慶雲の興らんことを想ひ、夕には白日の移るを遲つ。汗を揮つて(七)中宇を辭し、城に登りて清池に臨む。(八)涼飈遠きより集り、輕襟風の吹くに隨ふ。靈圃華果を耀し、(九)通衢高椅を列す。

【一】懷縣。安仁河陽縣令より懷縣の令に遷る。
【二】南陸。續漢書に「日南陸を行く之を夏といふ」とあり。修景は日の長きこと。
【三】朱明。爾雅に「夏を朱明となす」とあり。末垂は末なり。
【四】初伏。三伏の初。
【五】赫羲。炎盛の貌。
【六】慶雲。瑞雲なり。
【七】中宇。屋中なり。
【八】涼飈。涼風なり。
【九】通衢。通道なり。高椅の椅は桐の類の木。

(一〇)瓜瓞長苞を蔓し、(一一)薑芋廣畦に紛たり。稻栽肅として(一二)仟仟たり、黍苗何ぞ(一三)離離たる。虛薄にして時用に乏しく、位微にして名日に卑し。驅役せられて(一四)兩邑に宰たるも、政績竟に施すなし。我が(一五)京輦を違りしより、(一六)四載斯に迄る。器は(一七)廊廟の姿にあらず、屢出づる固に其れ宜なり。徒に(一八)越鳥の志を懷き、眷戀して南枝を想ふ。

【大意】懷縣に在りて京師を戀ふなり。今や夏も末となり、初伏に入りて炎暑方に盛なり。故に雲興り日移るを望み、屋内を出で城に登り、池に臨んで涼を納るれば、庭園には花あり實あり、通路には椅桐列り、瓜は蔓を叢草の下に引き、薑芋は紛然として廣圃に滿ち、稻茂り黍垂るるを見る。われ才德なくして時用に乏しきを以て、位名ともに卑しく、河陽懷二縣の令たるも、政績の觀るべきなく、京師を去りてより既に四年を經たり。固より廟堂に立つべき器量なければ、屢出でて外職に就くは當然なれども、南方京師に還りたき望は常に心を離るることなし。

【一〇】瓜瓞。瓜なり。長苞は叢草。
【一一】薑、芋。野菜の名。廣畦は廣き畑。
【一二】仟仟。長茂の貌。
【一三】離離。長茂の貌。
【一四】兩邑。河陽と懷となり。宰は長官。
【一五】京輦。京師なり。
【一六】四載。四年なり。
【一七】廊廟。朝廷なり。
【一八】越鳥。越は南方の國の名。古詩に「越鳥南枝に巢くふ」とあり。

春秋代〻遷逝し、(一九)四運紛として喜ぶべし。寵辱驚かざること易く、本を戀ひて思をなし難し。我れ來るとき氷未だ泮けざりしに、時暑にして忽ち(二〇)隆熾なり。此の還期の淹きに感じ、彼の年往の駛なるを歎く。城に登りて(二一)郊甸を望み、目を游ばしめて(二二)朝寺を歴。(二三)小國民務寡く、終日寂として無事なり。白水庭を過ぎて激し、綠槐門を夾んで植つ。信に美なれども吾が土にあらず、秖(二四)懷歸の志を攪す。(二五)眷然として鞏洛を顧みれば、山川(二六)邈として離異なり。(二七)願言して舊鄕に旋らんとすれば、此の(二八)簡書の忌を畏る。祇で(二九)社稷の守に奉じ、(三〇)恪居して職司に處る。

【大意】此首は鄕里を思ふなり。歳月の遷り代はるは誠に喜ぶべし。寵辱の事は敢て驚くに足らざれども、鄕里を思ふの心は實に忍ぶべからず。我の懷縣に來りしは、早春なりしも、今や既に盛夏の候となれり。還期の遲きを感じ、年運の速なるを傷みつつ、或は郊甸を視察し、或は諸官署を巡回す。懷縣は小邑なれば、官事も極めて閑散にて、庭前には白水激し、門外には綠槐立ち、棄て難き風情あれども、わが鄕土ならねば、唯歸鄕の心を

【一九】四運。四季なり。
【二〇】隆熾。盛なること。
【二一】郊甸。郊外の地。
【二二】朝寺。役所なり。
【二三】小國。懷縣を指す。
【二四】懷歸。故鄕に歸らんことを思ふなり。
【二五】眷然。慕ふ貌。鞏洛は二縣の名。安仁の父の慕のある處。
【二六】邈。遠き貌。離異は隔ること。
【二七】願言。思ふこと。
【二八】簡書。刑書なり。
【二九】社稷。縣邑といふが如し。懷縣を指す。
【三〇】恪居。勤居なり。

催すの種となる。因つて鞏洛の地を望めば、山川遠く隔れり。故鄕に歸らんとすれば、刑罰を蒙るを恐れて歸る能はず。故に職司を勤めて此地に留るなり。

(一)大駕を迎ふ

潘正叔

南山鬱として(二)岑崟たり、(三)洛川迅くして且つ急なり。青松(四)修嶺を蔭ひ、(五)綠蘂廣隰に被る。朝日(六)長塗に順ひ、夕暮集る所なし。歸雲(七)轘に乘りて浮び、淒風(八)帷を尋ねて入る。道に深識の士に逢ふ。手を擧げて吾に對して揖す。(九)世故尚ほ未だ夷ならず、(一〇)崤函方に嶮澁なり。(一一)狐貍兩轅を夾み、(一二)豺狼路に當りて立ち、(一三)翔鳳籠檻に嬰り、(一四)騏驥維縶せらる。(一五)俎豆は昔常て聞けり、軍旅は素より未だ習はず。且少く(一六)君が

【一】大駕。天子の乘輿なり。晉の東海王越、大駕に從つて鄴を討ち、軍敗れて輕騎下邳に奔る、永康二年、越天下の甲士三萬人を率ゐ大駕を奉迎して洛陽に還る。正叔時に之に與る、故に此詩あり。
【二】岑崟。峻なる貌。
【三】洛川。川の名。
【四】修嶺。長き山脈。
【五】綠蘂。蘂は草の名。廣隰は廣き澤。
【六】長塗。長途なり。
【七】轘。車の幌。
【八】帷。車幔なり。
【九】世故。世の騷亂。
【一〇】崤函。崤關及び函谷關。
【一一】狐貍。貪亂の臣に喩ふ。
【一二】豺狼。貪亂の臣に喩ふ。
【一三】翔鳳。賢者に喩ふ。籠檻はカゴ及びオリ。
【一四】騏驥。駿馬なり。賢者に喩ふ。維縶は束縛といふが如し。
【一五】俎豆。祭器の名。禮事に喩ふ。論語に「衞の靈公陳を孔子に問ふ、孔子對へて曰く、俎豆の事は嘗て之を聞けり、軍旅の事は未だ之を學ばざるなり」とあり。軍旅は戰事な

駕を停めて、徐に干戈の戢まるを待て。

【大意】我れ大駕を迎ふれば南山高く聳え洛水奔流し、山には青松茂り、澤には綠藥生ずるを見る。晝は長途に循つて行き、夜に至りて止宿する所なく、風雲車轅を侵して入る。道に深識の士あり、(假設して下の語を發せしむるなり。)余に揖して言つて曰く、今や世亂未だ熄まず、崤函の路嶮澁にして未だ通せず、貪亂の臣親近して權勢を握り、賢者は拘繫せられて用に施すを得ず。我れ嘗て禮儀の事を學びしも、戰事は未だ之を學ばず、故に今日の世亂を鎭めんやうなし。君も姑く駕を留めて世亂の鎭まるを待つべきなりと。深識の士余に告ぐるの言此の如し。(此れ假設の言にて、實は正叔の晉君に對する意見を述べしなり。)

【六】君。前文の深識の士が正叔を指して言ふ。

(一)洛に赴く詩二首

陸士衡

世を希ひて(二)高符なく、道を營んで(三)烈心なし。(四)靖端にして(五)有命を肅み、機を假りて江潭を越ゆ。親友予が邁くに贈り、淚を廣川の陰に揮ふ。膺を撫ちて攜手を解き、永歎して(六)遺音を結ぶ。迹なくして匿す所あり、

【一】洛。晉都洛陽なり。
【二】高符。瑞命なり。
【三】烈心。勇猛心なり。
【四】靖端。清正なり。
【五】有命。君命なり。
【六】遺音。遺る所の音信。

寂漠として聲必ず沈む。目を肆にするも(七)眇として及ばず。(八)緬然として雙び潛るるが若し。南を望んで(九)玄渚に泣き、北に邁きて長林を涉る。谷風(一〇)修薄を拂ひ、(一一)油雲高岑を翳ふ。(一二)亹亹として孤獸騁せ、(一三)嚶嚶として思鳥吟ず。物に感じて(一四)堂室を戀ひ、離思一に何ぞ深き。佇立して(一五)愾として我れ歎き、(一六)寤寐に涕衿に盈つ。惜むらくは懷歸の志なきを、辛苦して誰か心をなさん。

【大意】われ世俗の富貴を望めども、好運なく、道藝の術を營むも又勇猛心なし。今晉室の命令を蒙り、舟楫を借りて江水を渡り、以て洛陽に赴かんとす。親友吾が行を送り、淚を江岸に拭ふ。我れ胸を拊ち手を解きて別れ、別後長嘆して贈遺の言を思ふ。然も親友の迹復た見る所なく、其聲亦聞く所なし。目を縱にして遠く望めども見えず、彼我遠く相隔つるが如し。乃ち南望して淚を濺ぎ、北行して長林を過ぐれば、風雲鳥獸一として悲を添ふるの料たらざるはなし。因つて故鄕の母妻を思ひ、益〻別離の感を深からしむ。乃ち佇立して歎き、寤寐に淚を流す。既に晉に仕ふれば、又歸志を抱くを得ず。他鄕に辛苦するの情豈自ら堪ふる所ならんや。

【七】眇。遠視の貌。
【八】緬然。遠き貌。
【九】玄渚。江中の洲渚。
【一〇】修薄。草木の叢生するを薄といふ。修は長なり。
【一一】油雲。油然として起る雲。高岑は高山。
【一二】亹亹。走る貌。
【一三】嚶嚶。鳥の聲。
【一四】堂室。母及び妻。
【一五】愾。一本慨に作る。
【一六】寤寐。れてもさめても。

(一七)羈旅して遠く游宦し、身を(一八)承華の側に託す。劒を撫して(一九)銅輦に遵ひ、(二〇)纓を振へて祗肅を盡す。歳月一に何ぞ易る、寒暑忽ち已に革まる。載ち離れて悲心多く、物に感じて情(二一)悽惻す。慷慨して安愈を遺れ、永歎して餐食を廢す。樂を思ふも樂誘き難く、曰に歸らんとするも歸ること未だ克はず。憂苦して何をか爲さんと欲する、(二二)纏緜たり胷と臆と。仰いで霄を陵ぐの鳥を瞻、爾の歸飛の翼を羨む。

【大意】われ洛陽に在りて仕官し、常に太子に侍して職責を慎む。歳月流轉すること早く、鄉を離れて年歳を經、物候の變に感じて心を傷ましめ、餐食を廢するに至り、樂を思ふも樂來らず、歸らんと欲するも歸る能はず、憂苦の情常に心胸に盈つ。乃ち空を翔るの鳥を見、其翼を借り以て鄉に歸らんことを願ふや切なり。

(二)洛に赴く道中の作二首

陸士衡

(一)洛。晉都洛陽。
(二)嗚咽。悲泣なり。密親は近親の人。

【七】羈旅。行旅なり。游宦は他鄉に往きて仕官すること。
【八】承華。太子の宮門の名。士衡は晉に仕へて太子洗馬となれり。
【九】銅輦。太子の車。
【二〇】纓。冠の紐。祗肅は慎みて事ふること。
【二一】悽惻。悲傷すること。
【二二】纏緜。心にまつはること。

(三)世網我が身に嬰る。永歎して北渚に遵ひ、思を遺して(四)南津に結ぶ。行き行きて遂に已に遠く、野途曠にして人なし。山澤紛として(五)紆餘し、(六)林薄杳として(七)阡眠たり。虎は深谷の底に嘯き、雞は高樹の巔に鳴く。哀風中夜に流れ、孤獸我が前を更。悲情物に觸れて感じ、沈思鬱として(八)纏緜す。佇立して故鄉を望み、影を顧みて(九)悽として自ら憐む。

【大意】われ涙を飲んで近親に別れ、長途に向つて去らんとすれば、近親則ち問ふ足下何に往かんとするやと。因つて官事に繫がれて洛陽に往く由を答ふ。是に於て身は北に向つて去れども、思は永く南津に留まる。曠野無人の境を進み行けば、山澤紛然として曲折し、叢林青色を帶び、虎嘯き雞鳴き、悲風起り孤獸走る。之を見て悲哀の情に堪へず。佇立して故鄉を望むこと屢々なり。

遠遊して山川を越ゆれば、山川修うして且つ廣し。策を振げて(一〇)崇丘に陟り、轡を(一一)案じて(一二)平莽に遵ふ。夕に息ひ影を抱いて寐ね、朝に徂き思を銜んで往く。轡を頓めて(一三)嵩巖に倚り、側に悲風の響を聽く。清露素輝を墜し、明月一に何ぞ朗

【三】世網。官事に喩ふ。
【四】南津。江南の渡津、別處なり。
【五】紆餘。屈曲なり。
【六】林薄。草木叢生する薄といふ。杳は遙なり。
【七】阡眠。原野の色なり。
【八】纏緜。心にまつはること。
【九】悽。悲なり。
【一〇】崇丘。高山なり。
【一一】案。ゆるむること。漢書に「轡を案じて徐行す」とあり。
【一二】平莽。草野なり。
【一三】嵩巖。高山なり。

なる。几を撫して寐ぬる能はず、衣を振ひて獨り長く想ふ。

【大意】幾度か山川を越え、或は高山に陟り、或は平野を涉り、夕には孤影蕭然として寐ね、朝には感慨を抱いて獨り行く。馬を留めて高山に倚れば、悲風の聲を聞き、明月を仰いで露色を見ては望鄉の嘆を發す。中夜眠る能はず、起つて徘徊して沈思す。

吳王の(一)郎中たりし時(二)梁陳に從ひし作　陸士衡

在昔(三)嘉運を蒙り、迹を矯げて(四)崇賢に入り、翼を(五)鳴鳳の條に假り、足を(六)升龍の淵に濯ぐ。(七)玄冕醜士なく、(八)冶服我をして妍しからしむ。輕劒(九)擊厲を拂ひ、(一〇)長纓麗且つ鮮なり。誰か謂ふ事に伏すること淺しと。(一一)契闊して三年を踰ゆ。薄か言に(一二)後命を肅み、服を改めて藩臣に就く。夙に駕して(一三)清軌を尋ね、遠く游んで梁陳を越ゆ。物に感じて遠念多く、慷慨して(一四)古人を懷ふ。

【一】郎中。官名、郎中令なり。
【二】梁陳。二國の名。
【三】嘉運。好運なり。
【四】崇賢。太子の宮門の名。太子洗馬となりしことをいふ。
【五】鳴鳳。太子に喩ふ。
【六】升龍。淵にのぼる龍。太子に喩ふ。
【七】玄冕。黑冠なり、周禮に「大夫は玄冕す」とあり。
【八】冶服。美服なり。
【九】擊厲。擊は大帶、厲は帶の垂。
【一〇】長纓。纓は冠の紐。
【一一】契闊。勤苦なり。
【一二】後命。天子の後命、吳王の郎中令となりしこと。
【一三】清軌。軌は道なり。
【一四】古人。漢の時、梁の孝王に事へたる枚皐、司馬相如等をいふ。

【大意】嘗て好運に遭ひ太子に事へて洗馬たり。既に玄冕を服すれば、醜惡の人なし。況んや衣服鮮美なるを以て、益〻我をして妍美ならしむ。長劒を佩びて鞶帶を垂れ、長纓亦鮮麗なり。かくて太子に事ふること既に三年を過ぎたり。時に天子の命あり、我をして吳王の郎中令たらしむ。卽ち命を敬んで任に赴き、梁陳二國を過ぐ。因つて我が吳王に事ふるに感じ、遠く古人を念ふ。

始めて鎭軍參軍と作り、(一)曲阿を經し作　陶淵明

(二)弱齡事外に寄せ、懷を委ねて琴書に在り。(三)晏(四)褐を被りて自得を欣び、屢〻空きも常に如たり。時來りて苟に宜しく會ふべし。轡を宛ねて(五)通衢に憩ふ。策を投じて晨旅を命じ、暫く園田と疎なり。(七)眇眇として孤舟逝き、(八)緜緜として歸思紆る。我が行豈遙ならざらんや、登降すること千餘里。日は(九)修塗の異に倦み、心は山澤の居を念ふ。雲を望んで高鳥に慙ぢ、水に臨ん

【一】曲阿。縣名。
【二】陶淵明。名は潛、字は淵明、或は云く字は元亮、晉の潯陽柴桑の人、少くして高趣あり、鎭軍建威參軍となり、後彭澤の令となり、縣に在ること八十餘日にして解き去る。
【三】弱齡。少年なり。
【四】褐。短衣なり。自得は得意なり。
【五】晏如。境遇に安んずる貌。
【六】通衢。大道なり。仕途に喩ふ。
【七】眇眇。遠行の貌。
【八】緜緜。絕えざる貌。
【九】修塗。長途なり。

で遊魚に愧づ。(一〇)眞想初より衿に在り、誰か謂ふ(一一)形迹拘るると。聊か且つ(一二)化の遷るに憑り、終に(一三)班生の廬に反らん。

【大意】我れ少年の時、心を事物の外に寄せ、琴書を以て自ら慰め、身に短褐を被り、家貧にして資なしと雖も、心欣然として常に自得せり。今時運の到來に遇ひ、仕へて參軍となり、杖を棄て馬に跨りて、暫く田園と離るるに至りぬ。孤舟に乘り歸思を抱きて曲阿千里の山川を越え行けば、目は長途の異觀に倦み、心は舊居を念ふこと益〻切なり。因つて魚鳥を見れば、皆其性を得て樂めるに、己獨り其性に違へるに愧づ。我れ本より隱遁の志あり、然も今既に名利の拘束を受く。願くは時運の遷移に憑り、班固と同じく上仁の廬る所に歸り居らんことを。

【一〇】眞想。名利に惑はぬ本性、衿は心なり。
【一一】形迹。行爲といふが如し。
【一二】化。時の運行。
【一三】班生。漢の班固なり。其幽通賦に「終に己を保ちて則を貽し、上仁の廬する所に里る」とあり。

(一)辛丑の歳七月、假に赴き、(二)江陵に還りて、夜塗口を行く作

陶淵明

閑居(三)三十載、遂に

【一】辛丑。晉の隆安五年。假に赴くとは休暇を得て鄉里に〜歸りしなり。

(四)塵事と冥なり。詩書(五)宿好を敦うし、林園世情なし。如何ぞ此を舍てて去り、遙遙として(六)西荆に至る。棧を(七)親月の船に叩き、流に臨んで(八)友生に別る。涼風起りて將に夕ならんとし、(九)夜景湛として虛明なり。昭昭として(一〇)天宇闊く、(一一)皛皛として川上平なり。(一二)役を懷ひて寐ぬるに遑あらず、中宵尙ほ孤り征く。(一三)商歌吾が事にあらず、(一四)依依として耦耕に在り。冠を投じて(一五)舊墟に旋り、好爵に縈はれず。(一六)眞を衡茅の下に養ひ、庶はくは善を以て自ら名づけん。

【大意】われ閑居すること三十年、全く世俗の事に關せず、詩書を讀み林園に住して自ら樂みしに、自ら此樂を棄てて、荆州に向ふは、果して何の心ぞや。自ら解する能はざる所なり。今塗口を過ぎ棧を叩きて月を賞し、流に臨んで友人と別るれば、涼風起りて月光澄み、天闊くして川流

【一】江陵。郡名、休暇滿ちて江陵に還るなり。塗口は江口の名。
【二】三十載。三十年なり。
【四】塵事。世事なり。
【五】宿好。舊來の嗜好。
【六】西荆。時に帝都東に在り、故に荆州を西荆といふ。江陵は卽ち荆州府治。
【七】親月。月を愛するなり。
【八】友生。朋友なり。
【九】夜景。月光なり。湛は澄める貌。
【一〇】天宇。天空なり。
【一一】皛。明なる貌。
【一二】役。職務なり。
【一三】商歌。寧戚の飯牛歌をいふ。人に知られんことを求むる歌なり。
【一四】依依。深く慕ふ貌。耦耕は論語に「長沮桀溺耦して耕す」とあるにより、隱遁をいふ。
【一五】舊墟。故鄉なり。
【一六】眞。天眞の本性。衡茅は衡門茅屋なり。

静なり。職責を思へば寐ぬるに遑なし。因つて中夜獨り道を行く。商歌して知遇を求むるは、吾が願にあらず。退耕は吾が慕ふ所なり。願くは官を辭して故郷に歸り、官爵の拘束する所とならず、茅屋の下に天眞の性を養ひ、善人を以て稱せられんことを。

永初三年七月十六日(一)郡に之かんとして初めて都を發す

謝靈運

(二)述職して闗暑を期し、棹を理むれば(三)金素變ず。秋岸夕陰澄み、(四)火旻朝露團なり。辛苦誰か情をなさん、(五)遊子頽暮に値ふ。似たるを愛して(六)莊昔を念ひ、久しく敬して(七)曾故を存す。如何ぞ(八)懷土の心、(九)此を持して遠度を謝せん。(一〇)李牧長袖を愧ぢ、(一一)郤克躑歩を慙づ。(一二)良時遺てられず、醜狀惡を成さず。曰に余亦(一三)支離なるも、方に依るは早く慕ふあり。生れて(一四)休明の世に幸し、親しく(一五)英達の顧を蒙り、空しく(一六)趙氏の璧を班ね、徒に(一七)魏王の瓠に乖く。從來漸く(一八)二紀、始めて(一九)歸路に傍づくを得たり。將に山海の迹を窮め、永く(二〇)賞心の悟を絶たんとす。

【大意】我が天子に朝して述職するや、期晩夏に在りしも、舟楫を整へて都を發せんとすれば、已に秋となり、岸渚秋景澄み、秋天白露結ぶ。辛苦の情既に堪へ難し。況んや身又衰老に及べるをや。物を見て戀慕の情を增し、似たるを愛すること莊子の疇昔を念ふが如く、久うして愈〻敬すること、曾子の故舊を存問するが如し。願くは此の懷土の心を以て、遠遊を中止せんことを。昔李牧、郤克竝

【一】郡。永嘉郡なり、永初三年五月、宋の武帝朋じ、廢帝位に卽き、靈運を出して永嘉郡守となす。都は宋都建康なり。

【二】述職。諸侯天子に朝して其職事を述ぶるをいふ。闗暑は夏の末、暑氣闗なるをいふ。

【三】金素。秋は五行に於て金となし白となす、故に金素といふ。

【四】火旻。秋天をいふ。

【五】遊子。旅客なり、靈運自ら謂ふ。頽暮は衰老なり。

【六】莊。莊子に「越の流人國を去ること旬月、嘗て國中に見し所を見て喜ぶ、期年に及び、人に似たる者を見て喜ぶ」とあり。

【七】曾。曾子なり。故は故舊なり。

【八】懷土。故土を懷ふこと。

【九】此。懷土の心なり。

【一〇】李牧。趙將なり。戰國策

に「李牧至る、趙王韓倉をして之を數めしめて曰く、將軍戰勝つ、王將軍を觴す、將軍壽を前に爲し上首を捭つは死に當すと、李牧曰く、身大に臂短く、地に及ぶ能はず、起居不敬なり、恐くは死罪を前に獲ん、故に工人をして木杖を爲り以て手に接せしむ、上若し信ぜずば請ふ之を視よと」とあり。

【一一】郤克。春秋晉の大夫なり、左傳に「郤克をして會を齊に徵せしむ、頃公婦人を帷して之を觀しむ、郤克登る、婦人房に笑ふ」とあり、杜預註に「跛して階を登る、故に笑ふなり」とあり。躑歩は舞ふが如く歩むこと。

【一二】良時。明時なり。

【一三】支離。毀瘁なり。

【一四】休明。明盛の時をいふ。

【一五】英達。賢明の人、盧陵王を謂ふ。

【一六】趙氏璧。古の寶玉の名。

【一七】魏王の瓠。莊子に「惠子、莊子に謂つて曰く、魏王我に大瓠の種を貽る、我れ之を樹ゑて成り、五石を實る、以て水漿を盛れば其堅自ら擧ぐる能はず、之を剖きて以て瓢を爲る、瓠落として容るる所なし云云」とあり。

【一八】二紀。十二年を一紀といふ。

【一九】歸路。故郷始寧縣に歸る路。

【二〇】賞心。親友なり、悟は晤に同じ。對談なり。

に不具癈疾の人なり。然も明時に於ては決して之を遺棄せず、醜貌も身の害とならざりき。我が身亦既に毀瘁すと雖も、常に道に依りて形を養はんことを願へり。既に生れて聖明の世に遇ひ、嘗て廬陵王の拔擢を蒙りしも、徒に珍重せられて用に施すこと能はず。從仕より以來既に二十四年を經、茲に永嘉太守に任せられ、始めて歸家の路に近づくを得たり。願くは山水を尋ねて其迹を窮め盡し、永く親友と交遊を絕たんことを。

(一)始寧の墅に過る

謝靈運

(二)束髮耿介を懷き、物を逐ひて遂に推し遷る。志に違ふこと昨の如きに似たるも、(三)二紀にして茲年に及ぶ。(四)緇磷清曠を謝し、(五)疲薾貞堅に慙づ。(六)拙疾相倚薄し、還つて(七)靜者の便を得たり。(八)竹を剖いて滄海に守たり、帆を枉げて舊山に過る。山行(九)登頓を窮め、水涉(一〇)洄沿を盡す。巖峭うして嶺(一一)稠疊し、洲縈りて渚(一二)連緜たり。白雲幽石を抱き、綠篠清漣に媚ぶ。宇を葺いて廻江に臨み、(一三)觀を築いて曾巔に基す。手を揮ひて(一四)鄉曲に告ぐ。(一五)三載歸旋を期す。且く爲に(一六)枌榿を樹るよ。(一七)願言に孤かしむるなかれと。

【一】始寧。縣名、靈運の父祖並に此に葬る。故宅及び別墅あり。
【二】束髮。結髮に同じ、元服すること。耿介は節操。
【三】二紀。十二年を一紀といふ。
【四】緇磷。白き物の黑くなり、堅き物の磨り耗さるること。
【五】疲薾。疲困なり。
【六】拙疾。拙官と疾病。倚薄は身に迫ること。
【七】靜者。論語に「智者は動き、仁者は靜なり」とあり。仁德を脩むる便。
【八】竹。漢書に「郡守の輿に竹使符を作る」とあり、郡守には竹符を與へて信となすなり。滄海は海なり、永嘉郡は海邊にあり。

【九】登頓。登降なり。
【一〇】洄沿。水流を上下すること。
【一一】稠疊。重疊なり。
【一二】連緜。絕えざる貌。
【一三】觀。樓臺なり。曾巔は高山の頂。
【一四】鄉曲。鄉里なり。
【一五】三載。三年なり。歸旋は歸鄉なり。
【一六】枌榿。木の名。棺を作る材となる。
【一七】願言。願ふ所の言。

【大意】此詩は永嘉郡に赴任する時、墅に過りて作れるなり。我もと耿介の志を抱きしも、世事に隨ひて俗と推し遷り、誤つて官に就きしは、昨日の如く思はるるも、已に二十四年を經、壯志消磨し官途に疲るるは、實に清曠貞堅の士に慚づる所なり。今や官拙に體病み、少しく仁德を養ふの便を得、因つて永嘉郡守に任ぜられ、舟路を枉げて此墅に過るを得たり。乃ち山嶺を登降し、川流を上下して、其景を賞すれば、巖聳え洲縈り、白雲幽石を抱き、綠竹波際に茂り、その勝誠に掬すべし。是に於て江に臨みて宇を構へ、山頂に就いて樓を築く。因つて鄉人に告げて曰く、吾れ三年の後將に官を退いて歸らんとす。願くは吾が爲に枌榿を樹るよ。吾が言に違ふなかれと。（枌榿を樹うるは老死して出でざるの意を示すなり）

謝靈運

(一)富春の渚

宵(二)漁浦の潭を濟り、旦に富春の郭に及ぶ。(三)定山雲霧緬に、(四)赤亭淹薄なし。流に遡りて(五)驚急に觸れ、圻に臨んで(六)參錯を阻つ。亮に(七)伯昏の分に乏しく、險は(八)呂梁の壑に過ぐ。(九)洊至は便習に宜しく、兼山は止託を貴ぶ。平生(一〇)幽期を協へんとするも、(一一)淪躓微弱に困む。久しく(一二)干祿の請を露し、始めて遠遊の諾を果す。宿心漸く(一三)申寫し、萬事俱に(一四)零落す。懷抱既に(一五)昭曠、外物徒に(一六)龍蠖。

【大意】夜漁浦を濟りて翌朝富春の城下に達す。定山は遠く雲霧の中に聳え、赤亭は水急にして停泊すべからず。流に遡りては驚濤急浪に懼れ、岸に臨みては巖石の交錯に阻てらる。我れ既に伯

【一】富春。郡の名、錢塘江上にあり。
【二】漁浦。浦の名、富春渚の東三十里にあり。
【三】定山。山の名。
【四】赤亭。定山の東十餘里にあり。淹薄は停留なり。薄は泊と同じ。
【五】驚急。驚濤急浪なり。
【六】參錯。巖石の交錯。
【七】伯昏。險に臨んで懼れざりし人、詳に列子に出づ。分は節といふが如し。
【八】呂梁。急流の名、列子に出づ。
【九】洊至。水の相仍りて至ること。
【一〇】幽期。幽隱の志。
【一一】淪躓。沈淪困頓なり。
【一二】干祿。俸祿を求むること。仕官なり。
【一三】申寫。志を遂ぐること。
【一四】零落。棄捨といふが如し。
【一五】昭曠。明遠なり。
【一六】龍蠖。易經に「尺蠖の屈するは以て伸びんことを求むるなり、龍蛇の蟄するは以て身を存するなり」とあり。

昏の志節なきに、經る所の險は呂梁に過ぎたり。然れども險阻を經るは水に便習するに宜しく、危山に遇ひては止りて往かざるを貴ぶを知る。平生幽隱の志を抱きしも、常に沈淪困頓して遂ぐる能はず。久しく干祿の情を絶ちしが、今始めて其志を果すを得、因つて萬事を一擲して復た顧慮する所なし。乃ち心胸明遠にして世間の萬事を視ること、龍蠖の屈伸を見るが如し。

(二)七里瀨

(一)羈心秋晨に積り、晨に積りて遊眺を展ぶ。孤客(二)逝湍を傷み、(三)徒旅奔峭に苦む。石淺くして水(四)潺湲たり、日落ちて山照曜す。荒林紛として(五)沃若たり、哀禽相叫嘯す。物に遭ひて(七)遷斥を悼み、(八)期を存して要妙を得。既に(九)上皇の心を秉る。豈末代の誚を屑みんや。目に(一〇)嚴子の瀨を覩、(一一)任公の鉤を屬せんことを

【一】七里瀨。水沙上を流走する瀨といふ。桐廬縣に七里瀨あり、其長さ七里に亙る。此瀨下數里に嚴陵瀨あり。
【二】羈心。客心なり。
【三】逝湍。急流なり。
【四】徒旅。旅客なり。奔峭は崩落せる岸。
【五】潺湲。水の流るる貌。
【六】沃若。茂盛の貌。
【七】遷斥。貶謫なり。
【八】期。幽隱の期。要妙は善道といふが如し。
【九】上皇。莊子に「下土を監照し天下之を載す、此を上皇といふ」とあり。
【一〇】嚴子。後漢の嚴光、字は子陵、光武帝諫大夫となさんとす、屈せず、富春山に退耕す、後人其釣處を名づけて嚴陵瀨となす。
【一一】任公。鉤はツリバリ、任公子は有道の人なり、大鉤巨綸を以て東海に釣りて大魚を

想ふ。誰か謂ふ古今殊なりと。異代調を同うすべし。

得、離ちて之を腊にす、淵河より以東、蒼梧より以北、皆此魚に饜く、詳に莊子に見ゆ。蓋し道を以て人を養ふに喩ふ。

【大意】客心秋曉に積る。因つて遊眺して之を慰めんとすれば、急湍峻岸却つて孤客の心を傷ましむ。往きて七里瀨を過ぐれば、水石上を走りて潺湲たり、日落ちて山に映じ、林茂り鳥鳴く。我れ此景を覩て、己の貶謫を悼み、幽隱を期して善道に入らんことを思ふ。ああ我れ既に上皇道德の心を持せり、豈末代人の譏を顧みんや。進んで嚴陵瀨を經るに及び、幽隱して道を以て人を養はんことを想ふこと愈〻切なり。古今時を異にすと謂ふなかれ、我れ能く嚴子陵、任公子と隱遁の調を同うするを得べし。

江中の(一)孤嶼に登る

江南歷覽に倦み、江北曠に(二)周旋す。(三)雜を懷ひて道轉た迥く、異を尋ねて(四)景延からず。流を亂りて(五)正絕に趨けば、孤嶼(六)中川に媚ぶ。

【一】孤嶼。溫州の南四里、永嘉江中に在り。
【二】周旋。周遊なり。
【三】雜。一本に新に作る、是なり。
【四】景。日景なり、日の短きを覺えし意。
【五】正絕。兩岸より絕えて續かざる處、卽ち孤嶼。
【六】中川。川の中央、なり。

謝靈運

雲日相輝映し、空水共に澄鮮。靈を表するも(七)物賞するなく、(八)眞を蘊めども誰か傳ふるをなさん。(九)崑山の姿を想像して、(一〇)區中の緣に緬邈たり。始めて信ず(一一)安期の術、養生の年を盡すを得るを。

【七】物。人なり。
【八】眞。仙人なり。
【九】崑山。崑崙山なり。此山に仙人西王母あり。
【一〇】區中の緣。世上の塵緣。緬邈は遙に遠ざかる意。
【一一】安期。古の仙人の名。

【大意】我れ既に江南を歷遊して其景に倦み、更に遠く江北を周遊し、新異の地を尋ぬれば、道愈〻遠くして日の暮れ易きを怨む。永嘉江を渡り、正絕の處に到れば、孤嶼中流に立てり。之に登れば雲日相映じ、空水共に澄み、其景愛すべし。神靈を表すこと此の如くなるも、世人之を賞するなく、中に仙人を藏むるも、之を傳述する者なし。余今此に遊び、崑崙山の神仙を想像し、遠く世上の俗緣を離れたるが如きを覺えぬ。是に於て彼の安期生の長生術に由れば、必ず養生の結果天年を盡すを得るを信じぬ。

初めて(二)郡を去る

謝靈運

(二)彭薛裁に恥を知り、【一】郡。永嘉郡なり。靈運永〻嘉郡守たること二年、疾と稱して職を去り。始寧に歸る。

㊂貢公未だ榮を遺れず。或は貪競に優るべきも、豈㊃達生と稱するに足らんや。伊れ予㊄微尚を秉り、拙訥㊅浮名を謝す。㊆廬園栖巖に當て、卑位躬耕に代ふ。己を顧みて自ら許すと雖も、㊇心迹猶ほ未だ幷せず。㊈庸なくして周任を妨げ、疾ありて㊉長卿に像たり。㊋恭しく古人の意を承け、㊌促裝して柴荊に返る。㊍絲を牽いて元興に及び、㊎龜を解いて景平に在り。心に負くこと㊏二十載、今に於て㊐將迎を廢す。棹を理めて還期を遇にし、渚に遵ひて

【一】彭薛。彭宣、漢の哀帝の時、大司空となる。王莽政を秉り權を專にするや、上書して骸骨を乞ふ。薛廣德、御史大夫となり、亦骸骨を乞ふ。

【二】貢公。貢禹、漢の宣帝の時、河南令となり、職事を以て府官の責むる所となり、遂に官を去る、元帝の位に卽くや。徵されて諫大夫となり光祿大夫に遷る、上書して生きて鄕里に歸らんことを願ふ。然も宦情の糜する所となり、御史大夫となりて卒す、故に未だ榮を遺れずといふ。

【四】達生。眞理に通達せる人。

【五】微尚。己の主義好尚。

【六】浮名。實に合はざる名。

【七】廬園。郡守の官舍を指す。栖巖は棲むべき巖穴。

【八】心迹。心と行とをいふ。

【九】庸。功なり。周任は人名、論語に「周任言へるあり、曰く力を陳べて列に就く、能はざれば止む」とあり。

【一〇】長卿。漢の司馬相如、字は長卿、消渴の疾あり、閑居して仕へず。

【一一】尙子。尙長、字は子平、隱遯して仕へず、子の爲に嫁娶し畢り、家事を勑めて之を斷ち、復た相關するなし。

【一二】薄遊。薄祿を得て仕宦すること。郡生は郡曼容なり、志を養ひて自ら脩め、官となり肯て六百石に過ぎず、輒ち自ら免じ去る。

【一三】促裝。いそぎて旅裝を整ふること。柴荊は柴門荊扉、卽ち己の家。

【一四】絲を牽く。初めて仕ふるをいふ。元興は晉の安帝の年號。

【一五】龜を解く。龜印を解きて官を去ること。景平は宋の廢帝の年號。

【一六】二十載。二十年なり。

【一七】將迎。送迎なり。

㈠㈧修坰を騖す。谿を遡りて終に水涉し、嶺に登りて始めて山行す。野曠うして沙岸淨く、天高くして秋月明なり。石に憩ひて飛泉を挹み、林を攀ぢて㈠㈨落英を搴る。戰勝ちて㈡㈩臞者肥え、㈡㈠流に監みるを止めて停に歸す。是の㈡㈡羲唐の化に卽いて、我が㈡㈢擊壤の聲を獲たり。

【大意】漢の彭宣、薛廣德は僅に恥を知りて官を辭したるも、貢禹の如きは未だ榮華を遺れたりといふべからず。この三者は世の名利を競貪する者に比すれば、稍優れりと雖も、未だ以て達識の士と謂ふに足らざるなり。我れ素より幽棲の志あり、故に常に拙訥を守りて、名の實に過ぐるを恥ぢ、官舍を以て巖穴に當て微祿を以て農耕に代へ、以て永嘉に郡守たり。既に自ら認めて正しとなせども、心は栖隱に在り身は官に在るを以て、迹心と一致せりと爲すべからず。既に無能は周任の言に違ひ、疾を抱くは長卿に像、子の爲に嫁娶を終れるは尙子と同じく、薄官は邴生に似たり。故に此の四者に倣ひて官を退き、旅裝を整へて鄕に歸るなり。回想すれば、始めて官に元興に就き、職を景平に辭す。其間正に二十年なり。今官を退き、て上官を送迎するの禮を廢するを得たり。因つて舟を整へて歸路に就き、長途を涉り、溪山を越

【一八】修坰。長野なり。

【一九】落英。落花なり。

【二〇】臞者。痩せたること。

【二一】流に云云。文子に「流潦に監るなくして止水に監るは、其の心を保ちて外に蕩せざるを以てなり」とあり。停は定なり。卽ち止水なり。

【二二】羲唐。伏羲及び唐堯なり、共に太古の帝。

【二三】擊壤。堯の時天下無事にして老人擊壤の歌を作れり。

え、泉を酌み花を摘みて自ら樂む。嘗て心に幽棲の道を欲し、亦富貴の道を欲し、二者胸中に戰ひしが、今幽棲の道勝てり。故に嘗て瘦せたるも今肥えたり。又止水に監みて止足の道を悟れり。是に於てか伏羲唐堯の化に浴し、鼓腹擊壤の民となるを得たり。

初めて石首城を發す

謝靈運

(一)白珪は尙ほ磨くべし。(二)斯言は緇をなし易し。(三)中孚の爻を抱くと雖も、猶ほ(四)貝錦の詩を勞す。寸心若し亮ならずんば、(五)微命察するに絲の如し。(六)日月光景を垂れ、(七)貸を成して遂に茲を兼ねしむ。出宿して京畿に薄り、晨に裝ひて(八)曾颸を搏つ。重ねて平生の別を經、再び朋知と辭す。故山日に已に遠く、風波豈還時あらんや。(九)迢迢たる萬里の帆、(一〇)茫茫として終に何にか之く。游んでは當に(一一)羅浮に行くべく、息ひては必ず(一二)廬霍を期す。海を越えて(一三)三山を陵ぎ、湘に游んで(一四)九嶷を歷。(一五)聖を欽ふこと旦暮の若く、(一六)賢を懷ひて亦悽其す。(一七)皎皎たる明發の心、歲寒の爲に欺かれず。

【一】石首城。石頭城なり。建康の西界、臨江城なり。ここに京師といふ。謝靈運疾を謝して東に歸る。會稽太守孟顗乃ち其異志を表す。靈運馳せて京師に往き。闕に詣りて上表す、太祖其誣を知れども東に歸らしむるを欲せず、以て臨川内史となす。

【二】白珪。白玉なり。詩經に「白珪の玷けたるは尙ほ磨くべし、斯の言の玷けたるは爲むべからず」とあり。

【三】斯言。惡言をいふ。緇は黑色、汙染をいふ。

【四】中孚。忠信なり。易經に「中孚以て貞に利し、乃ち天に應ず」とあり。

【五】貝錦。詩經に「萋たり菲たり、是の貝錦を成す」とあり。郯玄曰く「讒人集りて已が過を作し以て罪を成すは、猶ほ女功の彩色を集めて以て錦文を成すが如し」と。

【六】微命。微弱なる生命。

【七】日月。天子に喩ふ。

【八】貸。恩惠なり。茲とは内史を指す。

【九】曾颸。高風なり。

【一〇】迢迢。遠き貌。

【大意】玉の缺けたるは磨きて之を滅すを得れども、惡言の身に及ぶは汙染を爲し易く、之を去ると極めて難し。故に我れ忠信の德を抱けるも、讒人ありて巧に此罪を構成せり。我が心若し人の爲に信明せられずんば、身命の危きこと絲の將に絶えんとするが如し。幸にして天子恩惠を垂れ、我に生命を貸し、更に内史の官を兼ぬるを得しむ。因つて京畿を出で曉風を冒して往き、重ねて朋友と別れ波に隨つて去る。一たび臨川郡に至らば、豈復た故山に歸るを得んや。江水萬里之く所を知らず。羅浮廬霍の諸山に游息すべく、海を越えては三山に登り、湘江を渡りては九嶷山を歷べく、旦暮に聖賢を欽慕して、心を傷ましむべし。然れども吾が淸明の心は松柏と節操を同じくし、歲寒の爲に欺損することなかるべし。(讒人に遇ふも己を欺辱せざるに喩ふ。)

【一】茫茫。廣大の貌。

【二】羅浮。二山の名。

【三】廬霍。二山の名。

【四】三山。蓬萊、方丈、瀛洲の三神山。

【五】九嶷。山の名。舜ここに葬る。

【六】聖。舜を指す。

【七】賢。屈原を指す、屈原は湘江に沈んで死す。悽其は心を痛ましむること。

【八】皎皎。明かなる貌。明發は早曉なり。

(一)道路にて山中を憶ふ

謝靈運

(二)采菱調急なり易く、(三)江南歌緩ならず。楚人心昔絶えぬ、(四)越客腸今斷ゆ。斷絶念を殊にすと雖も、俱に(五)歸慮の款をなす。鄉を存して爾が思積り、山を憶ひて我(六)憤懣す。(七)栖息の時を追尋すれば、偃臥して縱誕に任せ、性を得て外求にあらず、自ら已めて誰が爲にか纂がん。秋夕の長きを怨みず、恆に夏日の短きに苦む。流に濯げば浮湍激し、陰に息ひて(八)密竿に倚る。故を懷ひて新歡叵く、悲を含んで(九)春暝を忘る。(一〇)悽悽たる明月の吹、(一一)惻惻たる廣陵の散。(一二)殷勤に危柱に訴へ、慷慨して(一三)促管に命ず。

【大意】我れ臨川に赴かんとする道中、採菱江南、楚越の歌曲、或は急に或は緩なるを聞き、坐に斷腸の思をなす。昔楚人亦此聲を聞きて心魂を摧きしといふ。楚人と我れと念を異にすと雖も、鄉

【一】道路。臨川郡に往く途中にて始寧の山中を憶ふなり。
【二】采菱。楚人の歌曲の名。
【三】江南。楚越の歌曲の名。
【四】越客。靈運自ら謂ふ。
【五】歸慮。鄉里に歸りたき思。
【六】憤懣。怨嘆なり。
【七】栖息。隱居なり。
【八】密竿。密生せる竹。
【九】春暝。春暖なり。
【一〇】悽悽。哀聲なり。明月吹は琴曲の名。
【一一】惻惻。悲傷なり。廣陵散は琴曲の名。
【一二】殷勤。ねんごろなる貌。危柱は琴をいふ。
【一三】保管。急管なり。笛をいふ。

山を懷ふの誠は則ち一なり。翻つて幽居の時を追想すれば、一室に高臥して縱恣傲誕し、靜を好むの本性を全うし得て外に求めず、足るを取りて自ら止め、人の爲に繼がず。秋夜樂むべし。故に其長きを怨みず。夏時遊ぶべし。故に其日の短きを苦む。流に濯げば湍水激し、密竹に倚りて涼を納る。今や則ち然らず。故山を懷ひて新歡をなすを得ず、常に悲を含んで春暖を忘る。僅に心を琴笛に託し、悲哀の韻を發するのみ。

(二)彭蠡湖口に入りて作る

謝靈運

客游して水宿に倦む。風潮具に論じ難し。洲島驟〻廻合し、(一)圻岸屢〻崩奔す。月に乘じて(二)哀狖を聽き、露を浥めば(四)芳蓀馥し。春晩れて綠野秀で、巖高うして白雲屯る。千念日夜に集り、萬感朝昏に盈つ。崖を攀ぢて(五)石鏡に照し、葉を牽いて(六)松門に入る。(七)三江事多く往き、(八)九派理空しく存す。靈物珍怪を丞み、異人精魂を祕す。(九)金膏明光を滅し、(一〇)水碧流溫を綴む。

【一】彭蠡。湖の名。臨川郡に至る途中に在り。
【二】圻岸。川岸なり。
【三】哀狖。悲しき猿聲。
【四】芳蓀。香草の名。
【五】石鏡。山の名。
【六】松門。澗の名。
【七】三江。江流なり。
【八】九派。江水の分派。
【九】金膏。仙藥なり。
【一〇】水碧。水玉なり。流溫は溫潤なり。綴は一本に輟に作る。
【一一】千里。千里の曲。黃鵠一たび遠別し、千里顧みて徘徊す云云

徒に(一)千里の曲を作せば、(二)絃絶えて念彌〻敦し。

【大意】われ日日水路を歴て風潮の變述べ盡し難し。洲島の廻合し、岸崖の崩壞するを見、月下に猿聲を聞き、露を挹んで芳香を嗅ぎ、綠野の秀色、巖上の屯雲を見れば我をして千念萬感往來して絶えざらしむ。山に登り澗を渉り、三江九派已に之を經て、空しく其狀を心に留むるのみ。山中に靈怪神異の人多きも、皆其精魂を祕して見るべからず。江中に金膏水玉あれども、亦皆明光と溫潤とを滅して見るべからず。因つて憂を消さんとして千里の曲を奏すれば、曲終りて別念いよいよ厚し。

【二】絃絶。曲の終るをいふ。

(一)華子崗に入る。是れ(二)麻源の第三谷なり　謝靈運

(三)南州實に炎德あり、(四)桂樹寒山を陵ぐ。(五)銅陵碧澗に映じ、(六)石磴紅泉瀉ぐ。既に隱淪の客を枉げ、亦(七)肥遁の賢を棲ましむ。險徑測度するなく、天路(八)術阡にあらず。遂に羣峯の首に登れば、(九)邈たること雲煙に升るが若し。(一〇)羽人絶えて髣髴、(一一)丹丘徒に(一二)空筌。(一三)圖牒復た摩滅し、(一四)碑版誰か聞き傳へん。百世の後を辨ずるなし。安んぞ(一五)千載の前を知らん。且く(一六)獨往の意を申べ、月に乘じて(一七)潺溪を弄す。恆に(一八)俄頃の用に充つ。豈(一九)古今の爲に然らんや。

【一】華子崗。華子期は商山四皓の一たる角里先生の弟子にして、此山頂に居る、故に名づく。
【二】麻源。山の名。
【三】南州。南方の國。
【四】桂樹。木の名。
【五】銅陵。山の名。

【大意】南國は炎熱にして桂樹冬に榮え、銅陵の山碧澗と相映じ、石磴の間に紅泉湧く。山中に嘗て隱居の人あり。山徑險高にして測るべからず、天路の道なきが如し。我れ羣峯の頂に登れば、高遠にして雲煙に升るが如く、仙人華子期復た見るべからず。空しく其跡を留むるのみ。仙書亦亡滅して傳はらず。夫れ百世の後知るべからず。千歲の前豈知るべけんや。我唯無爲の心を以て川流を弄し、暫時の樂に充つ。久長の計をなすにあらざるなり。

【一】華子崗。華子期は商山四皓の一たる角里先生の弟子にして、此山頂に居る、故に名づく。
【二】麻源。山の名。
【三】南州。南方の國。
【四】桂樹。木の名。
【五】銅陵。山の名。
【六】石磴。石段なり。
【七】肥遁。隱遯なり。
【八】術阡。道なり。
【九】邈。遙なる貌。
【一〇】羽人。仙人なり。髣髴は見えざること。
【一一】丹丘。仙人の居る處。楚辭に「羽人を丹丘に仰ぐ」とあり。
【一二】空筌。空しく迹を留むるのみとの意。
【一三】圖牒。仙書なり。
【一四】碑版。仙書なり。
【一五】千載。千年なり。
【一六】獨往。自然に任せて世を顧みざる心。
【一七】潺溪。水聲なり。
【一八】俄頃。暫時なり。
【一九】古今。長久といふが如し。

卷の第十四

詩戊

行旅下

北のかた(一)洛に使す

顏延年

(二)服を改めて徒旅を飭へ、路に首つて險艱を蹈む。楫を振ひて吳洲を發し、馬に秣ひて楚山に陵る。(三)梁宋の郊に出で、道(四)周鄭の間に由る。前んで(五)陽城の路に登り、日夕(六)三川を望む。在昔(七)期運輟み、(八)經始聖賢闊し。(九)伊瀍津濟絶え、臺館(一〇)尺椽なし。宮陛巢穴多く、城闕雲煙を生ず。(一一)王猷八表に升り、(一二)嗟行方に暮年。陰風(一三)涼野に振ひ、飛雲(一四)窮天に瞀し。塗に臨んで未だ引むに及ばず。置酒して慘んで言なし。

【一】洛。洛陽なり。宋書に「延之は豫章の世子の中軍行參軍たり、義熙十二年、宋の高祖北伐して宋公の授あり、府一使を遣し殊命を慶す、延之洛陽に至り、道中にて詩一首を作る、文辭藻麗なり、時に年三十二」とあり。

【二】服云云。旅裝を整ふること。徒旅は鹵簿。

【三】梁宋。魏宋の二國、河南省の東部。

【四】周鄭。二國の名、河南省の中部。

【五】陽城。縣名、汝南郡に在り。

【六】三川。河洛伊なり。河南郡に在り。

【七】期運。王者代興の期運なり。

(一五)隱惘して徒御悲み、(一六)威遲して良馬煩ふ。遊役(一七)芳時を去り、(一八)歸來屢〻徂き嘗る。(一九)蓬心既に已ぬるかな、(二〇)飛薄殊に亦然り。

【大意】旅裝を整へ險難を冒し、江を渡り山に登り、梁宋周鄭の道を經て、夕に洛陽を望めば、晉室久しく衰へて經綸の士なく、津梁宮館悉く戰亂に壞破し、狐兎の巢穴と化し、寒煙の升るを見るのみ。今や宋業八方に輝く。我乃ち之を慶せんが爲、歲寒の時に方りて洛陽に向へば、寒風飛雲天地に滿ち、徒卒悲みて馬進まず。吾が行既に芳春の時に及ばず、歸期亦本意に違ふこと多かるべし。吾れもと俗に隨ふの心あり蓬の直莚ならざるが如きも今や事已に已めり。身の飄迫すること亦蓬と相似たり、悲むべきかな。

【八】經始。國家を經綸すること。

【九】伊瀍。河南省の二水の名。津濟は渡津。

【一〇】尺椽。タルキの斷片。

【一一】王猷。王業なり。八表は八方。宋業の日に隆なるをいふ。

【一二】嗟行。宋の王業を嗟稱しつつ行くこと。暮年は冬季。

【一三】涼野。寒野なり。

【一四】窮天。窮冬の天。

【一五】隱惘。憂歎の貌。徒御は徒從。

【一六】威遲。馬行いて速ならざる貌。

【一七】芳時。春なり。

【一八】歸來云云。歸來に當りても屢本意に違へるをいふ。

【一九】蓬心。俗に隨ふ心。

【二〇】飛薄。飄迫なり。

(二)還りて梁城に至る作

顏延年

【一】還。洛陽より還るなり。

(二)眇默として軌路長し　(三)憔悴して征戍勤む。昔邁きしとき　(四)徂師に先だち、今來るとき歸軍に後る。策を振げて東路を睠み、(五)傾側して羣に及ばず。徒を息へて顧つて將に夕ならんとす。梁陳の(六)分を極望す。(七)故國喬木多く、空城寒雲凝る。(八)丘隴郛郭に塡ち、銘誌滅えて文なし。木石(九)幽闥を扃し、黍苗高墳に延ぶ。惟ふ彼の(一〇)雍門子、吁嗟す孟嘗君、愚賤同じく煙滅す。尊貴誰か獨り聞かん。曷爲れぞ久游の客たる、憂念坐に自ら殷なり。

【大意】歸路遙遠にして我れ行旅に苦む。嘗て洛陽に使する時は、北伐の軍に先だちしも、今歸るに方りて歸軍に後る。鞭を揚げて疾く歸らんとするも、道路險阻にして進んで其羣に及ぶ能はず。夕に遠く望めば、梁城に喬木多く寒雲の聚るを見る。進んで此に至れば、墳墓纍纍たるも、銘文磨滅して見るべからず、木石交横して墓門を塞ぎ、黍稷墓上に茂れり。因つて雍門周の孟嘗君の將來を嗟きたるを思ひ、貴賤賢愚皆死を同うするを嘆じぬ。況んや我れ既に久游の客となり、行路の間に苦めるをや。之を思ひて憂念殊に深し。

【一】眇默。遠き貌。軌は車跡。
【二】憔悴。憂へて瘦せ衰ふること。征戍は行き守るなり。
【四】徂師。北征する軍。
【五】傾側。道路の險阻なるをいふ。
【六】分。境界なり。
【七】故國。梁城をいふ。喬木は高樹。
【八】丘隴。墳墓なり。郛郭は郊外なり。
【九】幽闥。墓門なり。
【一〇】雍門子。雍門周、孟嘗君に見えて曰く、「臣竊に悲む、千秋萬歲の後、墳墓に荆棘を生じ、行人之を見て、孟嘗君の尊貴乃ち是の如きかと曰はんことを」と。

(一)始安郡より都に還るとき、(二)張湘州と巴陵城樓に登りし作

顏延年

(三)江漢楚望を分ち、(四)衡巫南服を奠め、(五)三湘洞庭に淪ひ、(六)七澤荆牧に藹たり。塗を經て(七)舊軌を延ひ、(八)闉に登りて川陸を訪ふ。水國地險を周り、河山信に重複。却いて(九)雲夢の林に倚り、前んで(一〇)京臺の囿を瞻る。(一一)清雰岳陽に霽れ、(一二)曾暉瀾澳に薄る。悽たる矣遠きよりする風、傷ましい哉千里の目。萬古往還を陳じ、百代起伏を勞す。存沒竟に何人ぞ、(一三)炯介明淑に在り。請ふ上世の人に從ひ、歸り來りて桑竹を蘊ろん。

【大意】城樓より四方を望めば、江漢の水洋洋として楚國の望をなし、衡巫の二山南服の地を鎭じ、

【一】始安郡。延年始安太守より徵されて中書侍郎となる。都は建業なり。
【二】張湘州。湘州刺史張劭。
【三】江漢。二川の名。左傳に「楚の昭王曰く、江漢睢漳は楚の望なり」とあり。
【四】衡巫。二山の名。南服は南方の地。
【五】三湘。江湘沅の三川をいふ。洞庭は巴陵郡に在る湖。
【六】七澤。楚に七澤あり。荆牧は楚郊なり。藹は草の茂生する貌。
【七】舊軌。もと經し車迹。延は遒なり。
【八】闉。城曲の重門。
【九】雲夢。楚の大澤の名。
【一〇】京臺。楚の遊觀の地。京疑ふらくは荆に作るべし。
【一一】清雰。清氣なり。
【一二】曾暉。日光なり。瀾澳は水隈なり。
【一三】炯介。耿介に同じ、固く節操を執り守ること。明淑は明善。

三湘の水洞庭湖中に注ぎ、七澤の草萋萋として茂るを觀る。始安郡を發し、舊路を經て此地に到るまで、時に城門に登りて山水を望めば河山重複し、後に雲夢澤を見、前に荆臺の園を見、雲岳陽に散じ、日光水隈を照し、悲風遠きより至り、我をして心目を傷めしむ。この地古來幾變遷、人亦存沒幾人なるを知らず。ただ耿介の士獨り其名を留むるのみ。我れ亦古賢の迹に從ひ、官を辭して退耕を事とせん。

(一)都に還る道中の作

鮑明遠

昨夜(二)南陵に宿り、今旦(三)蘆洲に入る。客行日月を惜む。(四)崩波留るべからず。星を侵して早路に赴き、(五)景を畢へて前儔を逐ふ。(六)鱗鱗として夕雲起り、(七)獵獵として晩風遒なり。沙を騰げて黄霧を鬱にし、浪を翻して白鷗を揚ぐ。艫に登りて(八)淮甸を眺め、泣を掩ひて(九)荆流を望む。目を絶めて平原を盡し、時に遠煙の浮ぶを見る。倏悲坐に還つて合ひ、俄(一〇)秋より甚し。

【一】都。揚州をいふ。明遠臨海王の參軍たり、荆州より還るなり。
【二】南陵。縣名。
【三】蘆洲。地名。
【四】崩波。奔波といふが如し。
【五】景。日景なり。前儔は先きに行きし仲間。
【六】鱗鱗。雲の貌。
【七】獵獵。風の聲。
【八】淮甸。淮水の地方、揚州を指す。
【九】荆流。楚水、臨海王を憶ふなり。
【一〇】秋。三秋なり。秋は三

個月あり。

【二】越郷。郷里を去ること。

未だ嘗て戶庭を違らず、安んぞ能く千里に游ばん。誰か古節に乏しく、此の(二)越郷の憂を貽さしむる。

【大意】昨夜は南陵縣に宿りて、今朝は蘆洲に到れり。日月を惜みて疾く都に還らんと務むる故、奔走して暫も留まるを得ず。夙に起きて途に上り、前侶を逐ひて夕に至る。風雲急疾にして沙を揚ぐること黄霧の如く、浪を飜すこと白鷗の如し。船上より遙に揚州を望み、又顧みて荆州（臨海王の居る處）を思ひ、倏忽俄頃の際、悲思既に心に合し、三秋の悲を經るが如し。我れ未だ嘗て家を離れざりしに、今忽ち千里の客となる。何ぞ悲まざるを得んや。然れども是れ決して他人の罪にあらず、我に古人の高節なきを以て、（官爵を辭して隱棲する能はざるをいふ）かくは離郷の憂に遇へるなり。

(二)宣城に之かんとし(三)新林浦を出で(三)版橋に向ふ

謝玄暉

江路西南に永く、

【一】宣城。郡名、玄暉宣城郡〜の太守たらんとするなり。
【二】新林浦。浦の名。

(四)歸流東北に鶩す。(五)天際歸舟を識り、雲中江樹を辨ず。旅思(六)搖搖に倦み、孤游昔已に屢〻す。既に祿を懷ふの情を懽ばしめ、復た(七)滄洲の趣に協ふ。(八)囂塵茲より隔り、賞心此に於て遇ふ。(九)玄豹の姿なしと雖も、終んに南山の霧に隱れん。

【大意】吾れ宣城に赴任せんとし、長江を西南に遡れば、水路遠くして盡きず、江水獨り海に歸向し、洋洋として東北に流る。江廣くして一望空濶、ただ歸舟江樹を天雲の際に望むのみ。われ既に各地に轉轉して、客遊に倦み、獨行することも亦屢〻なり。既に祿を得て宦せるを歡べるに、今宣城大守となり、閑散にして風景よき地に赴くは、復た隱居の趣をも幷せ得たりといふべし。此に俗塵を離れて會心の事に遇ふ。我に玄豹の姿なしと雖も、願くは宣城に隱居して、世の害を免れんことを。

【三】版橋。一に板橋に作る。版板相通ずるなり。浮橋を結んで水を渡す處。
【四】歸流。東海に適歸する江流。
【五】天際。此二句は江水の極めて廣きをいふ。
【六】搖搖。不定の貌。
【七】滄洲。隱者の居る處。
【八】囂塵。俗塵といふが如し。
【九】玄豹。列女傳に『陶答子陶を治むること三年、名譽興らず、家富三倍す、其妻兒を抱いて泣く、姑怒りて以て不祥となす、妻曰く「妾聞く南山に玄豹あり、霧に隱れて七日食はず、以て其衣毛を澤し其文章を成さんと欲す、故に藏れて以て害に遠ざかる、犬豕に至るまで肥以て之を取らば、禍に遭ふこと必せり」と、期年にして答子の家果して盜誅せらる』とあり。

(一)敬亭山

謝玄暉

茲山百里に亙り、(二)合沓として雲と齊し。(三)隱淪既に已に託し、(四)靈異居然として棲む。上に干して白日を蔽ひ、下に屬りて廻谿を帶ぶ。交藤荒れて且つ蔓ひ、(五)樛枝聳えて復た低る。獨鶴方に朝に唳き、(六)饑鼯此に夜啼く。(七)渫雲已に漫漫たり、多雨亦(八)凄凄たり。我が行(九)組を紆ふと雖も、兼ねて(一〇)幽蹊を尋ぬるを得たり。源に緣る殊に未だ極らず、歸徑窅くして迷ふが如し。要して(一一)奇趣を追はんと欲し、此に卽いて(一二)丹梯に陵る。皇恩竟に已んぬる矣、茲理庶くは睽くなからんことを。

【大意】此山は横には百里に亙り、縱には高く雲に入る、中に隱者あり、靈仙ありて棲めり。藤蔓交り荒れ、曲枝高低し、鶴朝に唳き鼯夜號び、雲まとひ雨そそぐ。吾が此行郡守(宣城太守)の組綬を帶ぶと雖も、然も兼ねて幽隱の迹を尋ぬるを得たり。山徑を尋ぬること、未だ深からざれど

【一】敬亭山。宣城縣の北十里に在り。
【二】合沓。高き貌。
【三】隱淪。隱逸なり。
【四】靈異。靈仙なり。居然は安んずる貌。
【五】樛枝。曲れる枝。
【六】饑鼯。飢ゑたるムササビ。
【七】渫雲。舒びひろがれる雲。漫漫は廣布する貌。
【八】凄凄。寒冷の貌。
【九】組。綬なり。
【一〇】幽蹊。山徑なり。
【一一】奇趣。仙奇なり。
【一二】丹梯。山峰の雲霞に入る處。

も、歸路遠くして迷はんと欲す。然も仙奇を求めんと欲して、更に山巔に登りぬ。天子の恩我に於て終に止みぬ。この仙奇を求むの理、ただ乖くなからんことを庶幾ふのみ。

(一)休沐重ねて還る道中

謝　玄暉

(二)薄游して第く(三)告に從ふ。思閑にして罷め歸らんことを願ふ。(四)邛に還りて歌賦似たり、(五)汝に休ひて車騎非なり。(六)灞池別るべからず、(七)伊川重ねて違り難し。(八)汀葭稍〻靡靡たり、(九)江菱復た依依たり。田鶴遠く相叫び、(一〇)沙鴇忽ち爭ひ飛ぶ。雲端に楚山見え、(一一)林表に吳岫微なり。試に(一二)征徒と望めば、鄉淚盡く衣を霑す。此の(一三)盈罇の酌に賴り、景を含んで(一四)芳菲を望む。我に問ふ何事にか勞する、(一五)霑沐して淸徽を仰ぐ。志の袁紹は濮陽令たり、車徒甚だ盛なり、將に界内に入らんとして曰く、吾が輿服豈許子をして見しむべけんやと、遂に單車を以て家に歸る。

【一】休沐。休暇なり。還とは丹陽より還るなり。丹陽は卽ち金陵なり。

【二】薄游。薄宦なり。

【三】告。休沐なり。

【四】邛。蜀の臨邛なり。漢の司馬相如臨邛令と相善し。相如往きて臨邛の都亭に舍す。

【五】汝。後漢の許劭は汝南の人なり、郡の功曹たり、同郡の人なり。

【六】灞池。池の名、長安にあり、漢の枚乘に臨灞池遠訣賦の作あり。

【七】伊川。川の名、洛陽の附近にあり。

【八】汀葭。渚に生ずるアシ。

【九】靡靡は風に隨ふ貌。江菱。水邊に生ずるチギ。依依は風に隨ふ貌。

【一〇】沙鴇。鴇は水鳥の名。

【一一】林表。林外なり。吳岫は吳山なり。

【一二】征徒。行旅を俱にする從者。

【一三】盈罇。酒を滿せる樽。

狹くして(一六)軒冕を輕んじ、恩甚しくして(一七)重闈を戀ふ。(一八)歲華春酒あり、(一九)初服郊扉に偃せん。

【大意】吾れ休暇を賜りて歸らんとするに臨み、坐に骸骨を乞ひて罷め歸らんことを思ふ。我れ鄉に歸るも、歌賦は司馬相如の妙なるに似たれども、車騎の盛は袁紹の如くなる能はざるを恥ぢ、灞池伊川亦別れ去り難きを感ず。(洛陽長安二京の別れ去り難きを以て、丹陽の去り難きに喩ふるなり)途に葵葭の風に靡くを見、水禽の叫ぶを聞き、吳楚の山岳を望み、因つて望鄉の淚を濺ぎ、僅に樽酒を酌み春色を眺めて、鄉愁を解くのみ。我れの心を勞する所以は、天子の恩澤に浴するが爲なり。我もとより官位を重んぜざれども、主恩の渥きを思ひては、宮闕を戀はざる能はず。願くは休沐により、官を退き、此の春華の時に方り、春酒を酌みて故居に高臥せんことを。

【一六】軒冕。車冠なり。官位に喩ふ。

【一七】重闈。天子の重門。

【一八】歲華。春景色をいふ。

【一九】初服。未だ仕へざる以前の服。

(一)晚に(二)三山に登り、還りて(三)京邑を望む

謝　玄暉

灞涘に長安を望

【一】三山。山の名、江寧縣の〻北十二里にあり。

【二】京邑。丹陽。卽ち金陵。

み、㊃河陽に京縣を視れば、白日㊄飛甍に麗き、㊅參差として皆見るべし。㊆餘霞散じて綺を成し、澄江靜にして練の如し。喧鳥春洲を覆ひ、㊇雜英芳甸に滿つ。去りて方に㊈滯淫し、懷ひて歡宴を罷む。㊉佳期悵として何れの許ぞ、淚下りて流霰の如し。情ありて鄉を望むを知る、誰か能く鬢變せざらんや。

【三】灞涘。灞水の岸、長安は漢の西京。ここは丹陽に喩ふ。
【四】河陽。縣名。京縣は洛陽ここは丹陽に喩ふ。
【五】飛甍。高き棟瓦。
【六】參差。高低不齊の貌。
【七】餘霞。日沒後のユフヤケ。綺はアヤギヌ。
【八】雜英。色色の花。芳甸は春野なり。
【九】滯淫。久留なり。
【一〇】佳期。鄉に歸るの期。

【大意】昔王粲は七哀詩を作りて、「南、灞陵の岸に登り、首を回らして長安を望む」と詠じ、潘岳は河陽縣の詩を作りて、「領を引いて京室を望めば、南路伐柯に在り」と詠じぬ。今我れ之に倣ひ、三山より丹陽を望めば、丹陽の屋瓦參差として雙眸の中に收まる。日落ちて紅霞錦綺の如く、江流靜にして練の如く、花鳥の春郊に相雜るを見る。我れ鄉を去りて既に久しく、鄉を懷ひて歡宴をなす能はず。歸期亦何れの時なるを知らず、淚下りて霰の如し。ああ有情の人望鄉の愁を抱く者誰か鬢變じて白とならざらんや。

(二)京路夜發

謝玄暉

【一】京路云云。丹陽より宣城郡に行くなり。

㊁擾擾として夜裝を整へ、㊂肅肅として徂兩を戒む。曉星正に㊃寥落たり、晨光復た㊄泱漭たり。猶ほ餘露の團なるを霑し、稍朝霞の上るを見る。故鄉㊅邈として已に夐に、山川脩く且つ廣し。㊆文奏方に前に盈ち、人を懷ひて心賞を去る。躬を勑へて每に㊇跼蹐し、恩を瞻て唯㊈震蕩す。行いて路の長きに倦めども、㊉歸鞅を稅すに由なし。

【大意】われ宣城に之かんとし、夜旅裝を整へて丹陽を發すれば、夜將に明けんとして星稀に、日光未だ明ならず、草露尙ほ團團として東天に紅霞を見る。道長遠にして山川相錯る。思ふに郡に至るの後は、簿書定めて前に盈つらん。京邑の故人を懷へば亦既に心賞に違ふ。我れ常に自ら戒愼し、皇恩を思ひて恐懼す。故に行路長しと雖も、駕を駐めて休息する能はず。

【二】擾擾。混雜する貌。
【三】肅肅。嚴敬の貌。徂兩は往く車輛。
【四】寥落。星の稀なる貌。
【五】泱漭。不明の貌。
【六】邈。遠き貌。
【七】文奏。簿書なり。
【八】跼蹐。愼み恐るること。
【九】震蕩。畏懼なり。
【一〇】歸鞅。宣城に歸る駕。

荆山を望む

江文通

(一)義を奉じて江漢に至り、始めて(二)楚塞の長きを知る。南關(三)桐栢繞り、西岳(四)魯陽出づ。寒

【一】義を奉ず。義を墓ふといふが如し。江漢は荆楚の境に在る二川の名。
【二】楚塞。楚地なり。

郊留影なく、秋日清光を懸く。悲風重林を撓し、雲霞川漲蕭し。(五)歳晏れて君如何、(六)零涙衣裳を霑す。(七)玉柱空しく露に掩はれ、金樽坐に霜を含む。一たび(八)苦寒の奏を聞かば、再び(九)豔歌をして傷ましめん。

【大意】吾れ建平王の高義を慕ひて楚地に來り、(時に文通、建平王景素に五經を授く。高義を慕ふとは王を尊んで言へるなり)始めて楚地の廣大なるを知る。南には桐栢山の關塞をなすあり、西には魯陽山の聳ゆるあり。今や時正に秋、郊野蕭條として片影を留めず、天日澄みて光輝清く、風雲山川を振ひて寒し。我れ年老いて此の悲秋に遇ひ、涙流れて衣裳を沾し、琴を彈じ酒を酌むも、霜露の氣に勝つ能はず。此時一たび苦寒の曲を聞かば、則ち美豔の歌をして亦悲傷せしめん。

【三】桐栢。山の名。
【四】魯陽。山の名。
【五】歳晏。年老いたるに喩ふ。君とは文通自ら謂ふ。
【六】零涙。落涙なり。
【七】玉柱。琴なり。
【八】苦寒。古の歌曲の名。
【九】豔歌。古の歌曲の名。

丘希範

旦に(一)漁浦潭を發す

漁潭霧未だ開けず、
(二)赤亭風已に颺る。

【一】漁浦潭。富春の東三十里にあり。希範新安郡太守となり、此潭を經て宿し、明日早く發し、中流に至りて此詩を作る。

(三)櫂歌中流に發し、(四)鳴鞞沓障に響く。村童忽ち相聚り、野老時に一望す。詭怪石象を異にし、嶄絶峰狀を殊にす。(五)森森として荒樹齊しく、(六)析析として寒沙漲る。藤垂れて島陟り易く、崖傾いて嶼傍ひ難し。信に是れ永く幽棲せん、豈徒暫く清曠なるのみならんや。(七)坐嘯昔委するあり、(八)臥治今尚ふべし。

【大意】旦に漁浦潭を發すれば、霧深く罩めて未だ開けず、赤亭山に風の吹き颺るを見る。中流に櫂歌を揚げ、山中に鞞を鳴らして興ずれば、村童野老集りて之を見る、純朴の風以て見るべし。潭には怪石ありて各象を異にし、山は峻嶮にして其狀同じからず。野樹長密し寒風沙を拂ひ、藤垂れて島に陟ること易く、崖の傾く所は又往き難し。誠に永く幽棲すべき好地にして、ただ一時清遊すべきのみにあらず。坐嘯の事昔人既に賢才に委任したり。臥治の事我今自ら庶幾ふ所なり。

【二】赤亭。山の名。
【三】櫂歌。櫂を鼓して歌ふこと。
【四】鳴鞞。鞞は小鼓なり。沓障は重疊せる山。
【五】森森。長密の貌。荒樹は野樹なり。
【六】析析。風の聲。
【七】坐嘯。後漢の岑晊、字は公孝、幹國の器あり、太守成瑨請ひて功曹となす、時に謠つて曰く、南陽太守岑公孝、弘農成瑨但坐嘯と。
【八】臥治。漢の武帝、汲黯を拜して淮陽太守となさんとす黯受けず、帝曰く、君淮陽を薄しとするか、顧ふに淮陽の吏人相得ず、朕ただ君の重きを得て臥して之を治めしめんと。

早に(一)定山を發す

沈休文

(二)夙齡遠壑を愛す、(三)晩涖奇山を見る。峰を綵虹の外に標げ、嶺を白雲の間に置く。傾壁忽ち斜に竪ち、絶頂復た孤り圓なり。海に歸して流(四)漫漫たり、浦を出でて水(五)濺濺たり。野棠開いて未だ落ちず、山櫻發いて然えんと欲す。歸るを忘れて(六)蘭杜に屬し、祿を懷ひて(七)芳荃に寄す。眷みて言に(八)三秀を採り、徘徊して九仙を望む。

【大意】われ少年の時より此山(定山)を見んことを思ひしが、今晩年に至り赴任の途始めて之を見るを得たり。峯嶺高く雲霓の外に聳え、崖壁斜に立ち、頂は孤圓なり。江水其下を流れ、濺濺として海に入る。棠櫻花を開いて其色燃ゆるが如し。我が心蘭杜に屬して歸るを忘れ、祿を懷ひて去らんとするも、永く其心を芳荃に寄せて去るに忍びず。願くは此山に靈草を採り、之を服して九仙の道を得んことを。

【一】定山。山の名、休文東陽太守となり、定山に宿して早發す。
【二】夙齡。少年の時。
【三】晩涖。涖は臨なり。晩年に官職に臨むこと。
【四】漫漫。平流の貌。
【五】濺濺。流急なる貌。
【六】蘭杜。香草の名。
【七】芳荃。香草の名。
【八】三秀。仙草なり。

(一)新安江水至つて清く、淺深にして底を見る
(二)京邑の游好に貽る

沈休文

眷みて言に(三)舟客に訪ふ。(四)茲川信に珍とすべしと。(五)洞澈深淺に隨ひ、(六)皎鏡冬春なし。千仞(七)喬樹を寫し、百丈(八)游鱗を見る。(九)滄浪も時に濁るあり、(一〇)清濟も涸れて津なし。豈若かんや斯に乘りて去り、俯して石の(一一)磷磷たるに映せんには。紛として吾れ(一二)囂滓を隔つ、寧んぞ衣巾を濯ぐを假らんや。願くは(一三)潺湲の水を以て、(一四)君が纓上の塵を霑さん。

【大意】休文、齊の文惠太子(武帝の子)に親任せられ、其家令となり、吏部郎に累遷し、出でて東陽太守となる、此詩蓋し其途中の作なり、吾れ顧みて同舟の客に謂つて曰く、此川信に珍重すべし。深淺を論せず共に澄澈にして、清明なること春冬の別なく、千仞の高樹も影を水底に寫し如きをいふ。

【一】新安江。十洲記に「桐廬縣、新安東陽の二水ここに合し、仍つて東流して浙江となる」とあり。
【二】京邑。丹陽、卽ち金陵なり。游好は朋友。
【三】舟客。同舟の客。
【四】茲川。新安江をいふ。
【五】洞澈。澄みて底の見ゆること。
【六】皎鏡。清明なること鏡の如きをいふ。
【七】喬樹。高き樹。
【八】游鱗。游魚なり。
【九】滄浪。川の名。
【一〇】清濟。川の名。津は液なり。
【一一】磷磷。水中の石の貌。
【一二】囂滓。塵囂の地。
【一三】潺湲。水の流るる貌。
【一四】君。京邑の游好を指す。纓は冠の紐。

し、百丈の底にも尙ほ游魚を見る。滄浪の水淸しと雖も、時に濁ることあり、淸濟の流も涸れて一滴を留めざることあり。然も此川獨り濁らず涸れず。豈此流に乘じ水石磷磷たる處に我が影を寫すに如かんや。(東陽太守たるの勝れるをいふ。)吾れ旣に京師塵囂の地を去り、以て東陽に行けば、亦衣巾を洗ふの要なし。ただ此水を以て君が冠上の塵を一洗せんことを思ふ。

軍戎

(一)從軍の詩五首

王仲宣

軍に從ひて苦樂あり、ただ問ふ從ふ所誰ぞと。從ふ所神且つ武ならば、焉んぞ久しく(二)師を勞するを得ん。(三)相公關右を征し、(四)赫怒して天威を震ふ。一擧して(五)獯虜を滅し、再擧して(六)羌夷を服す。西のかた邊地の賊を收へ、忽たること俯して遺を拾ふが若し。賞を陳ぬること丘山に越ぎ、酒肉(七)川坻に踰ゆ。軍中(八)飫饒多く、人馬皆溢肥す。(九)徒行乘を兼ねて還り、空しく出で

【一】從軍。魏志に「建安二十年三月、公(曹操)西のかた張魯を征す、魯及び五子降る、十二月南鄭より至る、この行や侍中王粲五言詩を作り以て其事を美す」とあり、此詩是れなり。

【二】師。軍旅なり。

【三】相公。曹操をいふ。關右は關西。

【四】赫怒。盛怒なり。天威は天子の威力。

【五】獯虜。獯鬻なり。外夷の名。

【六】羌夷。外夷の名。

て餘資あり。地を拓くこと三千里、往返速なること飛ぶが如し。歌舞して鄴城に入り、願ふ所獲て違ふなし。晝日(一〇)大朝に處り、日暮薄か言に歸る。外は時の明政に參し、內は家の私を廢せず。禽獸(一一)犧となるを憚るも、(一二)良苗實已に揮く。(一三)負鼎の翁を竊慕し、願くは朽鈍の姿を厲まさんことを。(一四)沮溺に效ひ、相隨つて鋤犂を把る能はず。(一五)夫子の詩を熟覽し、信に言ふ所の非なるを知る。

【七】川坻。川岸なり。

【八】飫饒。飽饜なり。

【九】徒行。步卒なり。乘は騎兵。

【一〇】大朝。曹操の朝廷。

【一一】犧。犧牲なり。

【一二】良苗。嘉穀なり。

【一三】負鼎の翁。伊尹鼎を負ひて湯を干し、遂に湯を扶けて天下に王たらしむ。

【一四】沮溺。長沮と桀溺との二人。論語に「長沮桀溺耦して耕す」とあり。

【一五】夫子。孔子をいふ。孔叢子に「趙簡子夫子を聘す、將に至らんとし、河に及び鳴犢と竇犨との殺されしを聞き、輿を廻らして趣き、操をつくりて曰く、衞に翺翔し、我が舊居に復り、吾が好む所に從はん云云」とあり。

【大意】從軍に苦樂あるは、其主將の如何に由る。主將にして神武ならば、焉んぞ久しく軍旅を勞することあらんや。我が相公(曹操)關西を征して天子の威を震ひ、更に外夷を滅し、西のかた邊地の賊張魯を捕へ、其の易きことを遺ちたるを拾ふが如し。是に於て賞施山丘の如く、酒肉川岸の如く、人馬皆望に飽かざるはなく、步騎相率ゐて還り、嘗て空乏なりし者、今皆餘財あり。地を拓くこと三千里にして、往復の速なること飛ぶが如し。凱歌を奏して鄴城に入り、願ふ所盡く